佐久市埋蔵文化財調査報告書　第185集

枇杷坂遺跡群　ENNSHOUBOU

# 円正坊遺跡Ⅷ

長野県佐久市岩村田 円正坊遺跡 第８次調査

－ト骨・銅釧が出土した弥生後期集落の調査－

2011. 3
学校法人聖啓学園
佐久市教育委員会

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第185集

枇杷坂遺跡群　ENNSHOUBOU

# 円正坊遺跡Ⅷ

長野県佐久市岩村田 円正坊遺跡 第８次調査

－卜骨・銅釧が出土した弥生後期集落の調査－

２０１１．３
学校法人聖啓学園
佐久市教育委員会

H28 号住居址出土「卜骨」

弥生時代後期の装身具（上列右から３点勾玉、他は銅釧）

口絵 2

調査区全景（西半）

H36 号住居址東南隅遺物出土状況（北から）

# 例　　言

1　本書は長野県佐久市に所在する枇杷坂遺跡群円正坊遺跡の第８次発掘調査報告書である。

2　調査は学校法人聖啓学園の学生寮建設に伴う記録保存を目的に佐久市教育委員会が実施した。

3　遺跡名及び所在地　　円正坊遺跡Ⅶ(IEOⅦ)　　佐久市岩村田

4　調査期間及び面積　　発掘調査：平成 21 年 5 月 26 日～７月 31 日

整　　理：平成 21 年 8 月 1 日～平成 23 年 3 月 25 日

開発面積 2,582.37 ㎡　　調査面積 1,133 ㎡

5　当遺跡の発掘調査概要は、佐久市教育委員会文化財課「年報 19」でも報告しているが、本書が最終報告である。

6　本書に掲載した地図は佐久市発行の都市計画図（1：2,500)、佐久市教育委員会作成の遺跡詳細分布図（1：5,000）である。

7　本書で扱っている座標は世界測地系である。

8　本書の作成は小林が行った。

9　本書に掲載した遺構図は、簡易遺方測量で手取りしたものを、図面修正し、Adobe Illustrator でデジタルトレースし作成した。

10　遺物実測は手取りで行い、Adobe Illustrator によりデジタルトレースを行った。

11　写真は、デジタル１眼レフカメラで撮影したものを Adobe Photoshop で補正等を行い Adobe Illustrator により、版組を行った。

12　出土金属器の保存処理は、（株）東都文化財保存研究所が行った。

13　出土動物遺体は室内での自然乾燥後、竹ブラシ、筆によりクリーニングを行った。

16　本書及び発掘調査の図面・写真などの記録及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。



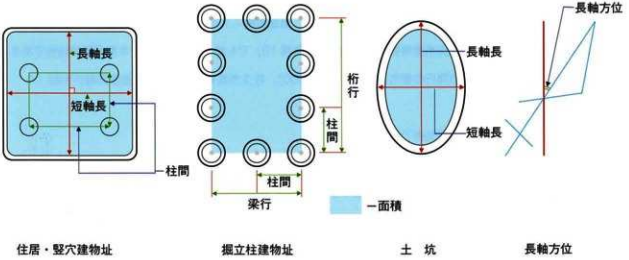
H25 出土巻貝

H28 出土猪牙

カクラン出土鹿角

# 凡　　例

1　遺構の略記号は竪穴住居址－H、竪穴建物址－Ta、土坑－D、溝址－M、ピット－P、周溝墓－OT である。
2　挿図の縮尺は遺構 1/80、遺物 1/4 を基本とする。これ以外のものは、挿図中のスケールを参照されたい。
3　遺構の海抜標高は遺構毎に統一し、水糸標高をスケール上に「標高」として記してある。
4　土層の色調は 1988 年版「新版　標準土色帖」に基づいた。
5　遺物挿図番号、遺物写真番号、遺物観察表番号は一致する。
6　調査区グリットは公共座標の区割りにしたがい、間隔は 4 × 4 m に設定した。
7　遺構の計測値は下図に示した部分の測定値である。遺構の面積は床面積である。壁残高（深度）は最大値である。




8　挿図中における網掛は以下の表現である。

9　土師器坏の分類は 1999 年佐久市埋蔵文化財調査報告書　第 73 集 「西一本柳Ⅱ･Ⅳ」の分類を用いた。

A1　丸底の底部から体部が内湾しながら立ち上がり、短い口縁部が強く外反する。
A2　A1 の口縁部がやや長く、緩やかに外反する。
B　A1 に共伴する高坏の脚部が省略された形態。
C　A2 の口縁部が更に長くなり、口縁部と体部の境に稜を形成して外反するもの。
D1　C の底部が半球状に丸く、深くなったもの。口縁部と体部の境の稜は調整による段や、凹に変化する。
D2　D1 の体部下が浅いもの。
D3　D2 の口縁部と体部の境の、段や凹が省略されたもの。D1･D2 に施されていたヘラミガキ調整も省略化される。
D4　D3 において僅かに名残を止めていた、口縁部と体部の屈曲がなくなり、浅い半球状を呈するもの。内面の底部と体部の境に段を有する。
E1　須恵器坏蓋の模倣、あるいは模倣を原形とするものの内、体部と口縁部の境の段を有するもの。
E2　須恵器坏蓋の模倣を原形とするものの内、体部と口縁部の境の段を有さず、稜を有するもの。
E3　所謂有段口縁坏。

E3　所謂有段口縁坏。

E4　所謂北武蔵型坏。

F1　須恵器坏身の模倣、あるいは坏身の模倣を原形とするもので、口縁部と体部の境に段を有し、口縁部が直立するもの。

F2　須恵器坏身の模倣を原形とするものの内、体部と口縁部の境に段を有さず、稜を有するもので、口縁部が直立するもの。

F3　F1の口縁部が内傾するもの。

F4　F2の口縁部が内傾するもの。

F5　F1の体部が平底から内湾する形態のもの。

G1　半球状で、口縁部が素直に開くもの。

G2　半球状で、口縁部が外反するもの。

G3　半球状で、口縁部が直立するもの。

G4　半球状で、口縁部が内湾するもの。

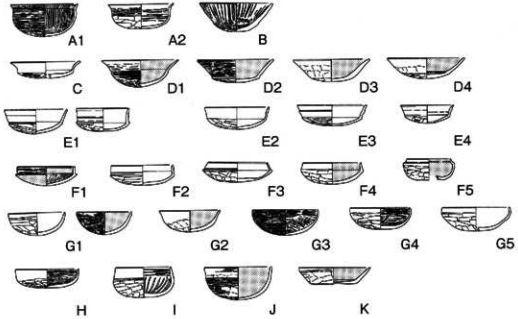
G5　半球状で、口縁部が弱く内傾するもので、口縁部と体部の境が明瞭なもの。E4と同質な焼成・胎土なものを含む。

H　丸みを帯びた平底から口縁部が直立するもの。

I　平底から体部が内湾して立ち上がり、口縁部に至るもの。

J　深い丸底の底部から、内湾気味に立ち上がった体部から、口縁部が緩やかに外反するもの。体部と口縁部の境に稜を有する。

K　平底から口縁部が外傾して開くもの。



# 目　次

出土骨角器

口絵　1・2
例言
凡例
目次

第Ⅰ章　発掘調査の経緯 …… 1

第1節　調査の経緯 …… 1
1 発掘調査に至る経緯 …… 1
2 調査体制 …… 1
3 調査の経緯 …… 2
第2節　遺跡周辺の環境 …… 2
1 遺跡の地理的環境 …… 2
2 遺跡の歴史的環境 …… 3
第3節　調査の方法 …… 4
第4節　試掘調査 …… 6
第5節　基本層序 …… 7
第6節　検出遺構・遺物の概要 …… 7

第Ⅱ章　遺構と遺物 …… 7

第1節　住居址 …… 7
第2節　掘立柱建物址 …… 88
第3節　土坑 …… 89
第4節　溝址 …… 94
第5節　その他の遺構・遺物 …… 97

第Ⅲ章　まとめ …… 106

図版

出土骨角器

# 第Ⅰ章　発掘調査の経緯

## 第1節　調査の経緯

### 1　発掘調査に至る経緯

円正坊遺跡は枇杷坂遺跡群の東南端部分に位置し、標高 700m を僅かに越える。調査地点は西・南方向に低湿地が広がる台地の頂端部にあたり、地山は浅間第一軽石流の堆積層である。過去ににおいて当遺跡内では7次に及ぶ面調査が実施され、何れの調査においても弥生～中世に係わる遺構・遺物が数多く検出されてきた。

今回、学校法人 聖啓学園により佐久長聖高校生徒会の建設が計画されたため、平成 21 年4月 28 日～5月8日にかけて試掘調査を実施した結果、竪穴住居址を主体とする極めて遺構密度の高い遺跡であることが確認されたため、同年5月 11 日に保護協議を行い、設計変更による遺跡保存の検討と、概算の調査予算書を次回協議において提示することを確認した。5月 15 日再度保護協議を行ったが、設計変更による遺跡保存は不可能であるあることが聖啓学園から伝えられ、遺構が破壊される建物部分について、記録保存を目的とする発掘調査を7月末日を期限として実施することとなった。また、表土除去、測量基準杭の打設、現場仮設プレハブ・トイレ等の賃貸借は聖啓学園が直接行うこととなった。

### 2　調査体制

平成 21 年度

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 調査主体者 | 佐久市教育委員会 | 教育長　土屋　盛夫 | | | | |
| 事　務　局 | 社会教育部長 | 工藤　秀康 | | | | |
| | 文化財課長 | 森角　吉晴 | | | | |
| | 文化財調査係長 | 三石　宗一 | | | | |
| | 文化財調査係 | 林　幸彦 | 並木　節子 | 須藤　隆司 | 小林　眞寿 | |
| | | 羽毛田卓也 | 冨沢　一明 | 神津　格（4月～10月） | | |
| | | 上原　学 | 井出　泰章（10月～） | | 出澤　力 | |

平成 22 年度

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 調査主体者 | 佐久市教育委員会 | 教育長　土屋　盛夫 | | | | |
| 事　務　局 | 社会教育部長 | 工藤　秀康 | | | | |
| | 文化財課長 | 森角　吉晴 | | | | |
| | 文化財調査係長 | 三石　宗一 | | | | |
| | 文化財調査係 | 林　幸彦 | 並木　節子 | 須藤　隆司 | 小林　眞寿 | |
| | | 羽毛田卓也 | 冨沢　一明 | 上原　学 | 井出　泰章 | |
| | | 出澤　力 | | | | |
| 調査体制 | 調査担当者 | 林　幸彦 | 佐々木宗昭 | 小林　眞寿 | | |
| | 調査員 | 赤羽根　篤 | 赤羽根充江 | 浅沼　勝男 | 甘利　隆雄 | |
| | | 飯塚　一男 | 磯貝　律子 | 市川　光吉 | 岩崎　重子 | |
| | | 岡村千代美 | 柏木　義雄 | 加藤　信一 | 川原田二男 | |
| | | 木内　修一 | 小林喜久子 | 小林　敏雄 | 小山　功 | |
| | | 澤井　知春 | 清水　澄生 | 大工原達江 | 高橋　章 | |
| | | 中澤　登 | 中山　清美 | 花岡美津子 | 細井里江子 | |
| | | 細萱ミスズ | 堀籠　滋子 | 堀籠　保子 | 宮川真紀子 | |
| | | 百瀬　秋男 | 山口ひとみ | 山田　叔正 | 山田　英輝 | |
| | | 山村　容子 | 柳澤　孝子 | 柳沢千賀子 | 油井　満芳 | |
| | | 横尾　敏雄 | 依田　三男 | 渡辺久美子 | 中嶋フクジ | |

## 3　調査の経緯

**平成 21 年度**

平成 21 年

| | |
|---|---|
| 4 月 7 日 | 学校法人聖啓学園より文化財保護法に基づく埋蔵文化財発掘の届出（第 93 条）<br>長野県教育委員会教育長に東信教育事務所経由で副申 |
| 4 月 24 日 | 長野県教育委員会教育長より通知（発掘調査を行う） |
| 4 月 28 日 | 試掘調査開始 |
| 5 月 8 日 | 長野県教育委員会教育長に通知 |
| 5 月 11 日 | 第 1 回保護協議　文化財課－（株）第一設計 |
| 5 月 15 日 | 第 2 回保護協議　文化財課－聖啓学園 |
| 5 月 26 日 | 重機による表土除去等開始。<br>長野県教育委員会教育長に通知（試掘調査終了報告書） |
| 6 月 1 日 | 調査員による発掘調査開始。<br>遺構の検出・掘り下げ・記録に着手。<br>長聖中学先生方現場見学。 |
| 6 月 3 日 | 測量基準杭の設定。 |
| 6 月 24 日 | 岩村田小学校生徒 1 名、社会科の学習のため現場見学（母親同伴）。 |
| 7 月 3 日 | 銅鈴出土する。 |
| 7 月 14 日 | 梅雨明け。 |
| 7 月 22 日 | 日蝕。 |
| 7 月 31 日 | 現場調査終了。機材を撤収する。 |
| 8 月 3 日 | 出土遺物・記録の整理を開始。 |
| 8 月 6 日 | 長野県教育委員会に発掘調査終了報告書を提出する。<br>佐久警察署長に埋蔵物発見届を提出する。 |
| 10月 | 出土した銅鈴 4 点及び弥生時代の鉄器 5 点の保存処理を、指名競争入札により東都文化財研究所に委託する。（平成 22 年 3 月 19 日完了） |

平成 22 年

| | |
|---|---|
| 3 月 19 日 | 本年度の調査を終了する。 |

第 1 図　長野県における佐久市の位置

**平成 22 年度**

平成 22 年

| | |
|---|---|
| 4 月 26 日～ | 出土遺物、記録の整理、報告書の作成。 |

平成 23 年

| | |
|---|---|
| ～3 月 25 日 | すべての調査・作業終了。報告書刊行。 |

調査風景

# 第 2 節　遺跡周辺の環境

## 1　遺跡の地理的環境

新生「佐久市」は平成 17 年 4 月 1 日、旧佐久市、臼田町、浅科村、望月町が合併し誕生した。位置的には長野県の東部にあり、群馬県境を有する。日本で最も海から遠い地点が市内に存在する内陸の市であり、高燥冷涼で寒暖の差が大きい気候であり、年間降水量は 1,000 ㎜前後と少なく、年間日照時間 2,000 時間前後の晴天率の高い地域である。

円正坊遺跡は枇杷坂遺跡群の東南端部分に位置し、標高 700m を僅かに越える。調査地点は西・南方向に低湿地が広がる浅間山の火砕流台地の頂端部にあたり、地質的には浅間火山の「軽石流二次堆積物」により形成されており、土壌的には、厚層腐植質黒ボク土壌である。また、植生は代償植生であり、市街地と緑の多い住宅地に分かれる。

## 2　遺跡の歴史的環境

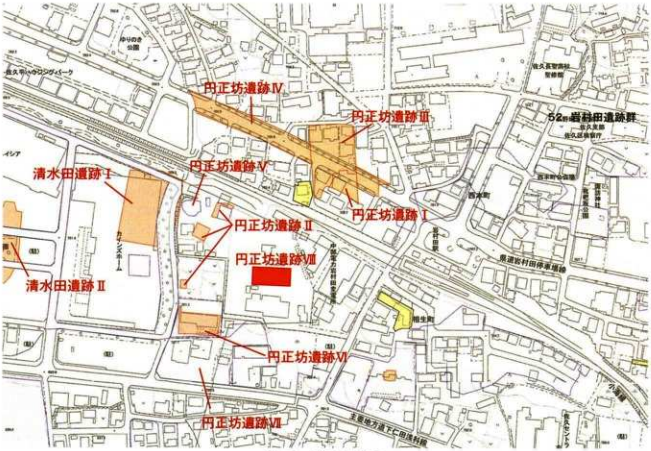
現在、円正坊遺跡で確認されている人間の活動の痕跡は、縄文時代早期に遡る。遺構は確認されていないが、押型文土器の破片が断片的に出土している。早期は約１万年～６千年前と考えられており、日本列島全体の気候も温暖化の時期を迎え、人々が本格的に定住生活を開始する時期と考えられている。佐久地方でも北部の浅間火山軽石流により堆積した台地が安定し、人々は狩猟や採集のため当遺跡を往来していたのであろうか？

次に人間の活動の痕跡が認められるのは弥生時代中期後半で、集落が出現する最初の時期である。円正坊遺跡Ⅱ・Ⅴにおいて竪穴住居址が検出されている。この後、後期に向かい集落規模は次第に大きくなり、後期後半にピークをむかえる。

古墳時代前期に一旦集落は姿を消すが、中期になると再び営まれるようになり、平安時代まで連綿と続くようである。この地域は古代の大井郷の一部に該当するが、近年当遺跡西方に位置する小諸境の近津遺跡で複数発見されている「大井」の墨書や刻書が記された土器の存在から、古代「大井郷」の核地域は近津であろうと推測されるが、円正坊遺跡も遜色のない規模であり、古墳時代中期から後期にはむしろ凌いでいる。

平安時代（1178 年）にはこの地域が八条院領「大井荘」であったことが知られている。その後鎌倉時代になると、甲斐源氏の加々美遠光が信濃守となり、その子小笠原長清の七男朝光が大井荘に土着し、大井氏を名乗るようになる。大井氏によりこの地域は発展し、四隣譚藪によれば戦国時代には「その賑わい国府にまされり」と例えられる隆盛を誇った。また、四隣譚藪の廃大井郷之図の中に「園勝寺」と言う寺が画かれており、これが遺跡名の円正坊の由来とされている。実際、当遺跡の７次調査において、12 世紀末～ 15 世紀の陶磁器を伴う中世遺構群が検出されており、これらの遺構群が「園勝寺」あるいは「円正坊」である可能性が高い。

遺跡周辺の地形（昭和 47 年当時の航空写真　（株）東洋航空事業撮影）




第２図　周辺遺跡分布図

## 第３節　調査の方法

**遺跡名・調査区**

佐久市詳細分布図の遺跡に照らし合わせ、円正坊遺跡とした。Ⅶは調査次数である。

調査区を網羅するように、４ ×４ｍのグリットを最小単位とし、国家座標に沿って 40×40ｍの区画を設定した。この40ｍの区画は北東隅を起点に西方向にア、イ、ウ、エ･･･南方向に１、２、３、４････とグリット単位に記号をふり、各グリットの北東隅をグリット名とした。

**遺跡略記号・遺構略記号**

遺跡略記号はIEOⅦである。これは以下の決まりに従い付けられている。

○アルファベット３文字の先頭は旧大字のローマ字表記の頭文字である。　Ｉ＝岩村田

○アルファベット３文字の２番目は遺跡名のローマ字表記の頭文字である。　Ｅ＝ＥＮ

○アルファベット３文字の３番目は遺跡名のローマ字表記の任意の文字である。　Ｏ＝ＢＯ

○末尾のローマ数字は発掘調査回数を表す。

遺構略記号は以下のとおりであり、佐久市共通である。

Ｈ＝住居址（竪穴住居址である。現在のところ佐久市内では明確な平地住居は確認されていない。）

Ｆ＝掘立柱建物址

Ｄ＝土坑（陥穴、貯蔵穴等）

Ｐ＝ピット（柱状のものを建てたと思われる、多くは小径の掘り込み）

Ｍ＝溝址（環濠、水路、道路、堀等）

ＯＴ＝周溝墓

**遺構調査**

住居址は均等に４分割し、対面する２区画を掘り下げ土層の観察・記録を行った後完掘し、床面を精査し、柱穴・炉・カマド等を適宜分割し、土層の観察・記録を行い、最終的に平面の記録を行った。遺物は４分割した各区毎に取り上げ、床面上の遺物に関しては連続するNoを付け３次元の記録を行い取り上げた。

土坑は長軸方向に沿って２分割し、半截により土層の観察・記録を行った後完掘した。遺物は半截された区を東西南北の英語頭文字を区として取り上げた。

ピットも土坑と同様であるが、遺物はピットの遺構Noで一括した。

溝址・周溝墓は短辺方向に任意の場所で区分し、土層を観察・記録した。遺物は区毎に取り上げた。

遺構外の遺物はグリット毎に取り上げた。

**遺構測量**

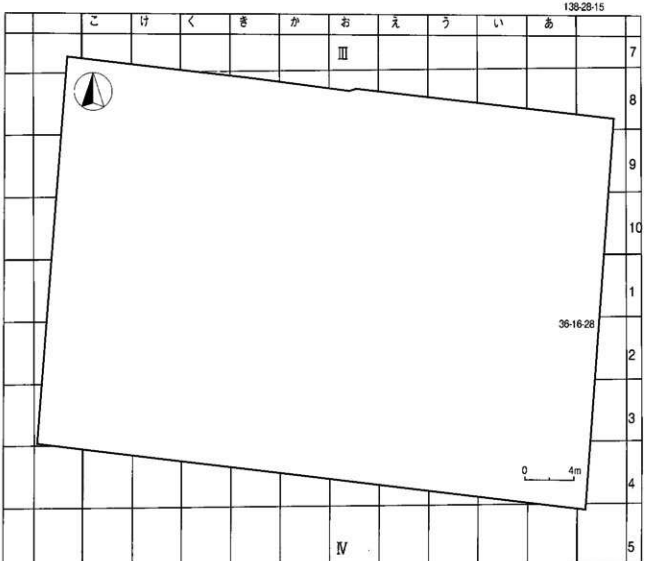
グリット杭を用いた簡易遺方測量でおこなった。

**写真**

現場での写真は、デジタル一眼レフカメラによる RAW 画質モードと、35 mm一眼レフカメラによるカラーリバーサルで同一カットを各々記録した。遺物写真はデジタル一眼レフカメラで撮影し、EPS データ形式で報告書に使用した。

**遺物の整理等**

遺物洗浄は竹ブラシを用い手で行い、室内で自然乾燥させた。注記は白色のポスターカラーにより行い、薄めたラッ




第３図　グリット配置図

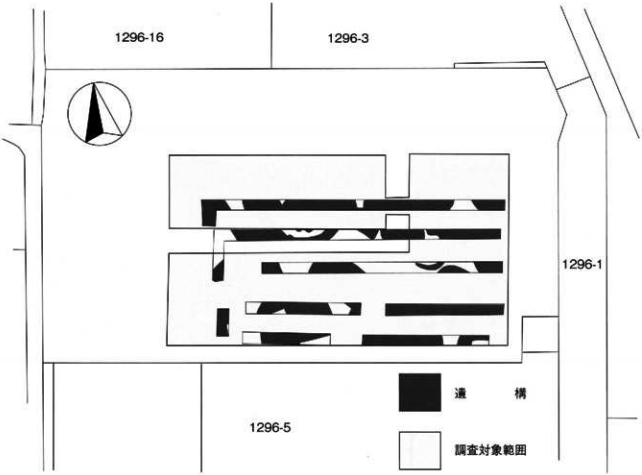
カーをその上から塗布した。遺物の接合にはセメダインCを用いた。遺物復元の際の充填材にはエポキシ系樹脂を用いた。出土金属のうち、弥生時代のものは指名競争入札により、(株)東都文化財保存研究所に委託し保存処理を行った。その他についてはバキュームシーラーにより、(株)三菱ガス化学社製エスカルフィルムに真空パックし、現状保存した。遺物実測、拓本は手取りで行った。最終的な遺物の保管に際しては、報告書を台帳として、報告書掲載遺物と未掲載遺物に区分し、コンテナに分類ラベルを貼り収蔵庫に収納した。

**報告書**

表・文書はアドビ社製「イラストレーター」で作成した。また、遺構・遺物共に図も「イラストレーター」により、デジタルトレースを行った。写真・拓本はアドビ社製「フォトショップ」により補正・加工を行った。これらを最終的に「イラストレーター」により、ページ単位で編集し、印刷原稿を作成し、イラストレーターのファイル形式で入稿した。日本語FEPはジャストシステム社製「ATOK」を用いた。

## 第4節試掘調査

試掘調査は学校法人聖啓学園の依頼を受け、平成21年4月28日～5月8日にかけて実施した。調査対象面積2,582.37㎡に対し232㎡をトレンチ調査した。そのトレンチ位置を第4図に示した。昭和鉄合金株式会社岩村田工場時代の撹乱が全面に認められるが、弥生時代後期と古墳時代後期の竪穴住居址が全体に展開しており、地形は南向きの斜面を呈していることが判明した。遺構検出はP1上面で行われ、検出面までの深度は70㎝～160㎝であったが、これは旧地表上に盛土を行い、南斜面地形を現在の平坦な地形に造成した結果である。なお、昭和鉄合金株式会社の操業時に排出された、溶鉱炉のガラス質のスラグは緑色を帯びるものの黒曜石に近似している。人頭大に及ぶ大きさのものもかつては散乱していたようである。これを長年にわたり多くの子供達が採取しており、佐久地方の遺跡に投棄されたものも皆無とは言えない。本物の黒曜石と間違わないように注意が必要である。




第4図試掘調査状況図

## 第５節　基本層序

基本層序は第５図のとおりである。遺構検出は第Ⅴ層上面で行ったが、断面では第Ⅳ層上面で可能である。しかし、第Ⅳ層は黒褐色を呈しており、遺構覆土の色調と近似しているため、平面では識別が困難である。第Ⅲ層は旧地表を構成していた畑の耕作土であり、これにより、第Ⅳ層が削平されている可能性も高い。第Ⅱ層は工場時代の盛土、第Ⅰ層は現状駐車場化に際しての砕石による盛土である。

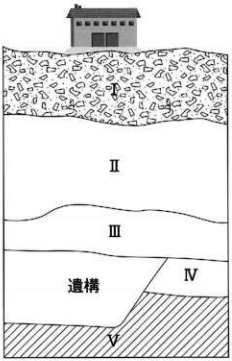
Ⅰ－砕石

Ⅱ－盛土

Ⅲ－灰黄褐色土層（旧畑耕作土）（10YR5/2）

Ⅳ－黒褐色土層（10YR3/2）。10YR7/4 ローム少含。

Ⅴ－にぶい黄橙色土層（10YR7/4）。浅間火山第１軽石流の堆積



第５図　基本層序模式図

## 第６節　検出遺構・遺物の概要

検出された遺構・遺物の概要は以下のとおりである。

○遺構　竪穴住居址－41 棟、掘立柱建物址－２棟、土坑－11 基、溝址－３条、円形周溝墓－１、ピット－66 基

○遺物　縄文土器（早期押型文）、弥生土器（中・後期）、土師器（古中～平安）、須恵器（古～平）、灰釉陶器、石器・石製品、土製品、金属器・金属製品（銅・鉄）・玉類・獣骨、貝殻

# 第Ⅱ章　遺構と遺物

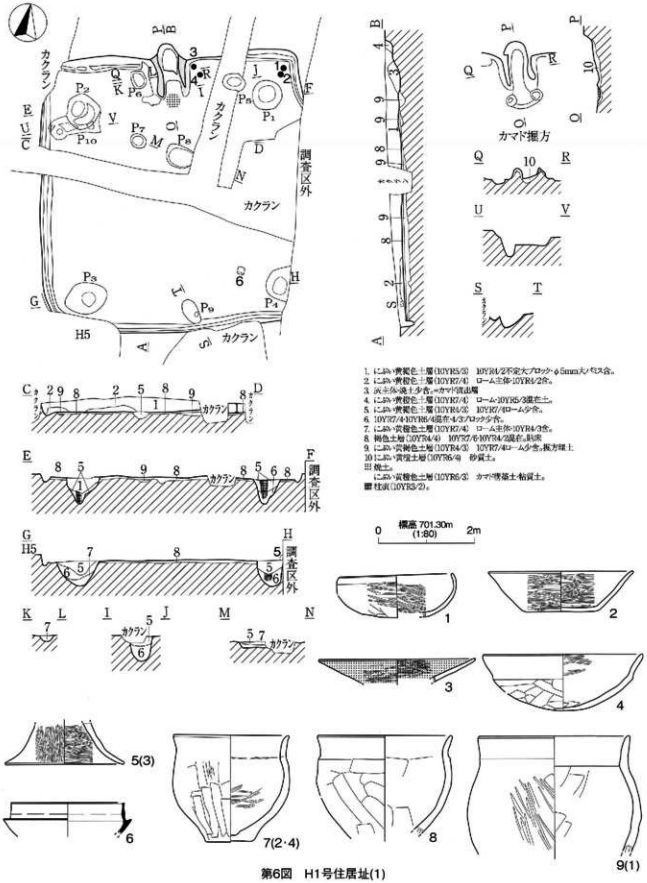
## 第１節　住居址

**○Ｈ１号住居址**

Ⅲあ 10 グリットで検出された。Ｈ５・Ｈ15・Ｄ８を切り、攪乱による破壊を受けている。調査区外に延びるため、東南隅部分が未調査である。N－11°－Wに長軸方位をとる。長軸長－8.76m× 単軸長－5.52m、深度 0.3m の規模である。P1 ～ P4 の４基が主柱穴であり、柱間－4.4m で均等に配置される。柱はφ16 cmの規模である。壁下には周溝が巡り、カマドは北壁の中央部分に構築されている。袖部分は地山削り出しであり、先端部分に石を立て、天井石を架けた跡、粘土で被覆している。カマドと対峙する南壁下には出入口施設の基礎と思われる P9 が存在する。

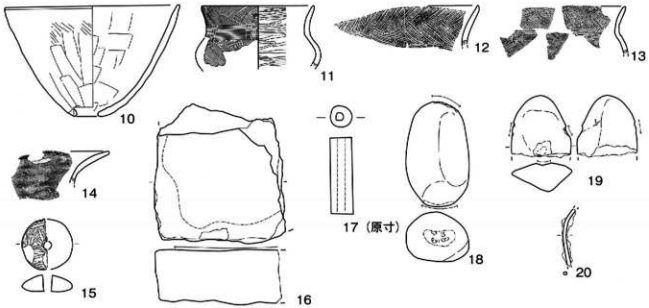
遺物は須恵器、土師器、弥生土器、土製品、石器、鉄器が出土している。須恵器は坏が１点認められるだけであり、破片であるが、中村編年の陶邑Ⅱ形式２～３段階に比定できそうな資料である。土師器は坏、鉢、高坏、甕、甑の器種が認められる。坏は「西一本柳Ⅲ･Ⅳ」の分類にしたがえば、D2 や F4 形態であり、鉢は E2 形態である。高坏は壺の口縁部の可能性も強い。甕はいずれも器壁が厚く、頸部のくびれは弱い。胎土は砂粒が多量に含まれている。甑は単孔である。弥生土器は甕と壺の破片が出土している。甕は横位の櫛描斜走文と簾状文が施され、壺は赤彩されている。全て混入である。土製品は紡錘車が出土している。ほぼ 1/2 が残存しており、全面にヘラミガキが施されている。弥生時代の物であろうか？石器には砥石、磨・敲石、敲石が認められる。石製品として、黒色を呈する管玉が１点出土している。鉄器は紡錘車の軸と思われる物が１点出土している。

以上の出土遺物の特徴から、本址の年代は聖原遺跡の時期区分－古墳時代Ⅱ期に該当し、６世紀中葉と考えられる。

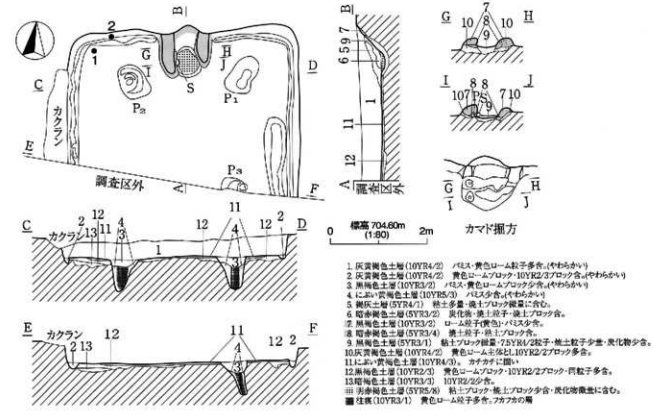



1. にぶい黄褐色土層(10YR5/3)　10YR4/2不定大ブロック・φ5mm大パミス含。
2. にぶい黄橙色土層(10YR7/4)　ローム主体・10YR4/2含。
3. 炭・焼土少含。カマド掘出層
4. にぶい黄橙色土層(10YR7/4)　ローム・10YR5/3混在土。
5. にぶい黄褐色土層(10YR4/3)　10YR7/8ローム少含。
6. 10YR7/4・10YR6/4混在・4/3ブロック少含。
7. にぶい黄橙色土層(10YR7/4)　ローム主体・10YR4/3含。
8. 褐色土層(10YR4/4)　10YR7/6・10YR4/2混在。鉄滓
9. にぶい黄褐色土層(10YR4/3)　10YR7/6ローム少含。板方様土
10. にぶい黄橙土層(10YR6/4)　砂質土。
Ⅲ 焼土。
にぶい黄橙色土層(10YR6/3)　カマド構築土・粘質土。
■ 柱痕(10YR3/2)。

第6図　H1号住居址(1)




第７図　H1 号住居址 (2)

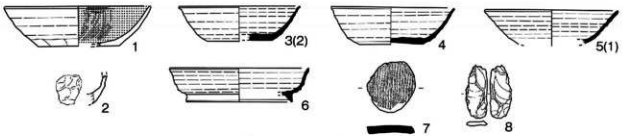



第８図　H2 号住居址 (1)

○H2 号住居址

Ⅳく４グリットで検出された。H18 号住居址を切る。南方向に調査区外に延びるため、東南・西南両隅を含む 30%ほどが未調査である。N－11°－W に長軸方位をとる。長軸長は不明、単軸長－4.94m、深度－0.45m、柱間は南北が

2.3m、東西が 2.4m にほぼ均等配置されるようである。柱はφ20 cm前後の規模であった。壁下には周溝が巡り、北壁のほぼ中央部分に粘土でカマドが構築されていた。




第９図　H2 号住居址 (2)

遺物は、土師器、須恵器、土製品、石材が出土している。土師器は坏と手捏が認められる。坏は内面にヘラミガキ後黒色処理が施される。外底処理はヘラケズリである。手捏は体部片であり、全容は不明である。須恵器は坏と有台坏が出土している。坏の外底には回転糸切痕が残る。坏も有台坏も火襷が顕著である。土製品は須恵器の甕片を再利用した土器片円盤である。石材は石製模造品の素材である。

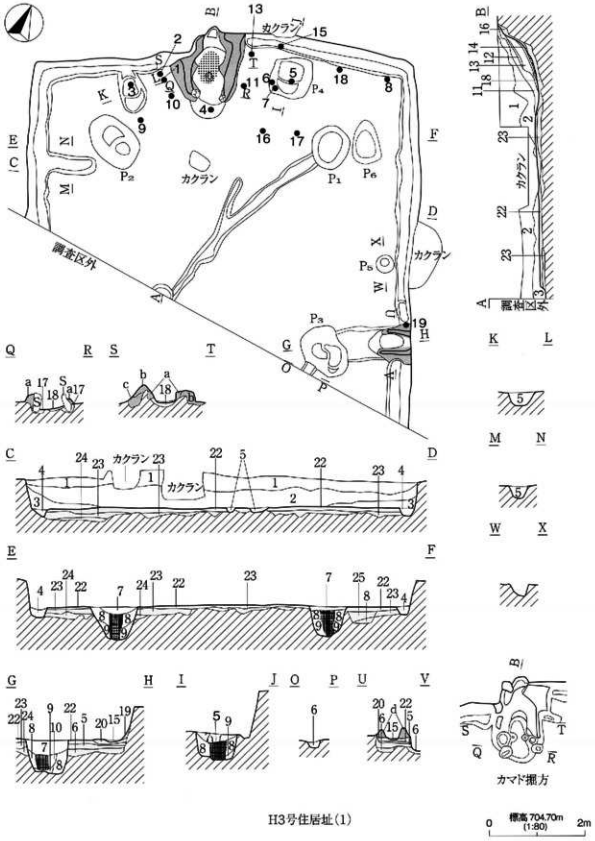
以上の出土遺物から本址の年代は、聖原遺跡の時期区分奈良・平安時代Ⅳ期に該当し、８世紀第Ⅳ四半期～９世紀初頭の実年代が想定される。

○Ｈ３号住居址

Ⅳお４グリットで検出された。H20・H26・H28 号住居址を切る。N－22°　－W に長軸方位をとる。南方向に調査区外に延びるため、長軸長は不明であるが、短軸長－8.3m、壁残高－0.75m の大規模と言ってよい住居址である。３基が確認されただけであるが、主柱は４基が均等に位置されていたものと思われ、P2・P3 には壁下を巡る周溝から延びた所謂「間仕切溝」が認められた。北壁中央に構築された石組粘土カマドの両脇にも柱穴が構築されており、外見は壁が立ち上がっていた可能性もある。主柱の規模はφ28 ～ 30 cmであった。尚、前述した北壁中央のカマドの他に、東壁にもカマドが１基構築されていた。このカマドが廃絶時に使用されていたか否かは判然としない。まだ、床面を西南隅から東北隅に対角線上に延びる溝の性格も不明であるが、調査時においては遺構の一部であると解釈した。

遺物は土師器、須恵器、弥生土器、縄文土器、土製品、石器・石製品が出土している。土師器は坏、高坏、手捏土器、鉢、甕、甑が認められる。坏は西一本柳Ⅲ・Ⅳの分類に準拠すればG1・2・3、D2、E3（所謂「有段口縁坏」）の形態が認められる。G 形態である１、２は片口であり、１は赤彩の可能性が高い。２の内面の暗文については、正面なところ断定はできないが、複数人から暗文のように見えるという見解を得たので図示した。また、E3 形態に認められる黒色処理は D2 形態のものとは異なり、ヘラミガキ調整を施さずに行っているため、光沢を持たないし、均一ではない。高坏は口縁部を欠損するが、坏部は D2 形態と思われる。手捏土器は大振りで、現代の蕎麦猪口やぐい呑みのような形態である。13 は底部に木葉痕が認められる。鉢は F4 形態の坏を大型にした 19 のようなものと、無頸の 18 が認められる。甕は大半が長胴であるが、20 のような胴張のもの存在する。調整は外面ヘラケズリ、内面ヘラナデが基本であるが、刷毛目が混在するものも認められる。23・29 は底部に木葉痕が認められる。甑は単孔のものと、多孔のものが認められるが、形態は何れも無頸で、取っ手は有さないものであり、37 は坏 G1 を 39 は坏 G2 を大型化したものであり、法量的には中型である。須恵器は坏、坏蓋、高坏、鼎が認められる。坏と高坏の外面底部には「ヘラ記号」と思われる刺線が認められる。鼎は口縁部及び頸部・体部中央に掻描波状文が施される。孔は、単孔で、注口は持たない。弥生土器は鉢、蓋、壺、甑が認められる。鉢は赤彩で口縁部に小孔が２ヶ穿たれている。蓋も天井部中央に小孔が１ヶ穿たれている。壺は口縁部に掻描の斜位の条線が施されるもので、片口になるらしい。甑は単孔である。土製品は弥生土器の壺片を再利用した土器片円盤である。縄文土器は早期の楕円押型文が施される深鉢片が４点出土している。51 については遺物であるのか否かの断定ができなかった。石器・石製品は砥石、磨石、敲石、編物石等が出土した。57 は単孔が認められるが、自然なのか人為的なものかの判断が難しい。全体に磨痕が認められる。

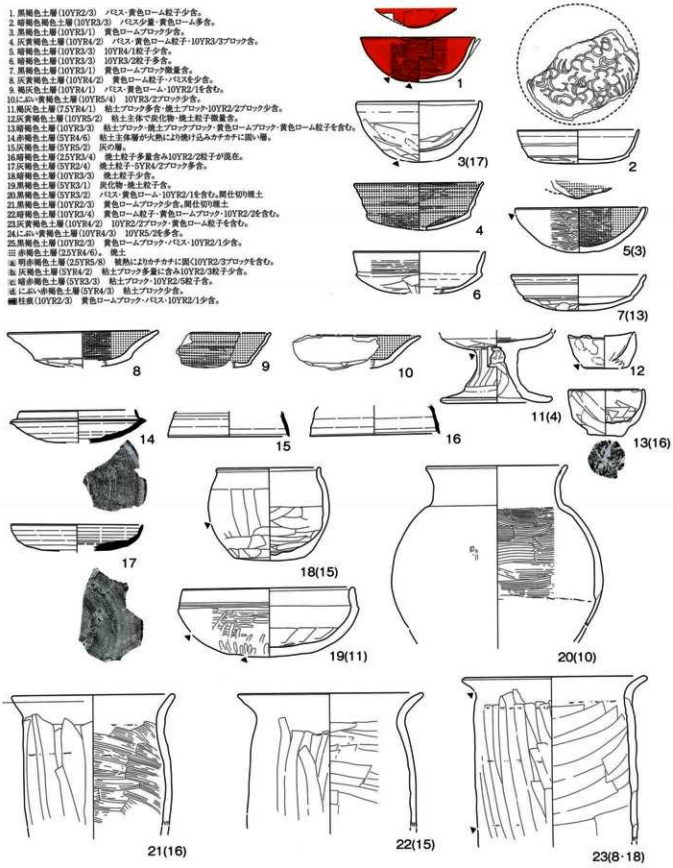
以上の出土遺物から本址の年代は、聖原遺跡の時期区分の古墳時代Ⅲ期に該当し、６世紀中葉～７世紀初頭の実年代が想定される。



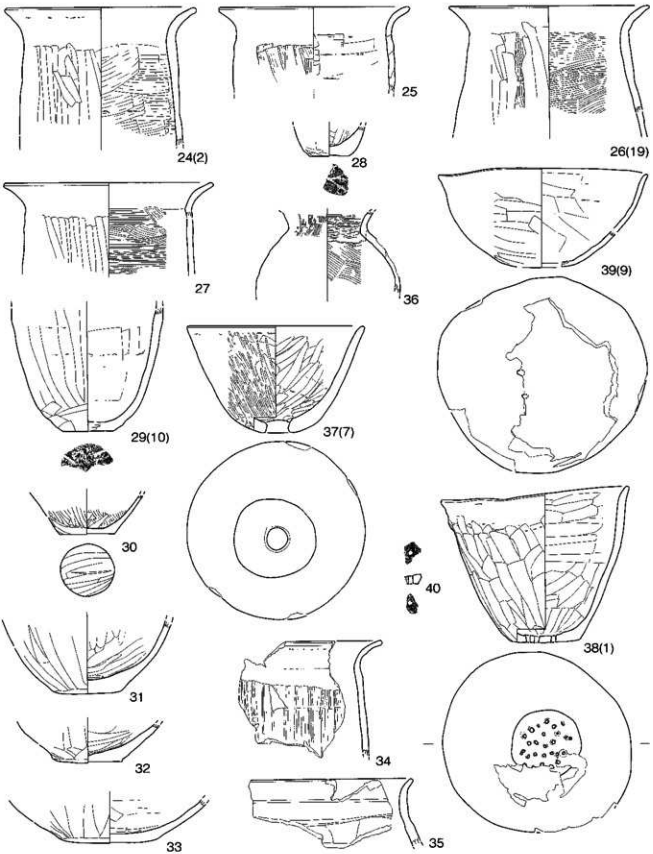

H3号住居址(1)

**第10図　H3号住居址(1)**

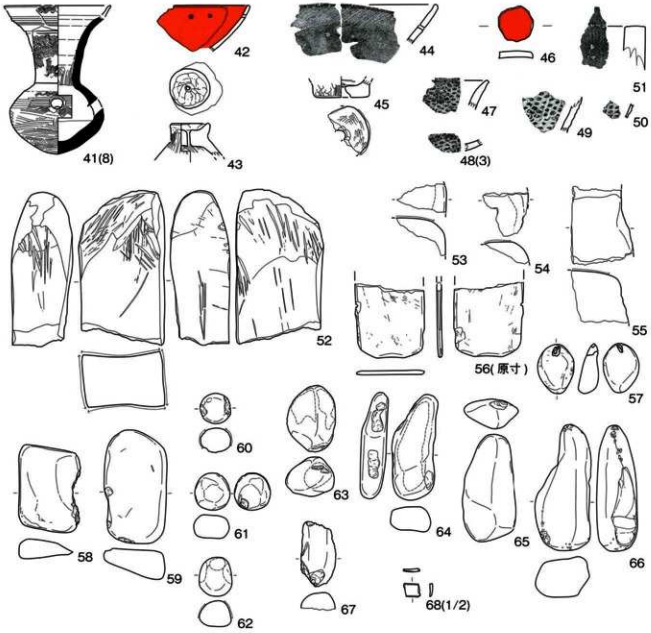
1.黒褐色土層(10YR2/3)　パミス・黄色ローム粒子少含。
2.暗褐色褐色土層(10YR3/3)　パミス少量・黄色ローム多含。
3.黒褐色土層(10YR3/1)　黄色ロームブロック少含。
4.灰黄褐色土層(10YR4/2)　パミス・黄色ローム粒子・10YR3/3ブロック含。
5.暗褐色土層(10YR3/3)　10YR4/1粒子少含。
6.暗褐色土層(10YR3/3)　10YR3/2粒子多含。
7.黒褐色土層(10YR3/1)　黄色ロームブロック微量含。
8.灰黄褐色土層(10YR4/2)　黄色ローム粒子・パミスを少含。
9.褐灰色土層(10YR4/1)　パミス・黄色ローム・10YR2/1を含む。
10.にぶい黄褐色土層(10YR5/4)　10YR3/2ブロック少含。
11.褐灰色土層(7.5YR4/1)　粘土ブロック多含・焼土ブロック・10YR2/2ブロック少含。
12.灰黄褐色土層(10YR5/2)　粘土主体で炭化物・焼土粒子微量含。
13.暗褐色土層(10YR3/3)　粘土ブロック・焼土ブロック・黄色ロームブロック・黄色ローム粒子を含む。
14.赤褐色土層(5YR4/6)　粘土主体層が火熱により焼け込みカナケナに固い層。
15.灰褐色土層(5YR5/2)　灰の層。
16.暗褐色土層(2.5YR3/4)　焼土粒子多量含み10YR2/2粒子が混在。
17.灰褐色土層(5YR2/4)　焼土粒子・5YR4/2ブロック多含。
18.暗褐色土層(10YR3/3)　焼土粒子少含。
19.黒褐色土層(5YR3/1)　炭化物・焼土粒子含。
20.黒褐色土層(5YR3/2)　パミス・黄色ローム・10YR2/1を含む。周仕切り構土
21.黒褐色土層(10YR2/3)　黄色ロームブロック少含。周仕切り構土
22.暗褐色土層(10YR3/4)　黄色ローム粒子・黄色ロームブロック・10YR2/2を含む。
23.灰黄褐色土層(10YR4/2)　10YR2/2ブロック・黄色ローム粒子を含む。
24.にぶい黄褐色土層(10YR4/3)　10YR5/2を多含。
25.黒褐色土層(10YR2/3)　黄色ロームブロック・パミス・10YR2/1少含。
㉓赤褐色土層(2.5YR4/6)。焼土
㉔明赤褐色土層(2.5YR5/8)　被熱によりカチカチに固く10YR2/3ブロックを含む。
㉕灰褐色土層(5YR4/2)　粘土ブロック多量に含み10YR2/3粒子少含。
㉖暗赤褐色土層(5YR3/3)　粘土ブロック・10YR2/5粒子含。
㉗にぶい赤褐色土層(5YR4/3)　粘土ブロック少含。
●柱痕(10YR2/3)　黄色ロームブロック・パミス・10YR2/1少含。




第11図　H3号住居址(2)




第12図　H3号住居址（3）

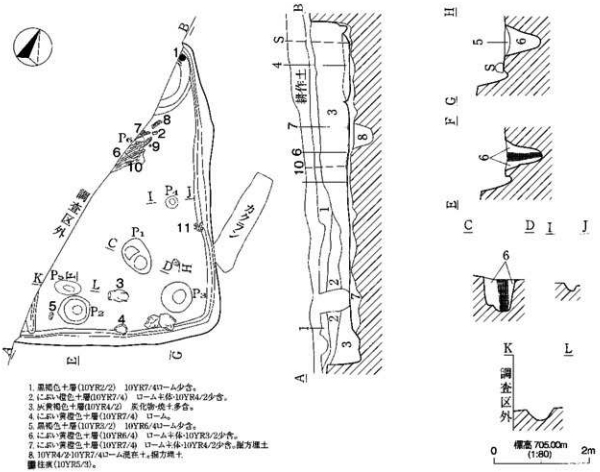



第13図　H3号住居址(4)

○H４号住居址

Ⅳあ１グリットで検出された。H36号住居址を切る。長軸方位、長軸長、短軸長は不明である。壁残高は0.70mを測る。東北隅に検出された落ち込みは、貯蔵穴の縁辺と思われる。また、床面で３基、堀方から２基検出されたピットの内、P1 は主柱と考えられ、φ20 cm大の柱痕が確認された。西方向へ調査区外に延びるため全容は不明であるが、調査部分の壁下には周溝が巡り、所謂「間仕切溝」も確認された。カマド・炉等は調査範囲には存在しない。覆土の３層中には炭化物や焼土が多含されており、床面上に及んでいたことから、本址は焼失住居と捉えられ、３層は人為埋土である。

遺物は土師器、石器・石製品が出土している。土師器には坏（1～10）、高坏（11）、鉢（12）、甕（13～15）、壺（16・17）の器種が認められる。坏は G4（1～6）、G3（10）、A1（7・8）、D2（9）の形態が認められる。内面の放射暗文状のヘラミガキが顕著である。高坏は脚部が１点出土している。鉢は丸底で、口縁部が短く、直立気味に弱く開くもので、外面にはヘラミガキ調整が施される。甕は最大径を胴部下半に有するもので、「く」字状に口縁部が開く。壺はヘラミガキ調整が顕著で、胴張の器形のものである。石器・石製品は砥石（18）、砥石・敲石（19）、台石（20・21）、臼玉（22・23）、




第14図　H4号住居址(1)

編物石（24）、磨・敲石（25）、磨石（26）、敲石（27～29）が認められる。

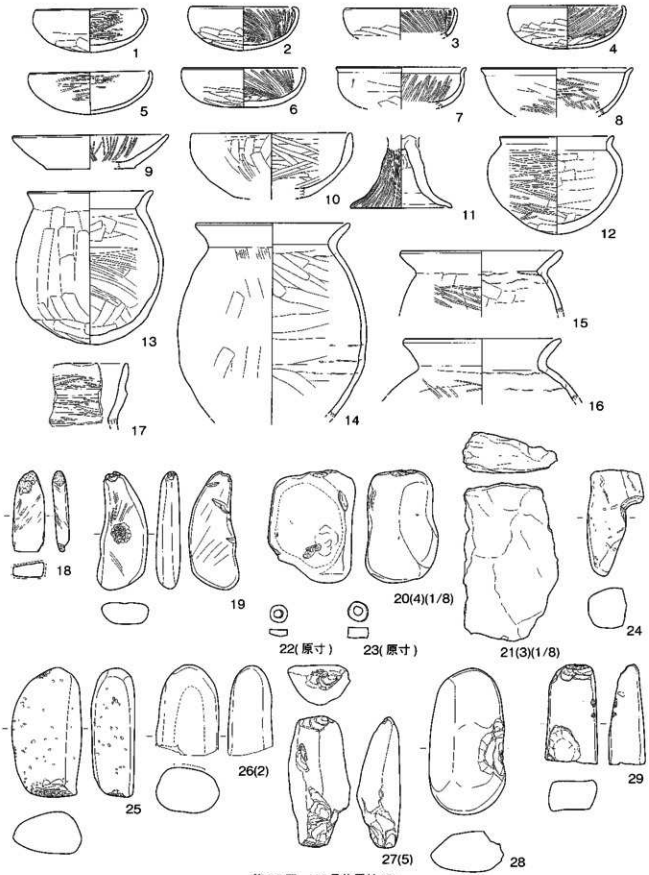
以上の出土遺物から本址の年代は聖原遺跡の時期区分の古墳時代I期-5世紀後半～6世紀初頭が想定される。

**○H５号住居址**

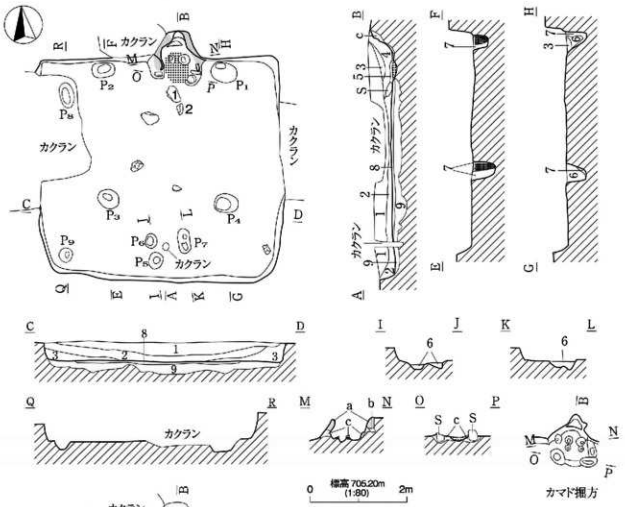
Ⅲい1グリットで検出された。H1に切られ、H16・H17・D8・M3を切る。N-104°-Wに長軸方位をとる。長軸長-5.10m、短軸長-4.70m、壁残高-0.45m、面積-16.7 ㎡の規模である。主柱穴は北壁寄りに4基が均等配置され、柱の規模は柱痕からφ16 ㎝であることが確認された。主柱穴以外に南壁下中央に検出された3基のピットは、出入口施設と思われる。その他に堀方から、2基のピットが検出されたが、性格は不明である。尚、本址堀方からは本址の旧住居が検出された、これにより、本址はカマドと主柱位置はそのままに、東西南の3方向に拡張されたことが明らかとなった。カマドは所謂「石組粘土カマド」であった。

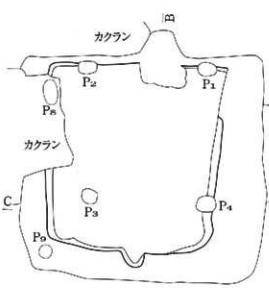
遺物は須恵器、土師器、弥生土器、縄文土器、石器が出土している。須恵器には坏、坏蓋、甕、壺が認められる。坏のロクロからの切り離し方法は5がヘラの他は回転糸切りである。内外面共に火襷が顕著である。坏蓋はつまみを欠損しており形状は不明であるが、立ち上がりは比較的短く、断面は三角である。19は長頸壺の把手と思われる。20、21は広口短頸の甕と思われる。いずれも外面に叩目、内面には当具痕が認められる。土師器には甕が認められる。全て武蔵甕であり、口縁部は「コ」字あるいは「コ」字気味である。弥生土器には高坏、鉢、甕、壺が認められる。全てが混入品であり、本址に伴う物ではない。23の特徴的な高坏の脚は北西ノ久保遺跡Y-59号住居址に類例がある。搬入品であろうか?壺は頸部に横位矢羽模様の櫛描、あるいはヘラ描の斜位沈線を施文しており、外面は赤彩される。縄文土器は早期の山形押型文土器片が1点出土している。石器は砥石（31・32）や磨石（33・34）、敲石（35・36）が出土している。

以上の出土遺物から本址の時期は聖原遺跡の時期区分の奈良・平安時代Ⅳ期-8世紀第4四半期が想定される。




第15図　H4号住居址(2)

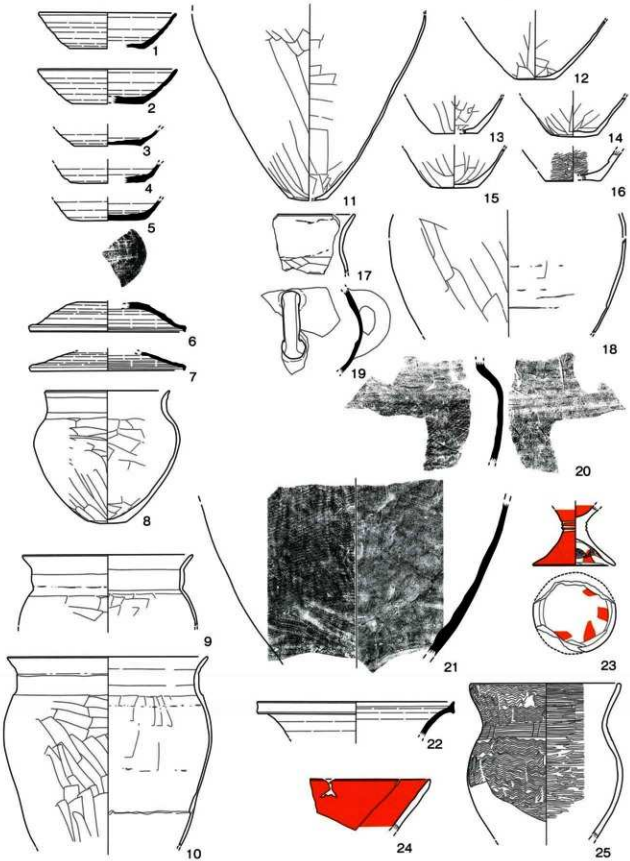


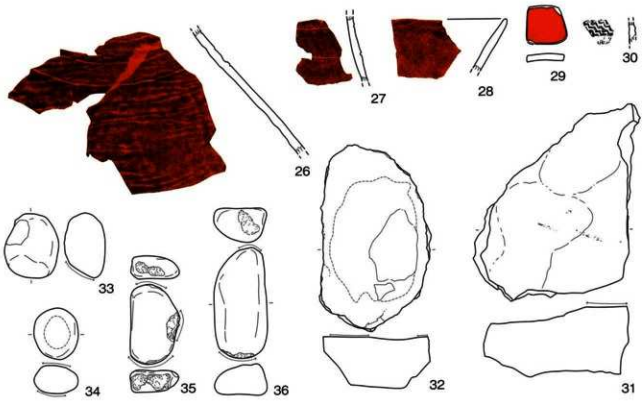

旧住居

1. にぶい黄褐色土層(10YR5/3)　10YR7/4ローム・φ1cm以下パミス少含。
2. にぶい黄橙色土層(10YR6/4)　10YR7/4ローム含み4/2ブロック少含。
3. にぶい黄橙色土層(10YR6/4)。
4. 3層中にカマド煙路粘土・焼土粒子・炭化物含。
5. 灰の流出層。
6. 灰黄褐色土層(10YR5/2)　10YR7/4ローム少含。
7. にぶい黄橙色土層(10YR7/4)。ローム二次堆積
8. 黒褐色土層(10YR2/2)　主体。10YR7/4ローム極少含。所謂「貼床」
9. 10YR7/4ローム4/2焼土・炭化物少含。粗立滞土
a. 灰黄褐色土層(10YR6/2)。カマド煙路粘土
b. にぶい黄橙色土層(10YR7/4)。ロームブロック
c. 灰黄褐色土層(10YR4/2)　焼土化部分有り。カマド煙路土
▥焼土。
■柱痕。

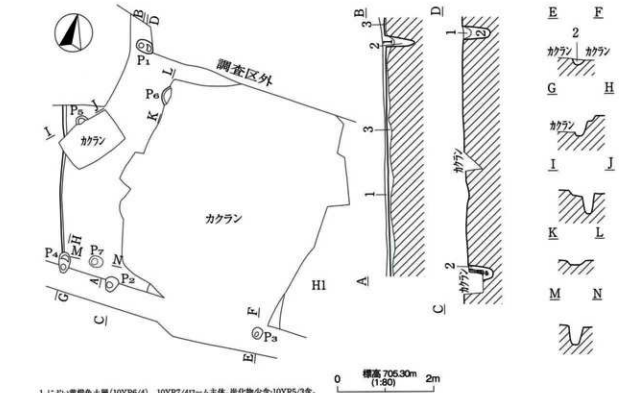
**第16図　H5号住居址(1)**




第17図　H5号住居址(2)

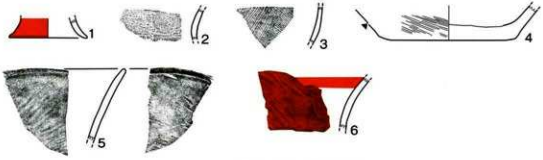



第18図　H5号住居址（3）




1. にぶい黄橙色土層(10YR6/4)　10YR7/4ローム主体。炭化物少含-10YR5/3含。
2. にぶい黄橙色土層(10YR6/3)　10YR7/4ローム主体。10YR4/2含。
3. にぶい黄橙色土層(10YR7/4)　10YR4/2φ1cm大ブロック少含。掘方埋土
■ 柱痕(10YR4/2)。

第19図　H6号住居址（1）




第20図　H6号住居址(2)

○H６号住居址

Ⅲい９グリットで検出された。H14 を切り、攪乱に切られる。攪乱による破壊が著しく、西壁の一部と床面がかろうじて残存していた。そのため、規模は壁残高が 0.05mである他は不明である。ピットは床面で６基、堀方から１基の計７基が検出されたが主柱穴は判然としない。P2 で確認された柱痕はφ12 cm大であった。

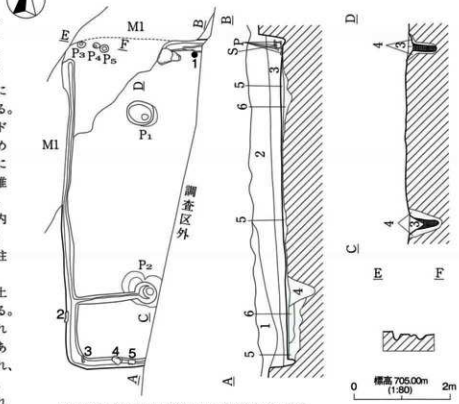
遺物は弥生土器が出土している。高坏(1)、甕(2･3)、壺(4 ～ 6)の器種が認められる。高坏は外面が赤彩される脚部片、甕は２が頸部－櫛描簾状文、口縁部－櫛描波状文が施されれるもの、３は体部に櫛描斜走文を縦位羽状に展開している。壺は４が底部片、５の口縁部片は無紋で、内面に赤彩が施される。６は頸部片で外面と内面の上部に赤彩が施される。外面頸部に櫛描横位条線が巡っている。

以上の出土遺物から、本址は弥生時代後期後半箱清水期の住居址と考えられる。

○H７号住居址

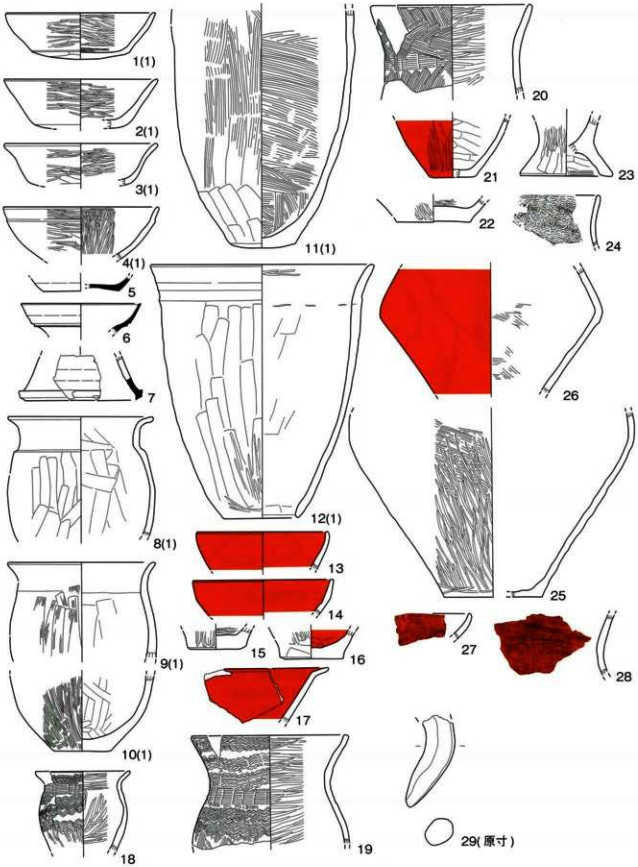
Ⅲあ３グリットで検出された。M1 に切られ、H10 を切る。N－5°－W に長軸方位をとり、長軸長－6.88m、壁残高－0.50mの規模を有する。短軸長は東方向に調査区外に延びるため不明である。北壁の調査区外との境にはカマド構築材と思われる石や粘土が認められたため、本址は北壁中央部に石組粘土カマドを有するものと推測される。壁下には周溝が巡り、主柱穴が２基検出された。この内 P2 には周溝から延びる所謂「間仕切溝」が連結されていた。主柱の規模はφ12 ～ 14 cmである。

遺物は土師器、須恵器、弥生土器、土製品、石器が出土している。土師器には坏、甑、甕が認められる。坏はすべて非ロクロ成形であり、内面面にヘラミガキが施され、外底のみヘラケズリが施される。３・４は内面に黒色処理が施される。甕は外面にナデ気味のヘラケズリが施されるものと、ハケ目が施されるものが存在するが、同一




1. 灰黄褐色土層(10YR4/2)　10YR7/4ローム･10YR2/2不定大ブロック含。
2. 灰黄褐色土層(10YR4/2)　10YR7/4ローム粒子少含。
3. にぶい黄褐色土層(10YR5/3)　10YR7/4ローム少含。
4. にぶい黄褐色土層(10YR6/3)　10YR7/4ローム含。
5. にぶい黄橙土層(10YR7/4)　ローム主体。10YR4/2含。所謂「貼床」
6. 明黄褐色土層(10YR6/6)　ローム主体。10YR4/2少含。
■ 柱痕(10YR3/2)。

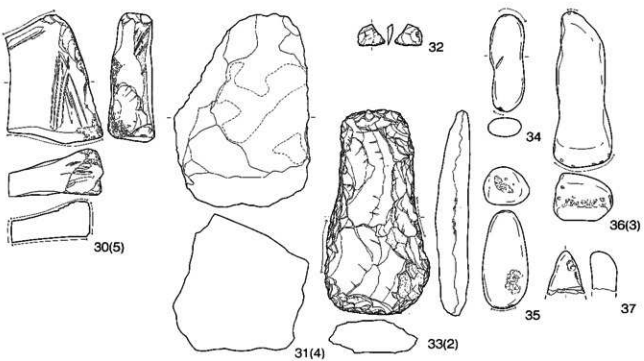
第21図　H7号住居址(1)




第22図　H7号住居址(2)

工具の端部の使い分けや、器面に対する角度の差違により生じた違いの可能性も強い。胎土は砂粒を多含したザラついた雰囲気のもので、肉眼よる観察では違いはない。甑は大型のもので、底部全体が開放したものである。外面はヘラケズリ後部分的にヘラミガキ調整が施され、内面はナデ調整である。須恵器には坏、高坏、甕が存在する。坏のロクロからの切り離し方法はヘラである。混入品の可能性が高い。甕は口縁部片である。高坏は脚片で透かしが施されるが、形状は不明である。弥生土器には鉢、高坏、甕、台付甕、壺が認められる。すべて混入品であり、本来は重複する H10 号住居址に帰属するものであろう。鉢、高坏、壺は赤彩が施される。高坏の口縁部は水平近く外反する。壺は腰で屈折するが、底部からの外反は認められない。また、屈折位置も比較的高めである。壺の I 縁部には櫛状工具による斜位条線（27）が、頸部には同じく櫛状工具による格子状条線（28）が認められる。甕は頸部に簾状文が施され、口縁部と体部に波状文が施されるものと、波状文の代わりに斜走文が施されるものが認められる。土製品は勾玉片が 1 点出土している。石器は砥石、スクレイパー、打製石斧、編物石、敲石が出土している。

以上の出土遺物から本址は、型原遺跡の時期区分の古墳時代Ⅲ期－6 世紀中葉～7 世紀初頭の時期が比定される。




第23図　H7 号住居址 (3)

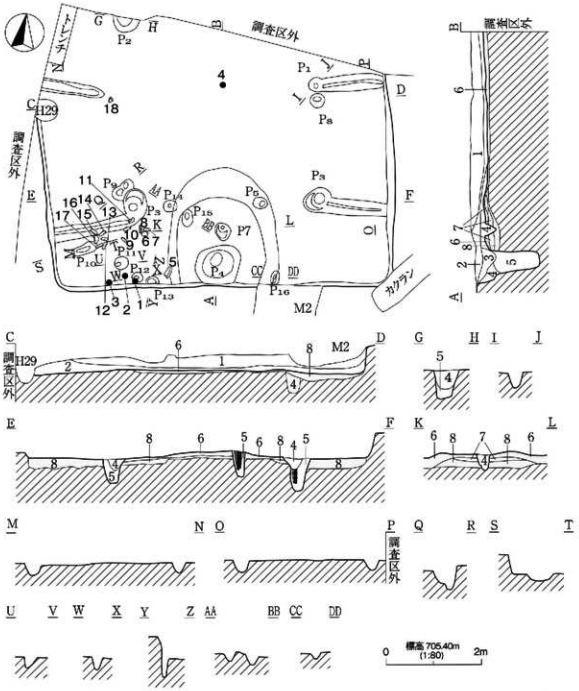
○H 8 号住居址

Ⅲこ 8 グリットで検出された。M2 に切られ、H40・H41 を切る。北方向に調査区外に延びるため全容は不明である。短軸長－7.40m、壁残高－0.55m である。P1 ～ P3 の 3 基のピットは主柱穴であり、本来は 4 本の主柱が均等位置に配置されているものと推測される。周溝は有さないが、所謂「間仕切溝」は認められた。南壁中央下に認められたピットは周囲が床面よりも高い「堤」状の土盛りに囲まれている。床面上では判然としなかったが、小径の 4 基のピットが「堤」の外縁に均等配置されていることが、明方により明らかとなった。当地方によく認められる張出部に構築される「貯蔵穴」が内部に取り込まれた形態と思われる。調査範囲にはカマド・炉等は存在しなかった。

遺物は土師器、須恵器、弥生土器、土製品、石器・石製品が出土している。土師器には坏（1 ～ 11）、高坏（12・13）、甑（16・17）、甕（15）の器種が認められる。坏は G4・A1 形態であり、暗文状のヘラミガキが顕著である。高坏は脚部片である。甕は口縁部片で、「く」字に強く外反する。甑は 2 点出土しているが、いずれも単孔である。須恵器は底部に回転糸切痕を残す坏が 1 点出土している。弥生土器には鉢（18）、甕（19 ～ 21）、壺（22・23）の器種が認められる。鉢は無頸壺としても良いのかもしれない。甕は頸部の櫛描簾状文は 3 点に共通するが、口縁部と体部の文様は 19・21 が櫛描波状文であるのに対して、20 は横位羽状の「櫛描」斜走文である。壺は 22 が折り返した口唇部に櫛描斜走文が施され、23 は頸部に横位羽状の櫛描斜走文が多段に施されている。土製品は 24 の弥生土器の壺胴部片を再利用した土器片円盤

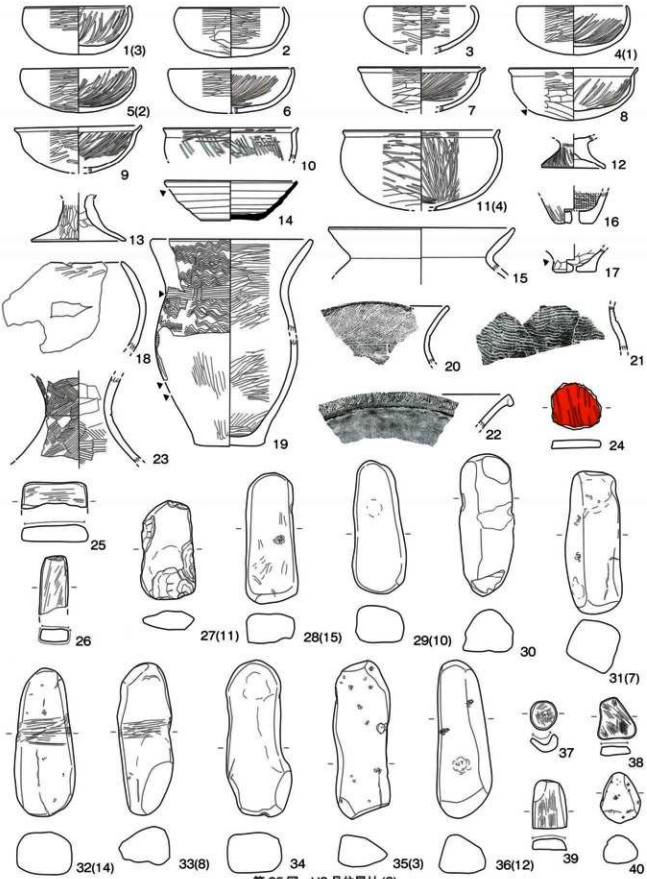
が1点出土している。石器・石製品は編物石（27～36）、砥石（25・26）、磨石（37～45）、磨・敲石（46～48）、敲石（49）が出土している。

以上の出土遺物から本址は、至原遺跡の時期区分の古墳時代Ⅰ期－5世紀後半～6世紀初頭の時期が比定される。

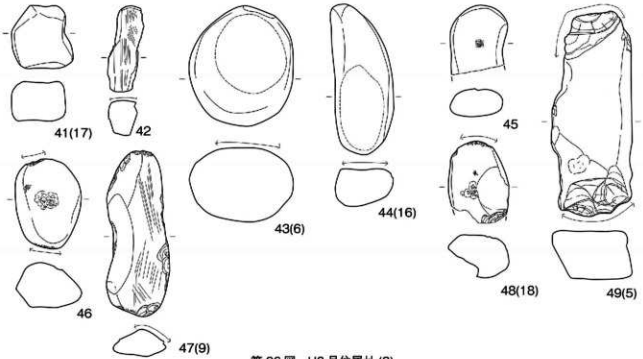



1. 10YR5/2-7/4ローム・7/6ローム・2/2の混在土層＝人為堆土
2. にぶい黄褐色土層(10YR5/3)　10YR7/4ローム多含。下層は灰の堆積層＝人為堆土
3. 黒褐色土層(10YR2/2)　炭化物多含。
4. にぶい黄橙色土層(10YR6/4)　10YR7/4ローム多含。
5. 灰黄褐色土層(10YR4/2)　10YR7/4ローム少含。
6. にぶい黄褐色土層(10YR4/3)　10YR7/4ローム極少含。所謂「延床」
7. にぶい黄橙色土層(10YR6/4)　基本的に4層と同一。貯蔵穴周囲の盛土のハンチク
8. にぶい黄橙色土層(10YR7/4)　ローム主体。4/2少含。
■粘質。

第24図　H8号住居址(1)




第 25 図　H8 号住居址 (2)




第 26 図　H8 号住居址 (3)

**○H9 号住居址**

Ⅲえ９グリットで検出された。H14・H21・H25 を切る。北方向に調査区外に延びるため全容は不明である。短軸長－6.15m、壁残高－0.20mの規模である。床面上で４基、堀方から３基の計７基のピットが検出されたが、主柱穴は判然としなかった。調査部分には壁下に周溝が巡っているが、カマド・炉は存在しなかった。

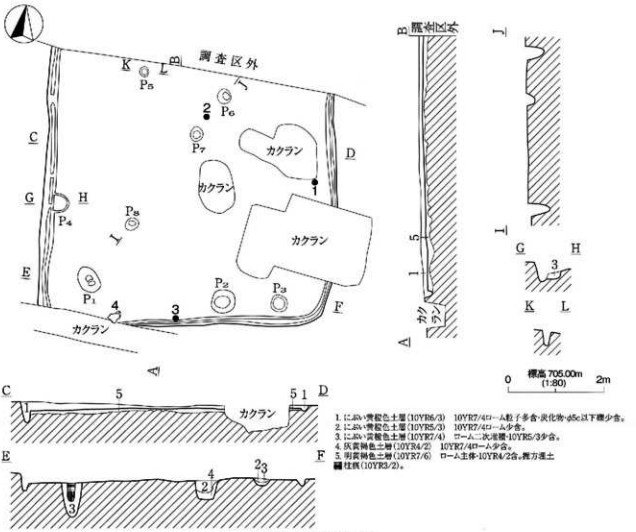
遺物は弥生土器、土製品、石器が出土している。弥生土器には鉢（1）、高坏（2・3）、甕（4～6）、壺（7～9）の器種が認められる。鉢は内外面に赤彩が施される。高坏は２点共に脚部の破片であり、脚内面を除き赤彩が施される。甕は頸部に櫛描簾状文が施されることは共通するが、口縁部と体部上半の文様は、４が口縁部が櫛描波状文、体部が横位羽状構成の櫛描斜走文。５は口縁部、体部共に櫛描波状文が施されるが、口縁部は折り返し口縁である。6 は口縁部は不明であるが、体部は櫛描波状文であり、円形貼付文が付加される。貼付文は無紋である。壺は７が受口口縁で、内外面に赤彩が施される。8･9は底部片であり、２点共に体部下半の稜が明瞭である。9は外面の稜より上は赤彩が施されるが、8 は施されない。土製品は 10 の土製勾玉が１点、石器は 11 の台石が１点出土している。

以上の出土遺物から、本址は弥生時代後期の住居址と捉えられ、小山岳夫の編年（1999 年長野県考古学会シンポジウム「長野県の弥生土器編年」）の後期Ⅳ期～Ⅴ期に比定されようか。

**○H10 号住居址**

Ⅳあ４グリットで検出された。M1・H7 に切られる。南・東方向に調査区外に延びるため、全容は不明である。壁残高－0.60mの規模である。P1・P7・P2・P4 の４基が主柱と思われる。また P3・P6 の２基は棟持柱の可能性が高い。柱はφ16～20cmの規模であった。炉はP1とP7の中間に構築されており、長軸を南北にとる楕円形の掘り込みの中に、「U」字状の石組が認められた。周溝は有さない。

出土遺物は弥生土器、石器･石製品が出土している。弥生土器には鉢（1～3）、高坏（4～6）、甕（7～14）、壺（15～21）が認められる。鉢には赤彩される２・３とされない１が存在する。高坏は口縁部が水平に屈曲し、４カ所突起が付加される。脚の内面以外には赤彩が施される。甕は受口状の口縁部に特徴が認められる。施文は受口口縁に独立した文様帯を有する７・８・11 とそうでない 12 に大別される。７・11 はこの文様帯に櫛描波状文が１条巡らされる他は、頸部まで無紋であるが、８は櫛描波状文が施される。12 は口縁部全面に櫛描波状文が施されるが、頸部には櫛描Ｔ字文が施される。13・14 は口縁部を欠損する。頸部には 13 が櫛描波状文、14 は櫛描簾状文が施され、13 は体部には縦位羽状に櫛描斜走文が、14 は横位に櫛描波状文を数条巡らし、その下に横位羽状の櫛描斜走文が施される。壺は口縁部が受口気味の 16・17 の様なものと、15 の様に外反するものが認められる。赤彩も施すものと、施さないものが存在する。




**第27図　H9号住居址(1)**

体部の最大径は比較的上部にあり、明瞭な稜は認められない。文様は16が口縁部と頸部に持つ他は、頸部にのみ施文される。15は頸部に櫛描横位条線と波状文、18は櫛描T字文、16は口縁部に櫛描波状文、頸部に櫛描簾状文が施される。石器・石製品はスクレイパー(22・23)、磨製石鏃(24)、磨・敲石(25)、敲石(26・27)、磨製石鏃の素材(28)などが認められる。尚、29は本址の炉石であるが、図示したようにすべてが接合した。

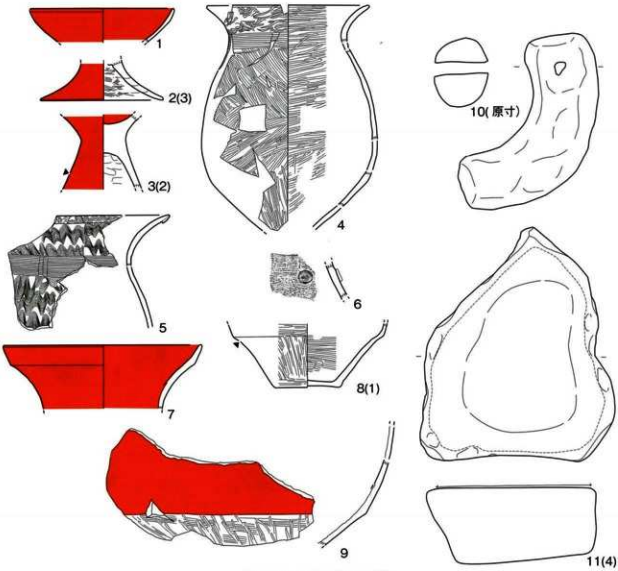
以上の出土遺物から本址は弥生時代後期の住居址と捉えられ、小山岳夫の編年(1999年長野県考古学会シンポジウム「長野県の弥生土器編年」)の後期Ⅱ期の古い部分か、Ⅰ期の新しい部分に比定されようか。

**○H11号住居址**

Ⅲあ9グリットで検出された。H15号住居址を切る。北・東方向に調査区外に延びるため、全容は不明である。壁残高~0.60mの規模である。ピットは床面上で2基、覆土から3基、西壁の張出部上に2基検出された。P1かP8が主柱と思われる。周溝は有さず、調査範囲内には炉は存在しなかった。

遺物は弥生土器が出土している。器種は鉢(1~3)、高坏(4)、甕(5~8)、壺(9・10)が認められる。鉢は1・2のような所謂「鉢」と3のような甕と同様なものが存在し、何れも赤彩が施されるが、3の内面は頸部下は施さない。高坏は脚、口縁部を欠損する。内外面に赤彩が施される。甕は外面胴部下以外に櫛描斜走文が横位羽状に施される6~8のようなものと、5の様に頸部に櫛描簾状文を巡らし、口縁部には櫛描斜走文、体部には櫛描波状文を施すものが存在する。壺は2点共にせきされており、1は内面も赤彩が施される。

以上の出土遺物から、本址は弥生時代後期の住居址と捉えられ、小山岳夫の編年(1999年長野県考古学会シンポジウム「長野県の弥生土器編年」)の後期Ⅲ期に比定される。



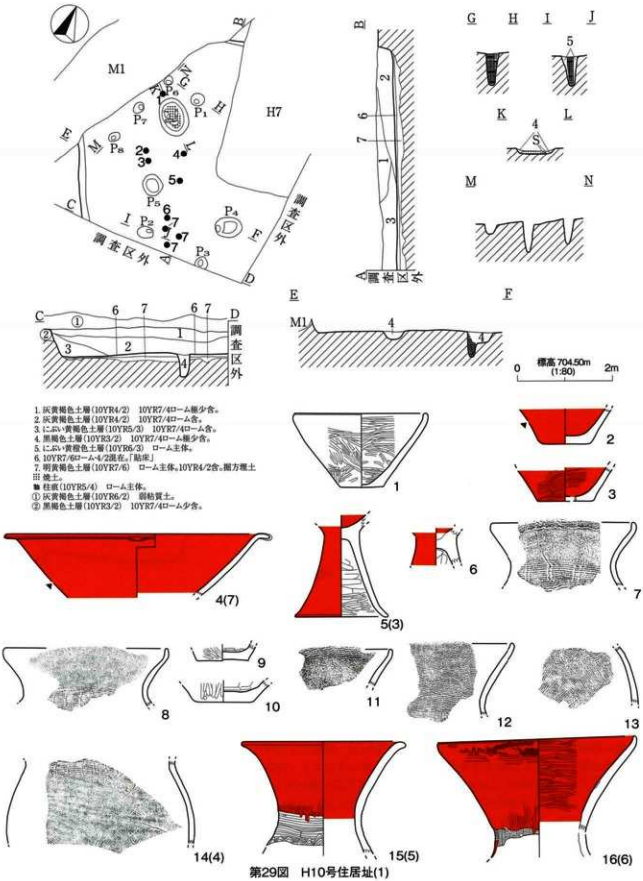

第28図　H9号住居址(2)

○H12号住居址

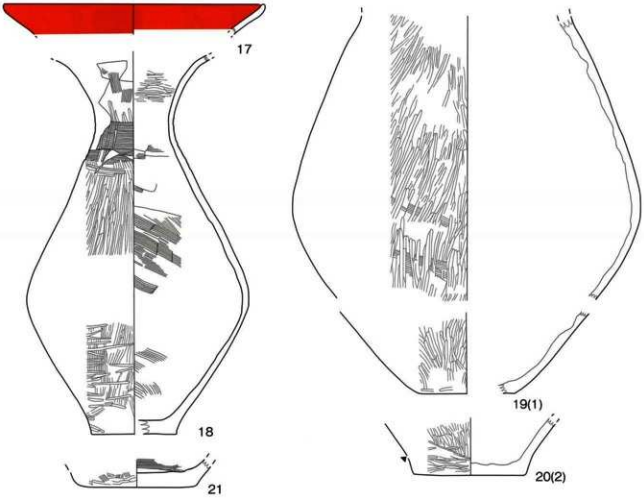
Ⅳい3グリットで検出された。M1・D6に切られ、H23を切る。平面形態は隅丸長方形である。N－2°－Wに長軸方位をとり、長軸長－5.44m、短軸長－5.40m、壁残高－0.45mの規模を有する。周溝は有さず、P1～P4の4基の主柱穴が均等に配置される。柱はφ14～20㎝の規模であった。北壁の中央部分には、カマドの痕跡と思われる焼土の堆積や粘土の小塊が覆土中に認められたことから、この部分にカマドが構築されていた可能性が高い。その東脇に拘置されていたP5は貯蔵穴の可能性が高いものと思われる。

遺物は土師器、須恵器、弥生土器、縄文土器、石器・石製品が出土している。土師器には、坏、甕の器種が認められ、坏には E4・D2・D3・G1 の形態が存在する。E4 は「北武蔵型坏」であり、底部のヘラケズリ調整以外は施されない。焼成も堅緻であり、橙色を呈する。D2 形態の5や G1 形態の6は内外面赤彩のようにも思われるが判断できない。甕は器壁が厚く、胎土に砂粒を多含する。調整は外面ヘラケズリ、内面ナデである。須恵器は坏、高坏、甕の器種が認められるが、9・10の高坏以外は D6 号土坑からの混入品と思われる。回転糸切痕を有する坏7・8、甕17・18がこれに該当する。坏蓋9は高坏の可能性も高い。弥生土器は H10・H23・H28からの混入品である。器種的には鉢、高坏、甕、壺が認められる。高坏 20 の内面に残る赤色・楕円の痕跡は指の跡であろうか？縄文土器は早期楕円押型文土器片が1点出土している。石器・石製品は砥石、打製石斧、磨製石鏃、敲石、加工痕のある剥片、剥片が認められる。

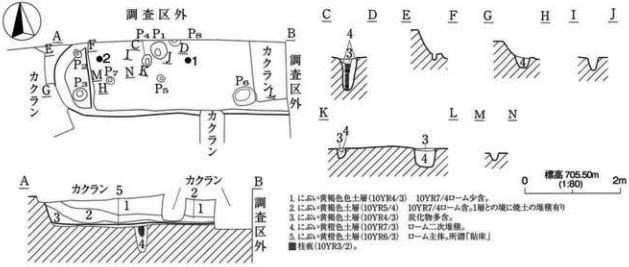
以上の出土遺物から本址は、聖原遺跡の時期区分の古墳時代Ⅲ期－6世紀中葉～7世紀初頭の時期が比定される。



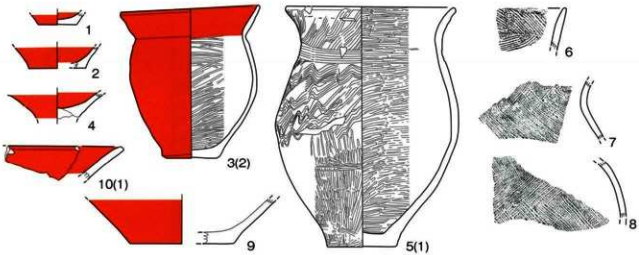

第29図　H10号住居址(1)



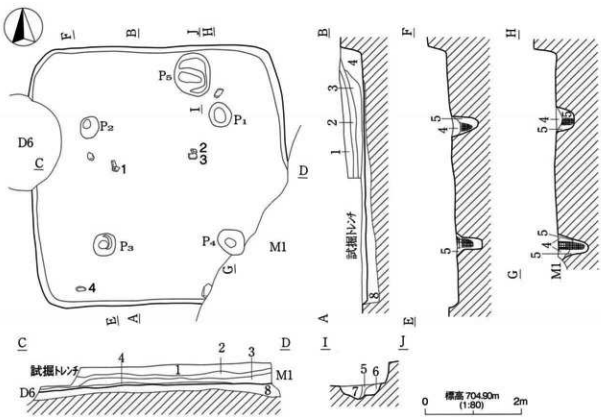

第30図　H10号住居址(2)




第31図　H11号住居址(1)

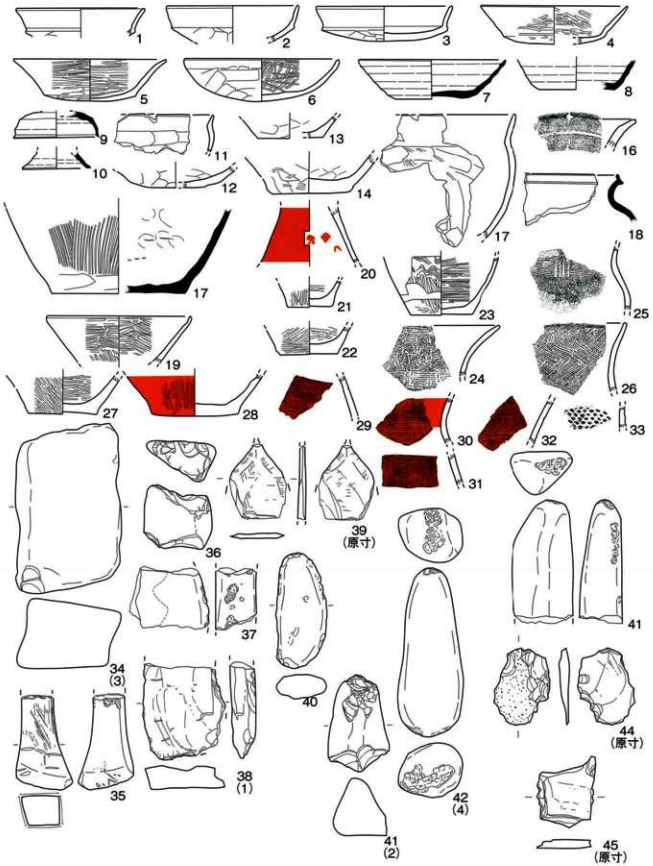



第 32 図　H11 号住居址 (2)

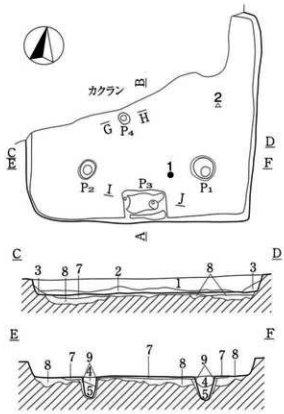


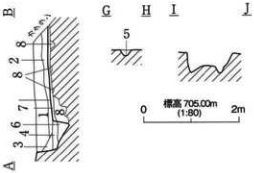

1. にぶい黄橙色土層(10YR6/3)　10YR7/4ローム少含。
2. にぶい黄橙色土層(10YR6/3)　10YR7/4ローム含・焼土少含。
3. にぶい黄橙色土層(10YR6/3)　炭化物・焼土少含・10YR7/4ローム含。
4. 灰黄褐色土層(10YR4/2)　10YR7/4ローム少含。上層が硬上に堅い。
5. にぶい黄褐色土層(10YR5/3)　10YR7/4ローム含。
6. 10YR7/4ローム・4/3混在。
7. 黒褐色土層(10YR3/2)　10YR7/4ローム少含。
8. 掘方埋土。
■柱痕(10YR3/2)。

第 33 図　H12 号住居址 (1)

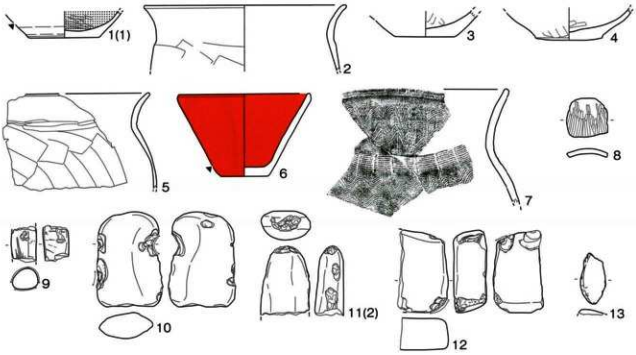



第 34 図　H12 号住居址 (2)

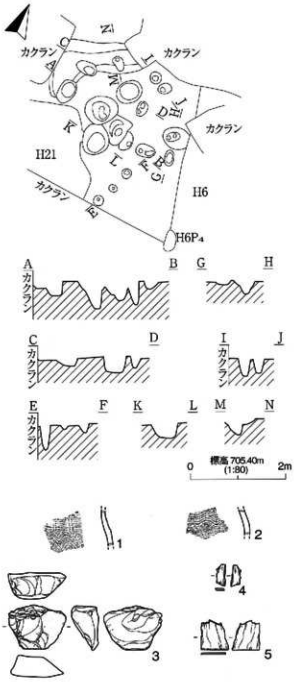



1. 暗褐色土層(10YR3/3)　10YR3/1ブロック・パミス・黄色ローム粒子混入。
2. 黒褐色土層(10YR3/2)　パミス少含。
3. 暗褐色土層(10YR3/4)　黄色ローム粒子多含。
4. 黒褐色土層(10YR2/3)　主体は、パミス少含。
5. 暗褐色土層(10YR3/4)　10YR4/3を多量に含・3/1を少含。
6. 灰黄褐色土層(10YR4/2)　黄色ローム粒子(10YR4/6)を多含。
7. 灰黄褐色土層(10YR4/2)　主体-10YR7/4ローム含。所謂「貼床」
8. 明黄褐色土層(10YR7/6)　ローム主体-10YR4/3・3/2含。掘方埋土
9. にぶい・黄褐色土層(10YR4/3)　ロームブロック-10YR7/6ブロック含。掘方埋土




**第35図　H13号住居址**




第36図　H14号住居址

○H13 号住居址

Ⅳく3グリットで検出された。H18・H27・H38 を切る。北東隅を残し、遺構の北半は攪乱により現存しない。N−8°−W に長軸方位をとり、短軸長−4.85m、壁残高−0.38mの規模を有する。主柱は均等に4本配置されるものと思われ、P1・P2 がその内の2基であろう。P4 の性格は不明である。南壁下中央に構築された2基の小径ピットを内包する長方形の掘り込みは出入口であろう。遺物は土師器、弥生土器、土製品、石器・石製品が出土している。土師器には坏（1）、甕（2～5）の器種が認められる。坏は内面黒色処理が施され、底部は手持ヘラケズリ調整である。甕は武蔵甕（2・4・5）と器壁の厚い胴張甕（3）が認められる。弥生土器は内外面赤彩が施される鉢（6）と頸部櫛描肇状、口縁部と体部上半に櫛描波状文が施文される甕（7）が認められる。土製品は8の弥生土器の壺片を加工した土器片円盤が出土している。石器・石製品は9の砥石、10の編物石、11・12の敲石、13の剥片が認められる。

以上の出土遺物から本址は、室原遺跡の時期区分の奈良・平安時代Ⅱ期−8世紀第2四半期の時期が比定される。

○H14 号住居址

Ⅲ9グリットで検出された。本址は部分的な床面と、ピットが残存して状態であり、その形状や規模は不明である。

H6・H9・H29 に切られる。17 基検出されたピットの性格及び本址に帰属するか否かについても判然としない。

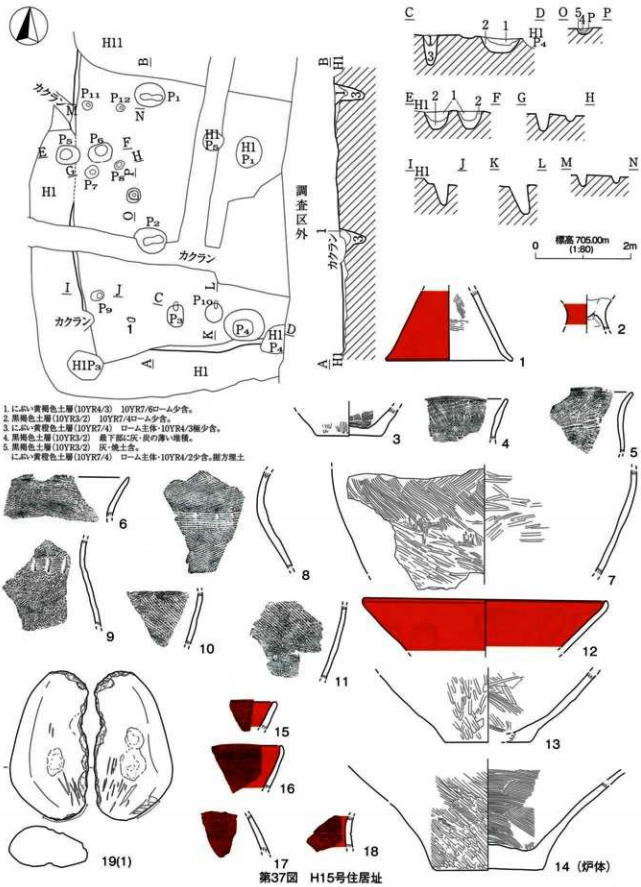
出土遺物は弥生土器、石器・石製品が認められる。弥生土器（1・2）は甕片である。1は頸部に櫛描肇状文、体部に櫛描波状文が施される。2は体部に櫛描波状文が施される。石器・石製品は3が打製石斧の破片?、4・5が石製模造品あるいは磨製石鏃の素材ないし剥片と思われる。

以上の出土遺物から、本址は弥生時代後期の所産と考えられる。

○H15 号住居址

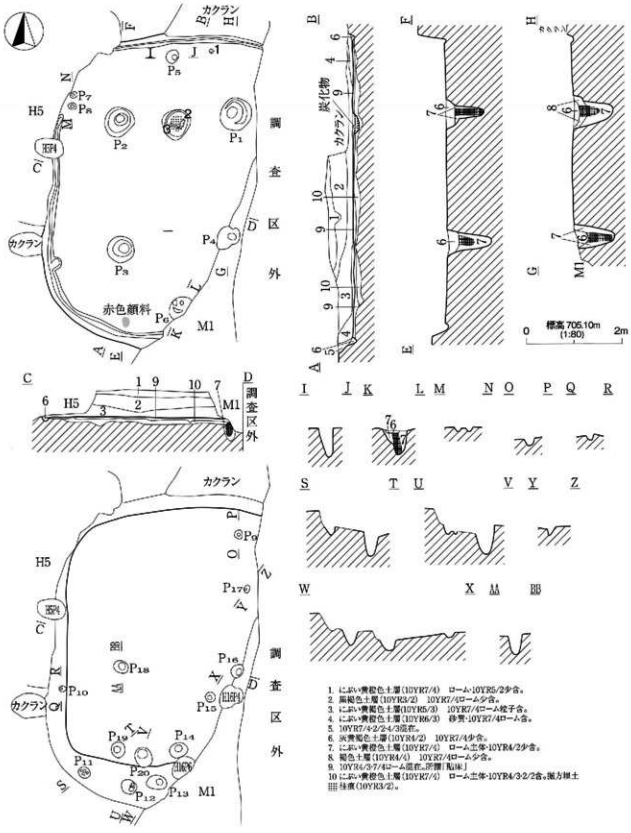
Ⅲあ9グリットで検出された。H1・H11 に切られる。北・東方向に調査区外に延びるため全容は不明である。壁残高−0.05mの規模である。主柱は床面上に4本が均等配置されていたものと思われる。P1・P2 の2基がその内の2本の掘方であるが、柱痕は確認できなかった。P3・P10 の2基は南壁下に構築された出入口の梯子あるいは階段の桁を固定したものであろう。周溝は有さず、炉は P1、P2 間の P2 寄りに土器を埋設して構築されていた。P5・P6 及び堀方から検出されたピットについてはその性格は不明である。

遺物は弥生土器と石器が出土している。弥生土器には高坏、甕、壺の器種が認められる。高坏（1・2）は共に脚部の破片であり、外面に赤彩が施される。坏部の形態は不明である。甕（4～11）は頸部に櫛描肇状文が施されるが、口縁部と体部上半に櫛描波状文が施されるものと、櫛描斜走文が横位羽状に施されるものと、2種類が存在する。壺（12～18）は基本的に赤彩が施されるが、内面頸部下と外面体部下半の稜以下は施されない。口縁部に櫛描波状文や斜走文を施すもの、省略したものが存在する。頸部には櫛描波状文やヘラによる斜走文を横位羽状に施すものが存在する。14 は炉体上器である。石器は表に1、裏面に2ヶの凹を持ち更に、両面を砥面とし、側面には敲打痕を有する安山岩製河床礫が出土している。

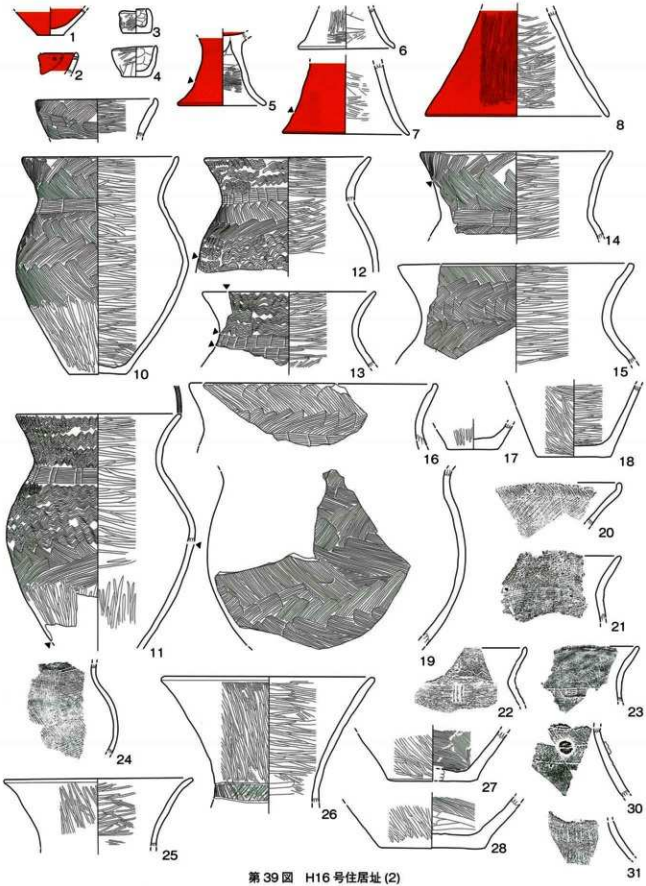



1. にぶい黄橙色土層(10YR4/3)　10YR7/6ローム少含。
2. 黒褐色土層(10YR3/2)　10YR7/4ローム少含。
3. にぶい黄橙色土層(10YR7/4)　ローム主体・10YR4/3極少含。
4. 黒褐色土層(10YR3/2)　底下部に炭・炭の薄い堆積。
5. 黒褐色土層(10YR3/2)　炭・焼土含。
にぶい黄橙色土層(10YR7/4)　ローム主体・10YR4/2少含。縄方堆土

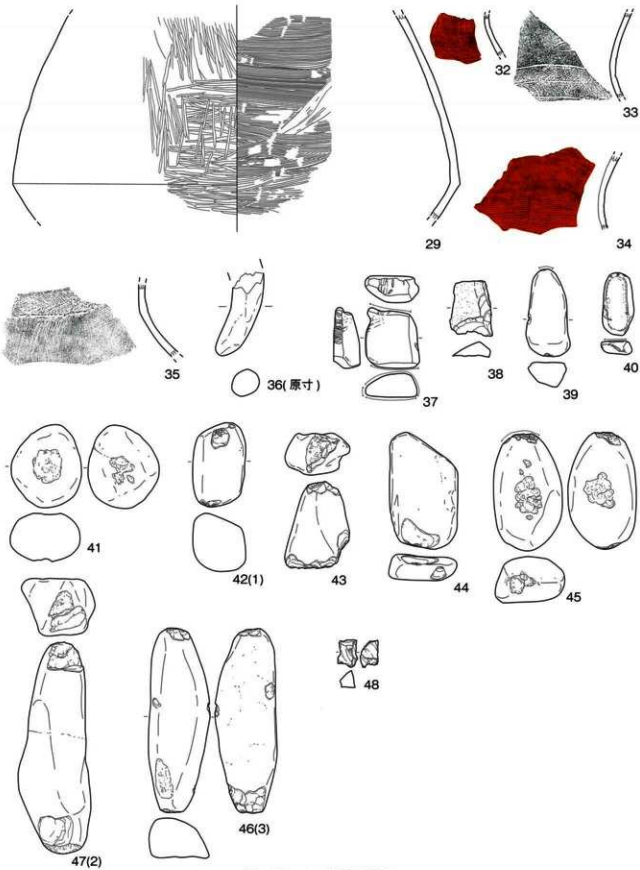
第37図　H15号住居址



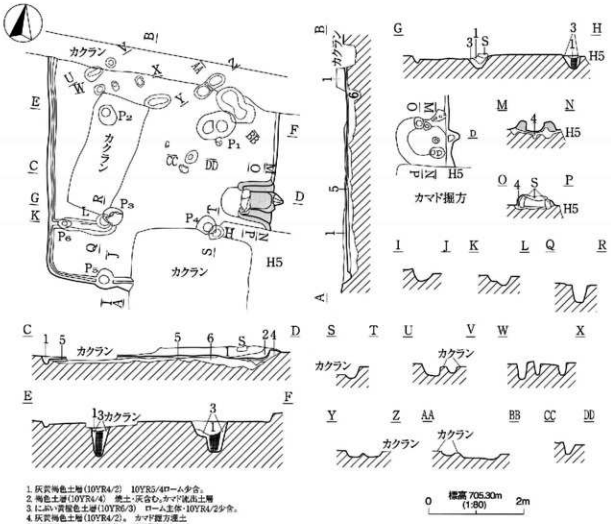

**第38図　H16号住居址(1)**




第39図　H16号住居址(2)




第 40 図　H16 号住居址 (3)




1. 灰黄褐色土層(10YR4/2)　10YR5/4ローム少含。
2. 褐色土層(10YR4/4)　焼土・炭含む。カマド流出土層
3. にぶい黄橙色土層(10YR6/3)　ローム主体・10YR4/2少含。
4. 灰黄褐色土層(10YR4/2)。　カマド掘方埋土
5. 10YR7/4ローム・4/2焼土ブロック。所々「粘土」
6. 10YR7/4～7/6ローム・4/2・2/2焼土ブロック。壁方粗土
■暗褐色土層(10YR3/4)。カマド構築粘土
■焼土層(10YR3/2)。

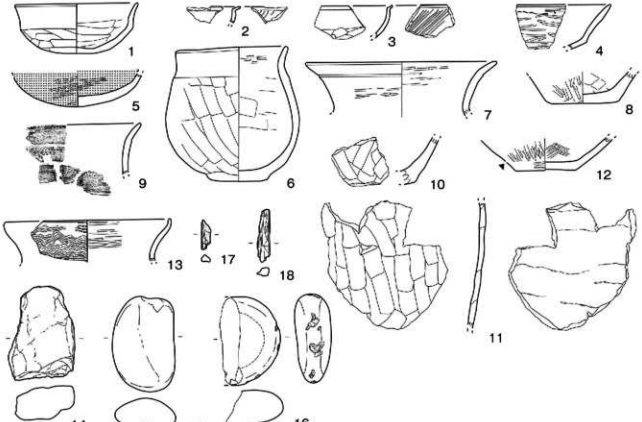
**第41図　H17号住居址(1)**

以上の出土遺物から本址は弥生時代後期の住居址と捉えられ、小山岳夫の編年（1999 年長野県考古学会シンポジウム『長野県の弥生土器編年』）の後期Ⅱ期に比定される。

**○H16 号住居址**

Ⅳあ1グリットで検出された。隅丸長方形と言うよりは楕円形の平面形態を呈する。M1・H5に切られ、N−0°−Wに長軸方位をとる。東方向に調査区外に延びるため、長軸長、短軸長は不明である。壁残高は 0.60mの規模であった。北西隅部分を除き、調査部分の壁下には周溝が巡る。主柱穴 P1～ P4 の4基は均等に配置され、柱はφ18 ～ 20 cmの規模であった。P5、P6 の2基は棟持柱である。炉は P1 と P2 の中間に構築されており、楕円形の掘り込みの中に「く」字状に石を組んである。南壁中央西寄りの床面上には楕円形に赤色顔料が薄く堆積していた。内包あるいは塗布されていた器が消滅したものであろうか。尚、本址は床面下堀方より旧住居が検出された。主柱、炉はそのままに、南方向に旧住居を拡張したこが明らかとなった。

遺物は弥生土器、土製品、石製品・石製品が出土している。弥生土器には鉢、ミニチュア（手捏）土器、高坏、甕、壺の器種が認められる。鉢（1・2）は内外面に赤彩が施されるもので、2は口縁部に2孔が焼成前に穿たれている。ミニチュア土器（3・4）は手捏の鉢状ものである。赤彩は施されない。高坏（5～8）はすべて脚部であり、坏部は不明である。透かしは認められない。6を除き外面に赤彩が施される。甕（7～ 24）は 10・14～ 16・19・20・24 の様に櫛描斜走文を横位羽状に施文するものと、13・21 ～ 23 の様に櫛描波状文を横位に施文するも、両者が混在する 11・12 の様なものの3種類が存在する。11 のようなものが古い要素を残したものと思われ、口唇部には縄文が施される。櫛描斜走文を横位羽状に施文するものには、頸部に櫛描簾状文が



第42図　H17号住居址(2)

施されるものと、施されないものが認められ、更に、頸部に櫛描簾状文の代わりに「T字文」が施されるものが存在する。頸部に「T字文」を施す甕は上田市「和手遺跡」に類例が認められ、地域差と考えられているが、当遺跡では他遺構からも出土しており、注意が必要であろう。壺（25～35）は赤彩されるもの（32・34）と、されないものが存在する。文様は頸部にのみ施される。26 のようなヘラ描斜走文を1条巡らすものと、30・33 の様に横位羽状に多段展開するもの、櫛描の横位斜走文を巡らす 35、櫛描波状文を巡らす 31、櫛描波状と簾状文を巡らす 32、櫛描T字文を巡らす 34 などがある。30 には円形貼付文が付加されている。土製品は勾玉片が1点出土している。石器・石製品は砥石（37・38）、擂物石（39）、敲石（40～47）、使用痕のある剥片（48）が認められる。

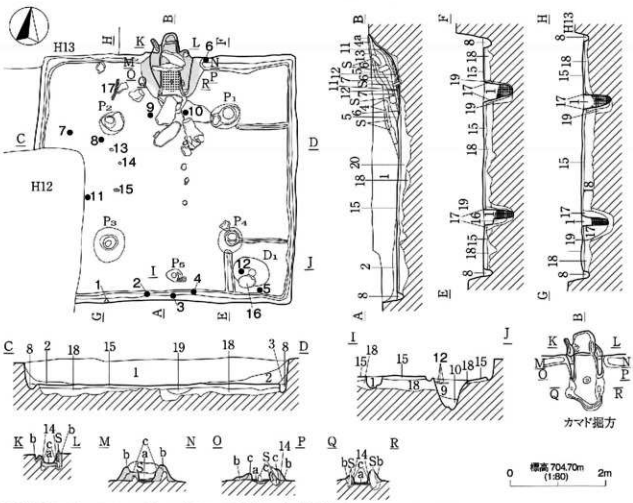
以上の出土遺物から本址は弥生時代後期の住居址と捉えられ、小山岳夫の編年（1999 年長野県考古学会シンポジウム「長野県の弥生土器編年」）の後期Ⅱ期に比定される。

**○H17 号住居址**

Ⅲい 10 グリットで検出された。H5 に切られ、H21・H22 を切る。北辺が攪乱により消滅しているため全容は不明である。短軸長−4.88m、壁残高−0.20m の規模を有する。西・南壁下には周溝が巡る。主柱は P1～P4 の4基に均等配置されるが、P3 は礎石上に立てられたようである。また、P3 には西壁から延びる所謂「周仕切溝」が堀方から検出され、これに連結する旧 P3 ピットも検出された。同様に P4 ピットも堀方から旧 P4 ピットが検出されており、本址は少なくとも1回の上屋の建替えが行われたものと思われる。また、P3、西壁の P6、南壁の P5、西南隅が構成する方形に住居内の空間が区画されていたことが伺えた。主柱の規模はφ12～20 cmであった。カマドは東壁の中央南寄りに粘土と石で構築されていた。

遺物は土師器、弥生土器、石器・石製品が出土している。土師器には坏（1～5）、甕（6～11）、壺（12）の器種が認められる。坏は A1（2・3）、E1（1・5）、D2（4）の形態が認められる。5は内外面に黒色処理が施される。また、A1 形態の坏は放射暗文が顕著である。甕はヘラケズリ調整を基本とする。最大径を体部に有するようである。12 はヘラミガキ調整が顕著なため、壺とした。弥生土器は櫛描波状文が施される甕が出土した。口縁部は受口状である。石器・石製品は14・15の擂物石、16の磨・敲石、17・18の石器素材が出土している。

以上の出土遺物から窪原遺跡の時期区分の古墳時代Ⅰ期−5世紀中葉～6世紀初頭の時期が比定される。




1.黒褐色土層(10YR3/2)　10YR7/4ローム粒子・φ1cm以下バミス・2/2不定大ブロック含。人為堆土思われる
2.にぶい黄褐色土層(10YR5/3)　10YR7/4ローム多含。一層との間に炭化物・灰・焼土の層検層有?
3.にぶい黄褐色土層(10YR5/3)　10YR7/4ローム含。
4.灰褐色土層(7.5YR4/2)　粘土ブロック多量・10YR5/2含。
5.黒褐色土層(7.5YR3/2)　炭化物少含。
6.暗褐色土層(7.5YR3/3)　炭化物・焼土ブロック・砂土ブロック含。
7.灰褐色土層(7.5YR5/2)　粘土ブロック・焼土ブロック含。
8.暗褐色土層(10YR3/3)　10YR2/2粒子含。層識
9.黒褐色土層(10YR2/3)　主体。
10.灰黄褐色土層(10YR4/2)　黄色ロームブロック多含。
11.灰褐色土層(5YR4/2)　焼土粒子・粘土ブロック含。
12.灰褐色土層(5YR5/2)　灰主体。
13.にぶい赤褐色土層(5YR4/3)　粘土・灰・5YR3/2含。
14.灰黄褐色土層(10YR4/2)　黄色ローム・10YR2/2粒子含。カマド掘方
15.灰黄褐色土層(10YR4/2)　黄色ローム・10YR2/2粒子含。貼床
16.暗褐色土層(10YR3/4)　10YR2/3・黄色ローム含。
17.にぶい黄褐色(10YR4/3)　黄色ローム・バミス・10YR2/2ブロック多含。
18.褐色土層(10YR4/4)　黄色ローム多量・10YR2/2・4/3含。
19.灰黄褐色土層(10YR5/2)主体・10YR2/2ブロック含。
巾.にぶい赤褐色土層(2.5YR4/4)。
a.暗褐色土層(7.5YR3/3)　焼土粒子微量含む粘土層。
b.暗褐色土層(10YR3/3)　10YR2/2粒子含。
c.にぶい黄褐色(10YR4/3)　黄色ローム・バミス・10YR2/2ブロック多含。
■住床(10YR4/2)　黄色ローム・ブロック多含。

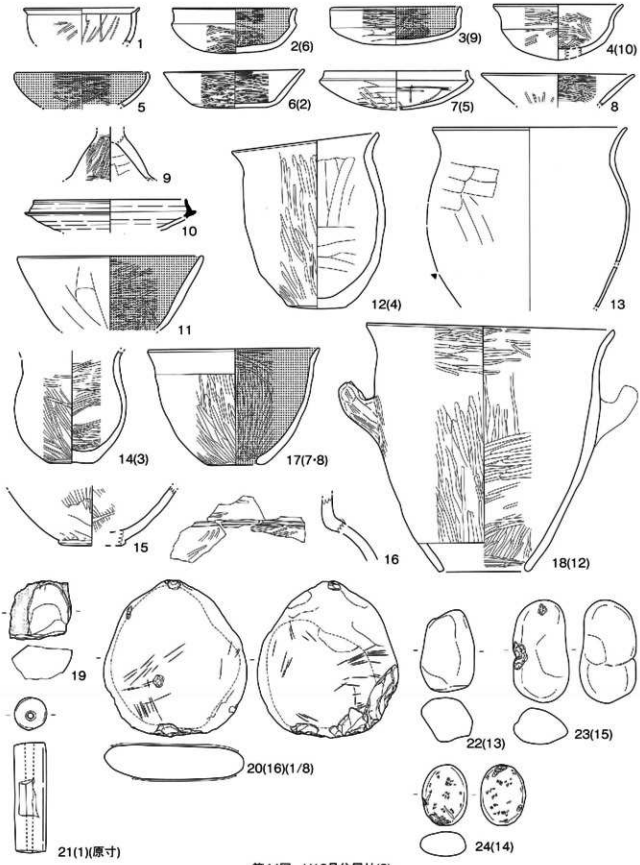
**第43図　H18号住居址(1)**

マドと対峙する南壁下には P6 が構築されていた。出入口施設であろう。

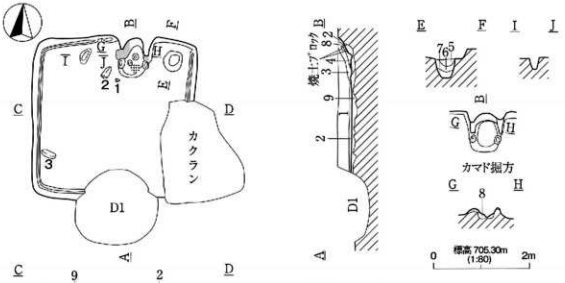
遺物は土師器、須恵器、石器・石製品が出土している。土師器には坏(1～8)、高坏(9)、鉢(11)、甕(12～15)、壺(16)、甑(17・20)の器種が認められる。坏は A1・D3・E2・F2・F3・G3の形態が認められ、2・3は内面黒色処理が施される。高坏は脚部片である。鉢は内面黒色処理が施される。甑の可能性も否定出来ない。甕はヘラケズりやヘラミガキ調整が施される。壺は頸部に隆帯が巡る特異なもので、おそらく有段口縁であろう。甑は把手を持たない小型単孔のもの、対の把手を有する大型で、底部が全開する

## ○H18 号住居址

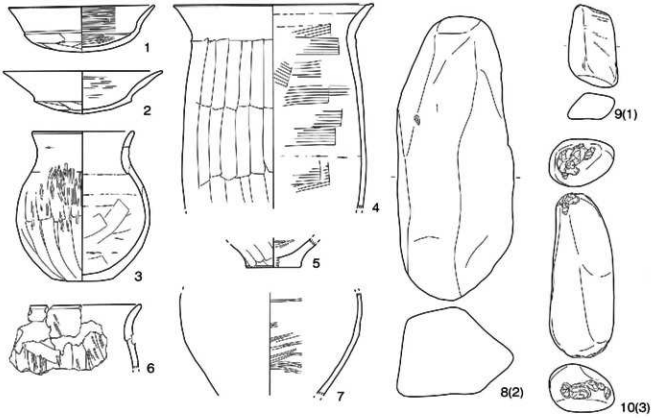
Ⅳ層4グリットで検出された。H2・H13 に切られる。北辺に比べ南辺がやや広い台形の平面プランを呈する。N−5°−W に長軸方位をとり、長軸長−5.15m、短軸長−5.55m、壁残高−0.55m の規模を有する。均等に配置される P1 ～ P4 の4基が主柱穴であり、主柱は φ14 ～ 20 cm の規模である。壁下には周溝が巡り、P1 には東壁下の周溝から、P4 には東壁下と南壁下の周溝から所謂「閉仕切溝」が延びている。P4 と2本の間仕切溝及び東南隅に囲まれた方形の空間には D1 が構築されている。所謂「貯蔵穴」であろう。北辺中央部分には石芯を粘土で被覆したカマドが構築されていた。天井石がずり落ちた様子が住居覆土の南北断面に明瞭に残されていた。このカ



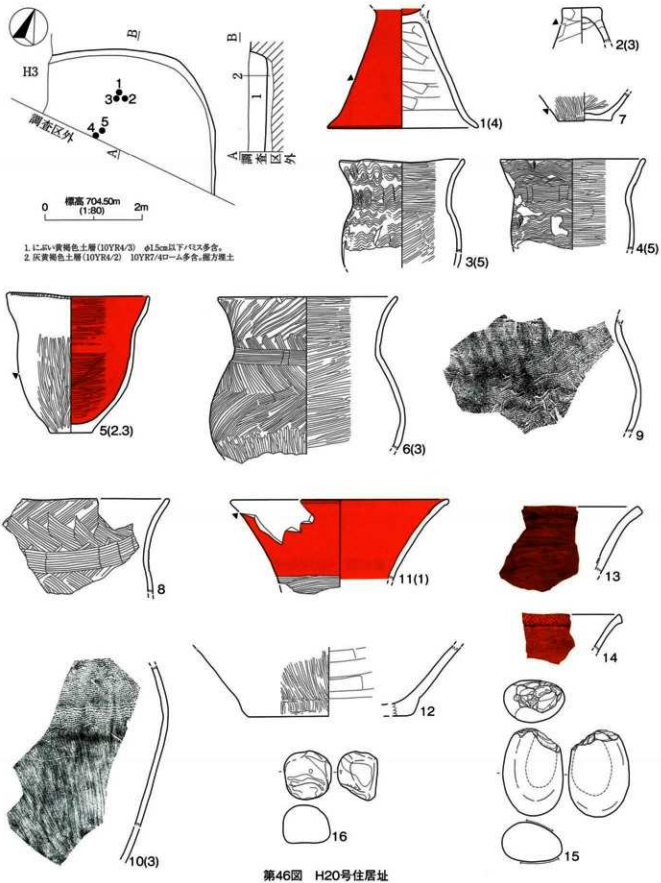

第44図　H18号住居址(2)



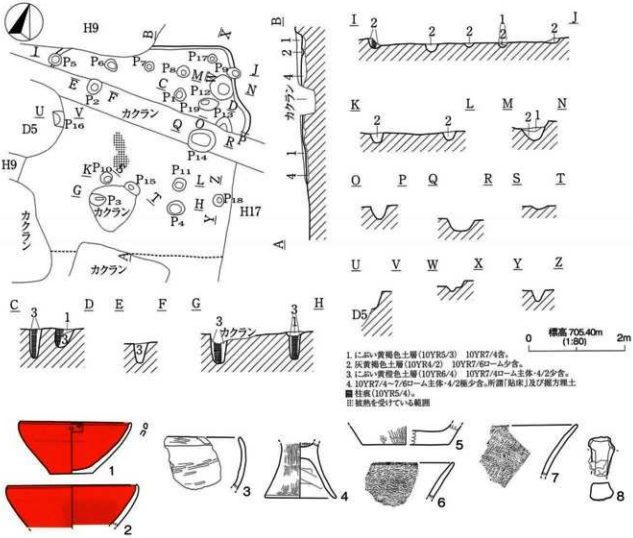

1. にぶい黄橙色土層(10YR5/3)　10YR7/4ローム3/2少含。
2. 一層中に灰・焼土・炭化物を含。
3. 10YR5/3/7/4ローム混在土。カマド構築土の流失層
4. 灰・炭化物・焼土粒子の堆積。
5. 灰・炭の堆積層・焼土少含。
6. 灰黄褐色土層(10YR5/2)　灰多含・炭化物少含。
7. 黒褐色土層(10YR3/2)。　粉質土
8. 10YR4/2/7/4ローム混在層。カマド掘方埋土
9. にぶい黄橙色土層(10YR7/4)　ローム主体-10YR4/2-5/3含。掘方埋土
※ 灰黄褐色土層(10YR4/2)　被熱を受け焼土化。カマド構築土
# 焼土。




第45図　H19号住居址(1)




第46図　H20号住居址




**第47図　H21号住居址**

ものが出土している。須恵器は坏が1点出土した。石器・石製品は砥石(19)、台石(20)、管玉(21)、編物石(22・23)、磨・敲石(24)が出土している。

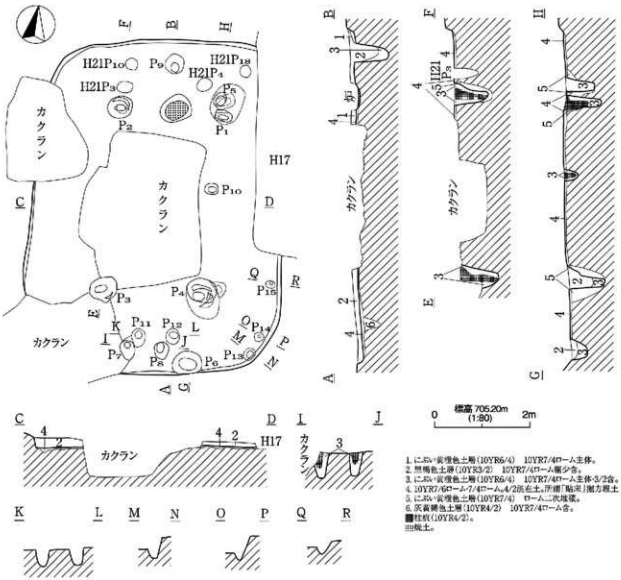
以上の出土遺物から本址の時期は、聖原遺跡の時期区分の古墳時代Ⅱ期－6世紀前葉～中葉の時期が比定される。

**○H19 号住居址**

Ⅲお 10 グリットで検出された。D1 に切られ、D5・H25 を切る。隅丸方形の平面形態である。N－0°－W に長軸方位をとり、長軸長－3.45m、短軸長－3.40m、壁残高－0.55mの規模を有する。北壁の東半（カマド東部分）以外の壁下には周溝が巡る。主柱穴は有さず、カマド東脇に貯蔵穴と思われるピットが1基掘込まれていた。カマドは所謂「地山削出し」による袖先端部分に立石を配置し、これに天井石を架け、粘土で被覆したものと思われるが、僅かに粘土が残る状態であり、ほぼ掘方と言ってよい状態であった。カマドの廃絶祭祀といった様相ではなく、構築材を再利用するために抜き取ったと考える方が妥当と思われた。

遺物は土師器、弥生土器、石器・石製品が出土している。土師器は坏（1・2）、甕（3～ 6）の器種が認められる。坏は E1・D2 の形態が認められる。甕は最大径を体部に有する 3 のようなもの と、口縁部に最大径を有する長胴の4のようなものが認められる。弥生土器は体部に櫛描波状文と斜走文が施される甕片が出土している。石器・石製品は台石（8）、磨石（9）、敲石（10）が出土している。

以上の出土遺物から本址の時期は、聖原遺跡の時期区分の古墳時代Ⅱ期－6世紀前葉～中葉の時期が比定される。



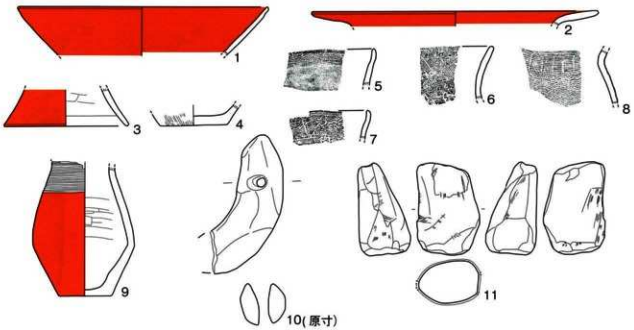

第48図　H22号住居址(1)

**○H20 号住居址**

Ⅳ3・4グリットで検出された。H3 に切られ、H28 を切る。南方向に調査区外に延びるために全容は不明である。壁残高−0.38m の規模である。調査部分には周溝、ピット、炉等は認められなかった。

遺物は弥生土器、石器が出土している。弥生土器は高坏 (1)、蓋 (2)、鉢 (5)、甕 (3 ～ 10)、壺 (11 ～ 14) の器種が認められる。高坏は脚部片であり、脚内部を除き赤彩が施される。蓋は天井部中央部分の破片である。鉢は甕形態のもので内面のみ赤彩が施される。文様は口唇部の刻目以外は施されない。甕は 3 のように口縁部～体部上半まで櫛描波状文が施文されるもの、口縁部と体部上半に櫛描波状文、頸部に櫛描簾状文が施文される 4・9、頸部の櫛描簾状文は変わらず、口縁部と体部には横描斜走文を横位羽状に施す 6・8 などが存在する。壺は口唇部に櫛描斜走文 (13) や縄文 (14) を施文するものや、口唇部文様帯は持たずに、頸部に櫛描横線を巡らす 11 が認められる。以上の3点は内外面に赤彩が施されている。石器は 15 の磨・敲石が出土している。16 は石器素材の原石である。

以上の出土遺物から、本址の年代は小山岳夫の編年 (1999 年長野県考古学会シンポジウム「長野県の弥生土器編年」) の後期Ⅲ期新に該当するものと思われる。




第 49 図　H22 号住居址 (2)

**○H21 号住居址**

Ⅲえ 10 グリットで検出された。H9・H17・H19・D5 に切られ、H14 を切る。遺構の重複が激しいため平面形態は不明であり、規模も壁残高－0.14m が提示できるのみである。均等に配置される P1 ～ P4 の４基が主柱穴と思われる。主柱は φ10～16cm の規模であった。主柱が囲む方形の中央西南寄りの床面は「８」字状に焼けており、炉の痕跡と思われる。周溝は認められなかった。

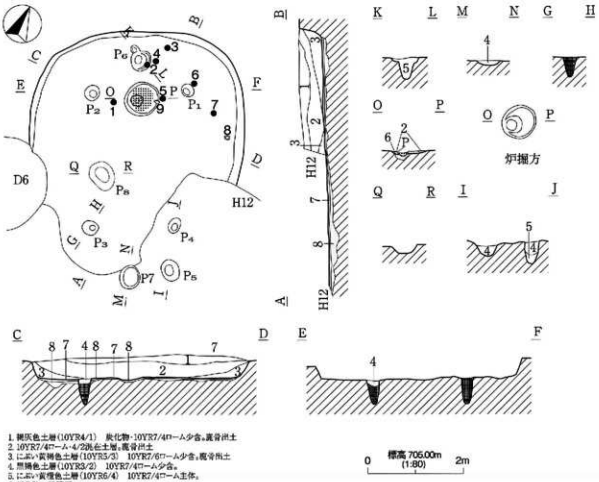
出土遺物は弥生土器、鉄が認められる。弥生土器は鉢（１～３）、台付甕（４）、甕（５～７）の器種が出土している。鉢は１・２が内外面赤彩が施されるもので、１は口縁部に２孔が穿たれている。３は無頸壺としたほうが良いのかもしれない。赤彩は施されない。台付甕は脚だけが出土している。甕は５が底部片、６は口縁部片で櫛描波状文が施される。７も口縁部片である。櫛描斜走文を横位羽状に展開しているが、最上段の斜走文が波状文化している。８の鉄は鉄塊である。素材であろうか？

以上の出土遺物から本址は弥生時代後期に位置付けられる。

**○H22 号住居址**

Ⅳえ１グリットで検出された。H17・H21・攪乱に切られる。隅丸長方形の平面形態を呈し、N－5°－W に長軸方位をとる。長軸長－7.10m、短軸長－5.42m、壁残高－0.22m の規模である。均等に配置される P1 ～ P4 の４基が主柱穴であり、主柱の規模は φ14 cm大であった。P1、P4 は堀方から旧ピットが検出されている。また、南壁下に構築された P7・P8 の対のピットは住居出入口の梯子、あるいは階段の桁を固定埋設する役割を負っていたものと推測され、P1・P4 同様に堀方から旧ピットが検出された。以上から本址は上屋の建替えが行われたことが明らかとなった。住居の長軸線上の北壁下と南壁下に構築された P9、P6 は棟持柱であろう。炉は P1 と P2 の中間に構築されていた。楕円形に掘込まれた地焼炉であった。周溝は認められなかった。

出土遺物には弥生土器、土製品、石製品が認められる。弥生土器には高坏（１～３）、甕（４～８）、壺（９）の器種が認められる。高坏は３点すべてが赤彩され、１の様に口縁部が直線的に開くものと、２の様に口縁部が水平に屈曲するものが存在する。甕は口縁部が受口気味に立ち上がる５・７と直線的に開く６の２形態が存在する。文様は、５は口縁上端に１条の櫛描波状文を巡らし、以下の口縁部を無紋とする。６は口縁部に櫛描斜走文を横位羽状に施し、頸部に櫛描簾状文を巡らす。７は口縁部に櫛描波状文、頸部に櫛描簾状文を巡らす。８は頸部に櫛描簾状文、体部に櫛描波状文を巡らす。壺９は口縁部を欠損するが他はほぼ完形である。外面には赤彩が施され、頸部には櫛描の横位条線が多段に巡らされる。体部最大径は比較的腰高に位置し、屈曲はするものの稜は形成されない。土製品は 10 の勾玉が１点出土している。石製品は 11 の砥石が１点出土した。




1. 褐灰色土層(10YR4/1)　炭化物・10YR7/4ローム少含。裏骨混土
2. 10YR7/4ローム・4/2洪石土層。裏骨混土
3. にぶい黄褐色土層(10YR5/3)　10YR7/4ローム少含。裏骨混土
4. 黒褐色土層(10YR3/2)　10YR7/4ローム少含。
5. にぶい黄橙色土層(10YR6/4)　10YR7/4ローム主体。
6. 炭化物の堆積層。
7. 黒褐色土層(10YR2/2)　主体・10YR4/2・7/4ローム少含。所謂「粘床」
8. にぶい黄橙色土層(10YR7/4)　主体・10YR2/2・4/2含。
Ⅲ 炭・焼土の堆積層。
■ 柱痕(10YR2/2)。

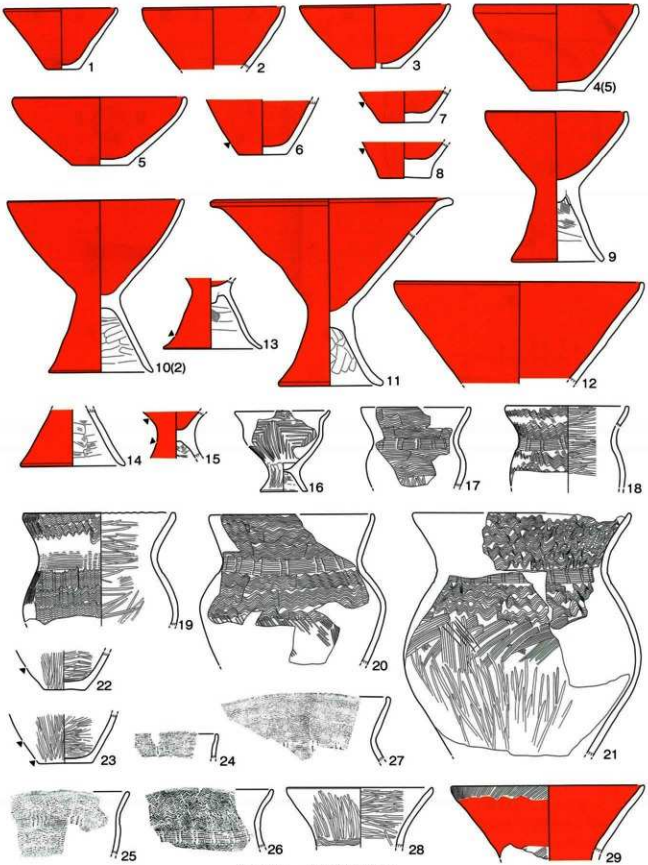
**第50図　H23号住居址(1)**

以上の出土遺物から本址は弥生時代後期の住居址と捉えられ、小山岳夫の編年（1999 年長野県考古学会シンポジウム「長野県の弥生土器編年」）の後期Ⅱ期の新しい部分から Ⅱ期の古い部分に該当するものと思われる。

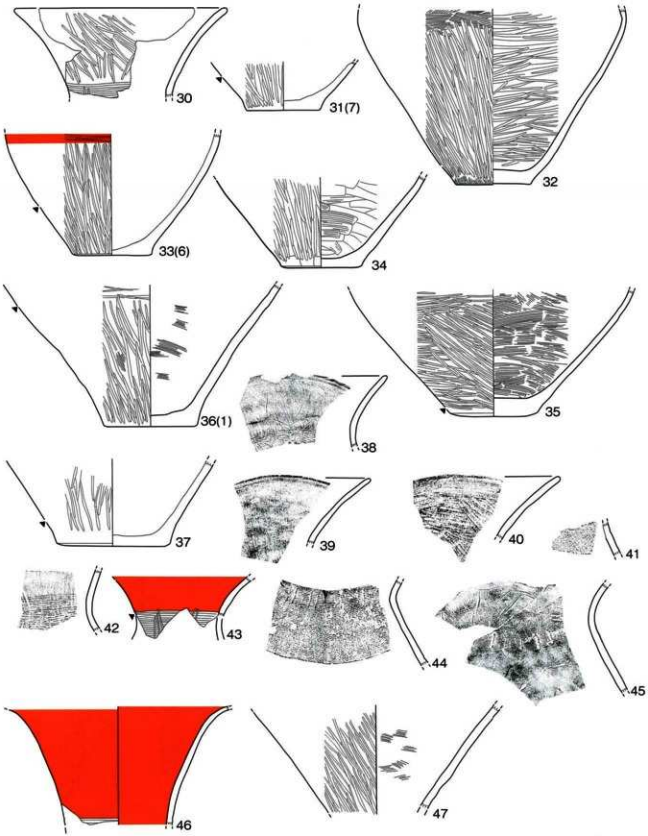
### ○H23 号住居址

Ⅳあ2グリットで検出された。H12・D6 に切られる。隅丸長方形の平面形態を呈するものと思われる。長軸方位 N−22°−W、短軸長−4.50m、壁残高−0.48mの規模である。均等に配置される P1 ～ P4 の4基が主柱穴であり、主柱はφ20 cm大の規模であった。住居の長軸線上の北壁下と南壁下に構築された P6 と P7 は棟持柱である。炉は P1 と P2 の中間に位置し、円形の掘込み内部に土器底部を埋設したものであった。周溝は認められなかった。

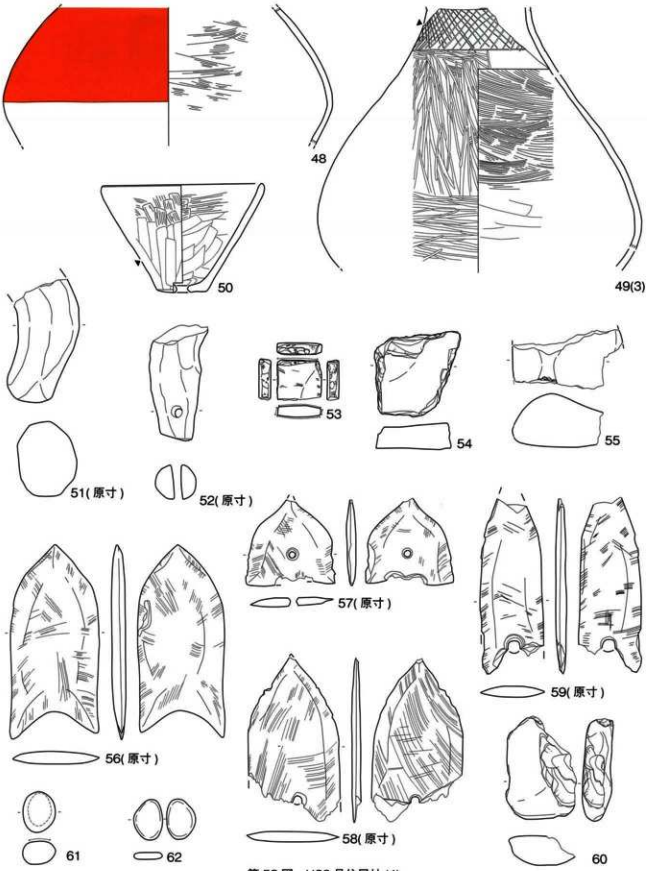
出土遺物は弥生土器、土製品、石器・石製品が出土している。弥生土器には鉢（1 ～ 8）、高坏（9 ～ 15）、台付甕（16）、甕（17 ～ 27）、壺（28 ～ 49）、甑（50）の器種が認められる。鉢はすべてが内外面に赤彩が施される。高坏も脚内を除き赤彩が施される。坏の口縁部形態には、10 の様に素直に開くものと、11 の様に垂直に折れ曲がって開くもの、9・10 の様に端部が垂直に立ち上がるものが認められる。脚端部も 11・13 のように端部が開くものと、その他様に素直に開くものが存在する。台付甕は1点のみの出土である。「コ」字重文が施される。甕は頸部に櫛描簾状文を巡らし、口縁部には櫛描波状文を施文することは共通するが、体部上半に櫛描波状文だけを施す 17・18・19・25 と櫛描波状文の下に櫛描斜走文を巡らす 20・21 の2種類が存在する。また、櫛描波状文が比較的丁寧に施文されている。壺は赤彩されるもの（29・33・43・46・48）と赤彩されないものが存在する。口縁端部は素直に開くものが大半を占めるが、28 のように弱い受口状を呈するものも存在する。文様帯は 29 を除き頸部に集約され、櫛描波状文や斜走文、簾状文、「T」字文、ヘラ描格子目文が施される。簾状文と波状文を組み合わせるなど多段構成の施文



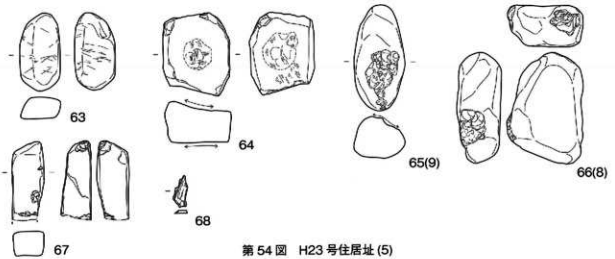

第 51 図　H23 号住居址 (2)




第 52 図　H23 号住居址 (3)




第53図　H23号住居址(4)




第54図　H23号住居址(5)

認められる。唯一口縁部文様帯を有する 29 は、この文様帯に櫛描斜走文が施されている。体部下半の稜はあまり明瞭ではない。甑は単孔の鉢形のもで、法量的には中型であろうか？土製品は土製勾玉(51)と不明(52)の2点が出土した。石器・石製品は砥石 (53)、台石 (54･55)、磨製石鏃 (56 ～ 59)、編物石 (60)、磨石 (61 ～ 64)、敲石 (65 ～ 67)、石器素材 (68) が認められる。

以上の出土遺物から本址は弥生時代後期の住居址と捉えられ、小山岳夫の編年（1999 年長野県考古学会シンポジウム「長野県の弥生土器編年」）の後期Ⅰ期の新しい部分からⅡ期の古い部分に該当するものと思われる。

### ○H24 号住居址

Ⅲき10グリットで検出された。H31・D9・D10 を切る。東北隅がやや鋭角な隅丸長方形の平面形態である。長軸方位 N－23°－W、長軸長－4.80m、短軸長－3.90m、壁残高－0.60m、面積－12.7 ㎡の規模である。均等に配置される P1 ～ P4 の4基が主柱穴である。主柱は幅 30 ㎝ × 厚 12 ㎝大の板状である。P3 から西壁に向かい間仕切状の溝が確認されている。南壁下中央には対となる P5・P6 の2基のピットが認められた。住居出入口の梯子、あるいは階段の桁を固定埋設する役割を負っていたものと推測される。その東脇には南壁以外の3方を「堤」状の土盛りで囲った P7 が検出されている。貯蔵穴であろう。炉は P1 と P2 の中間に構築されていた。平面「8」字状の地焼炉である。本址西北隅の壁面には横穴が2基穿たれており、1本は D7 に、1本は H39 に繋がっていた。後世のカクランではなく住居に伴う施設と思われるが、その性格は不明である。しかし、この3基の遺構が同時に存在し、関連していたことは確かであろう。

遺物は、弥生土器、土製品、石器・石製品が出土している。弥生土器には鉢 (1･2)、高坏 (3)、甕 (4 ～ 10)、壺 (11･22) の器種が認められる。鉢 1 は口縁部に並列する2ケの円孔が穿たれる。2点共に内外面が赤彩される。高坏は脚と坏の連結部分の破片である。赤彩は認められない。甕は頸部に櫛描簾状文が巡らされることは共通するが、口縁部と体部上半には櫛描波状文が施されるものと、櫛描斜走文を横位羽状に施すものの2種類が存在する。壺は頸部文様帯に、11 は櫛描の「T」字文、12 はヘラ描の斜走文を横位羽状に多段に施文する。12 は外面に赤彩が施される。土製品は 13 の勾玉が認められる。石器・石製品は 14 の砥石、15 の磨製石鏃、16 の磨石、17・18 の磨・敲石、19・20 の敲石、21・22 の剥片が認められる。

以上の出土遺物から本址は弥生時代後期の住居址と捉えられ、小山岳夫の編年（1999 年長野県考古学会シンポジウム「長野県の弥生土器編年」）の後期Ⅲ期古に該当するものと思われる。

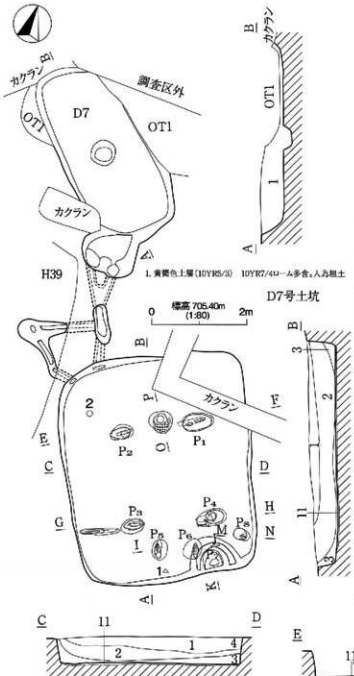
### ○H25 号住居址

Ⅲか9グリットで検出された。H9・H19・H24・D11 に切られ、H31 を切る。隅丸長方形の平面形態を呈するものと思われる。N－10°－W に長軸方位をとり、長軸長－8.70m、壁残高－0.22mの規模を有する。均等に配置された P1 ～ P4 の4基が主柱穴である。主柱は板状を呈し、幅 26 ㎝前後、厚 10 ㎝大であった。周溝は有さず、炉も存在しなかったが、攪乱や他遺構により消滅したものと思われる。南壁下中央部分に集中する掘込みは出入口に関連するものであろう。その他のピットや土坑については、本址に伴うか否かを含めその性格も判然とはしない。

遺物は弥生土器、縄文土器、土製品、石器・石製品、銅製品が出土している。弥生土器には鉢(1 ～ 4)、高坏(5 ～ 10)、甕(11

～ 28)、壺 (29 ～ 36)、甑 (37) の器種が認められる。鉢には 3 のように外面口縁部に縄文を施すものや、4のような無頸壺様のものも存在する。高坏は坏部上半が稜をもって屈曲し、口縁部が水平に開く形態のものが認められる (6・7)。また、10 の様に外面口縁部に櫛描斜走文を横位羽状に巡らすものも認められる。甕は頸部に櫛描簾状文を巡らすことは共通するが、口縁部と体部上半の文様帯には櫛描波状文を施す 12 ～ 17、19・21・22 と櫛描斜走文を横位羽状に施す 11・18・28、口縁部には櫛描波状文、体部上半には櫛描斜走文を横位羽状に施す 23、口縁部と体部に櫛描波状文を施し、体部の波状文下に櫛描斜走文を追加する 27 など多様なものが存在する。また、23 は更に頸部簾状文に円形貼付文が付加されている。壺は口縁部あるいは口唇部に文様帯を有するものが認められる。31 は受口口縁の外面に櫛描波状文が施され、35 は口唇部に櫛描斜走文が施される。頸部には 32 のように櫛描横線文が施されるものや、36 のようにヘラ描平行沈線間にヘラ描斜走文を横位羽状に施すものが認められる。甑 (37) は小型の単孔のものである。縄文土器は 38 の縄文が施される深鉢片が1点出土している。土製品は 39 の勾玉が出土した。40 については時代・器種共に不明である。石器・石製品は砥石 (41)、勾玉 (42・47)、磨製石鏃 (43)、打製石鏃 (46)、打製石鏃 (44)、軽石製品 (45)、磨石 (48・49・54)、敲石 (50 ～ 53)、磨製石鏃の素材あるいは剥片 (55 ～ 57) が認められる。特に注目すべきは石製の勾玉 42・47 である。42 は板状であるが、造りは丁寧で所謂「石製模造品」的なものではなく、石質も明らかに異なる。47 は小型であるが翡翠製である。銅製品は釧 (58・59) が2点出土している。同一個体の可能性も高い。

以上の出土遺物は、小山岳夫の編年 (1999 年長野県考古学会シンポジウム『長野県の弥生土器編年』) の後期1期の遺物と後期Ⅲ期古の遺物が混在しているが、本址の年代は弥生時代後期Ⅲ期古と思われる。




第55図　H24号住居址(1)・D7号土坑

### ○H26 号住居址

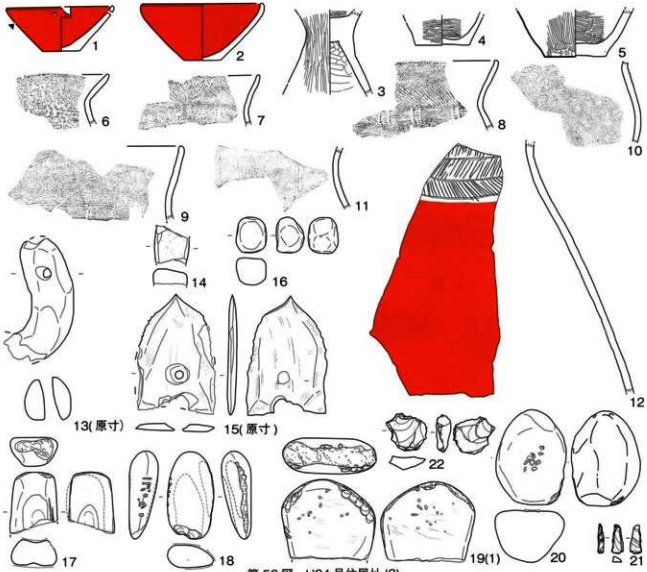
Ⅳお３グリットで検出された。H3 に切られ、H28･H30 に切られる。平面形態は H3 による破壊が著しく不明である。規模は短軸長－5.50m、壁残高－0.60m である。P1 は本址の主柱穴であろう。P3 はφ14㎝大の柱痕が確認されたが P2 共々用途は不明である。P3 上に置かれていた石はカマドの天井石であろう。周溝は東壁下にのみ認められた。カマドは北壁の中央に構築されており、地山削出しによる袖と、これを被覆した僅かな粘土が残されていた。

出土遺物は土師器、須恵器、石器・石製品、鉄器が認められる。土師器には坏（１～７）、甕（９･10）の器種がある。坏は E1･E4･D2･G1 の形態が認められる。E4 形態の４は北武蔵型の坏である。１･５･６･７は内面黒色処理が施される。須恵器は８の坏蓋が１点出土している。口縁端部は丸い。口縁部と天井部の境には太めの沈線が巡り稜を形成している。甕９は長胴、10 は胴張である。10 の口縁端部は明らかに須恵器を模倣している。石器は 11 が磨・敲石、12 ～ 14 が敲石である。鉄器は 15 の角釘が１本出土した。

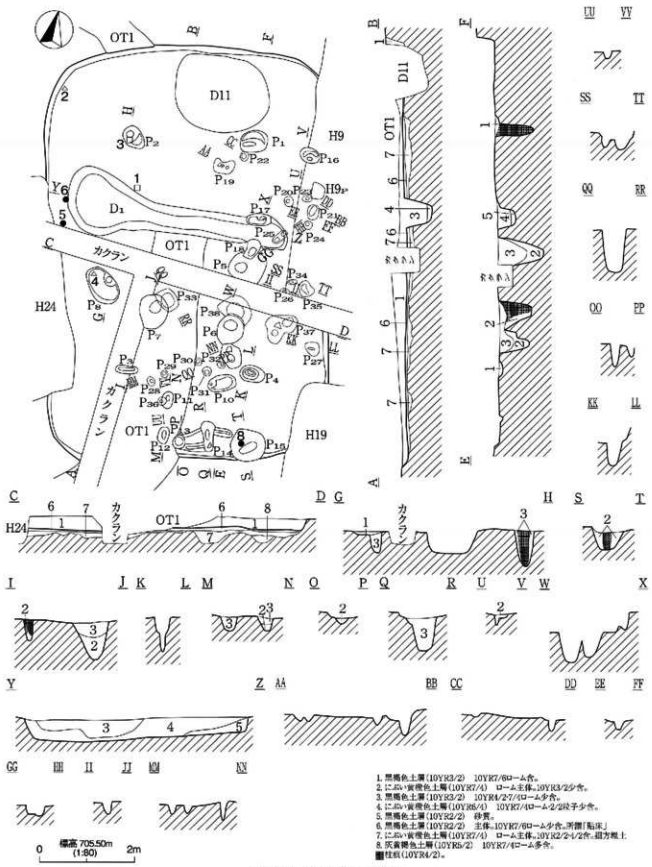
以上の出土遺物から本址の年代は、聖原遺跡の時期区分の古墳時代Ⅲ期－６世紀中葉～７世紀初頭の時期が比定される。

### ○H27 号住居址

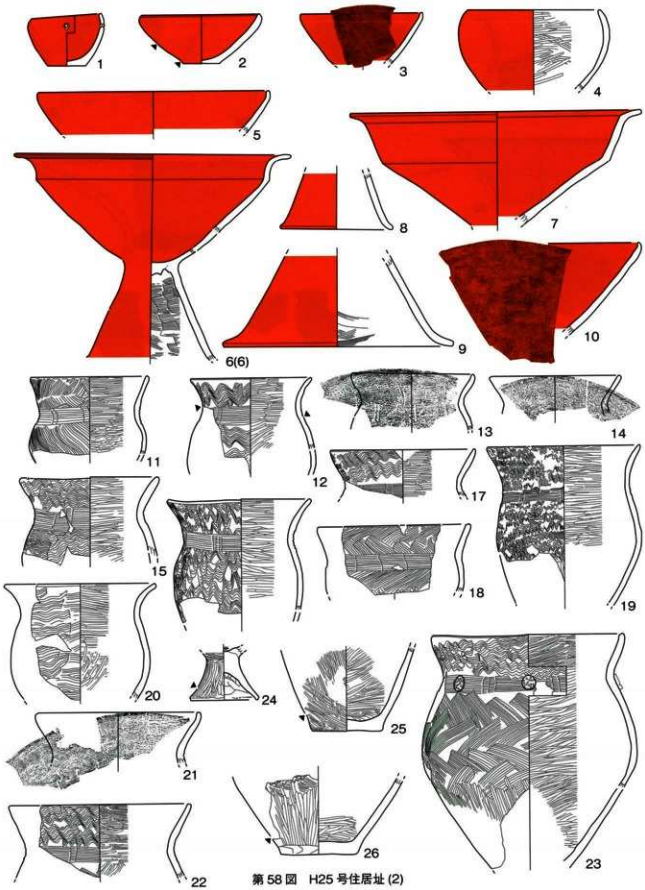
Ⅳけ３グリットで検出された。H13 に切られ、H33・H34・H38 を切る。平面形態は隅丸方形である。長軸方位を N －60° －W にとる。規模は長軸長－5.39m、短軸長5.75m、壁残高－0.38m である。均等に配置される P1 ～ P4 の４基のピッ



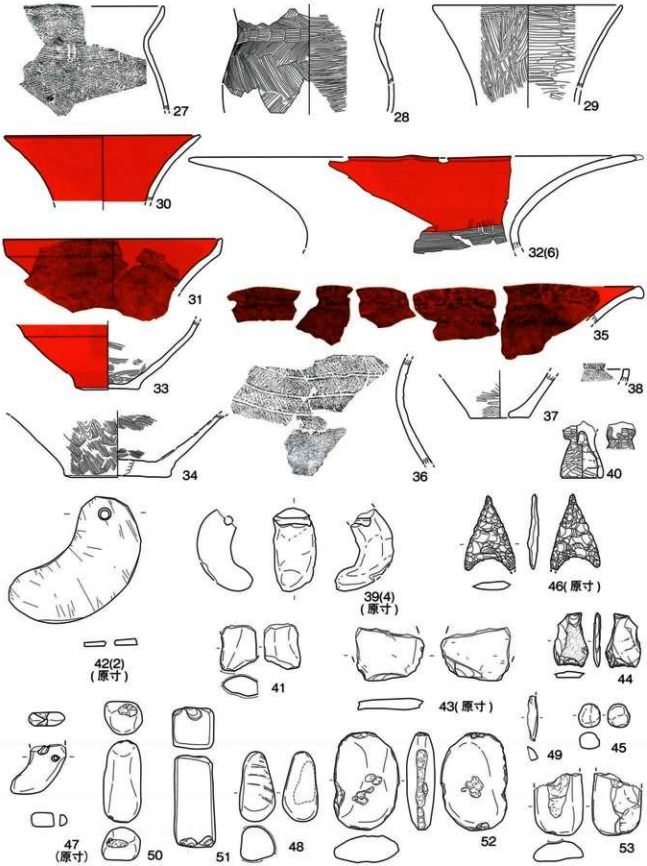

第 56 図　H24 号住居址 (2)




第57図　H25号住居址(1)




第 58 図　H25 号住居址 (2)



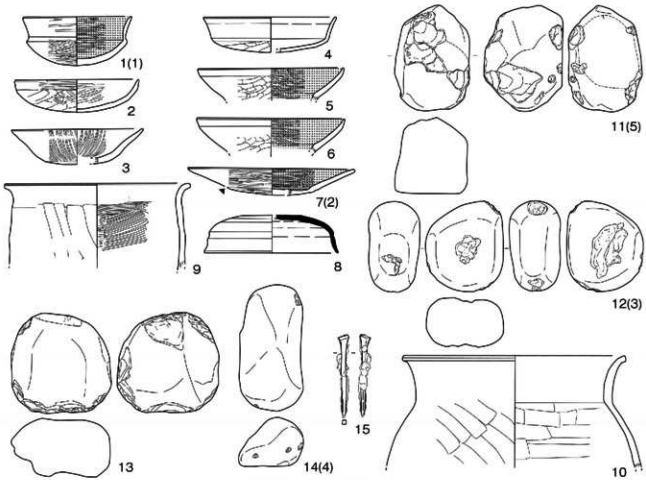

第59図　H25号住居址(3)

第 60 図　H25 号住居址 (4)

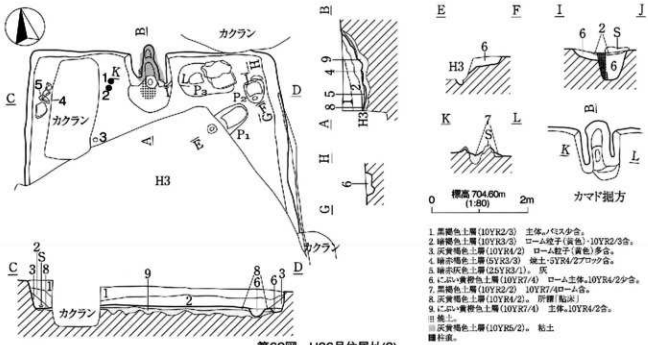
トが主柱穴である。主柱はφ24 cm前後の規模であった。壁下には周溝が巡り、4 基の主柱に向かい所謂「聞仕切溝」が延びている。カマドは西壁の中央に石芯を粘土で被覆して構築されていた。カマドの南脇には貯蔵穴が認められた。また、カマドと対峙する東壁下中央には出入口施設と思われる P6 と周溝から延びる溝が認められた。

遺物は土師器、須恵器、弥生土器、土製品、石器・石製品が出土している。土師器には坏（1 ～ 8）、高坏（9 ～ 11）、甕（12 ～ 23）、壺（23 ～ 26）、甑（27 ～ 31）、手捏（32）の器種が認められる。坏は A1、G1 の 2 形態が存在する。高坏は暗文状ヘラミガキが顕著で、坏部に稜を有する。甕は鉢とした方が良いものも含まれる。法量的には小・中・大に分かれる。器形は体部に最大径を有するもので、所謂「長胴甕」は認められない。壺との区別は器面調整における、ヘラミガキと、火にかけて使用したか否かによる。甑も甕同様に、法量的には小・中・大に分かれる。底部は、基本的に全開であるが、30 のみ単孔である。31 は甑としては見慣れない器形である。須恵器は瓶が 1 点出土している。土製品は勾玉が 1 点出土した。弥生土器は頸部に櫛描簾状文、口縁部と体部に櫛描波状文が施される甕、口縁部に櫛描は縄文が施される壺と頸部にヘラ描斜走文を横羽状に配置する壺が出土している。石器・石製品は 38 の磨石、37 の敲石、40 の磨製石鏃用の石材が出土している。

以上の出土遺物から本址の年代は、聖原遺跡の時期区分の古墳時代 I 期 − 5 世紀後半～ 6 世紀初頭の時期が比定される。

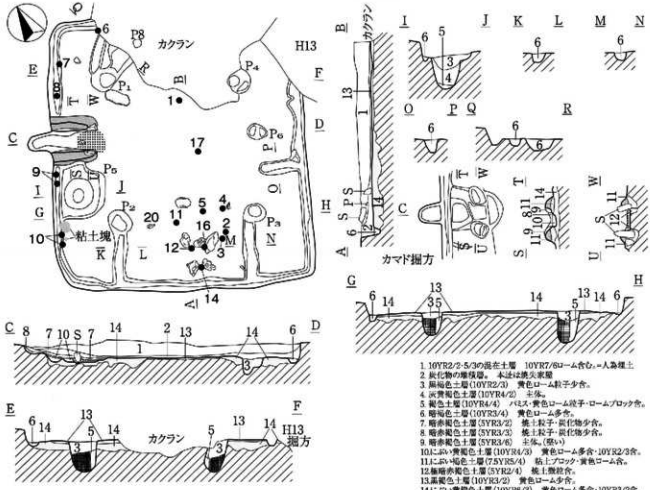



第61図　H26号住居址(1)



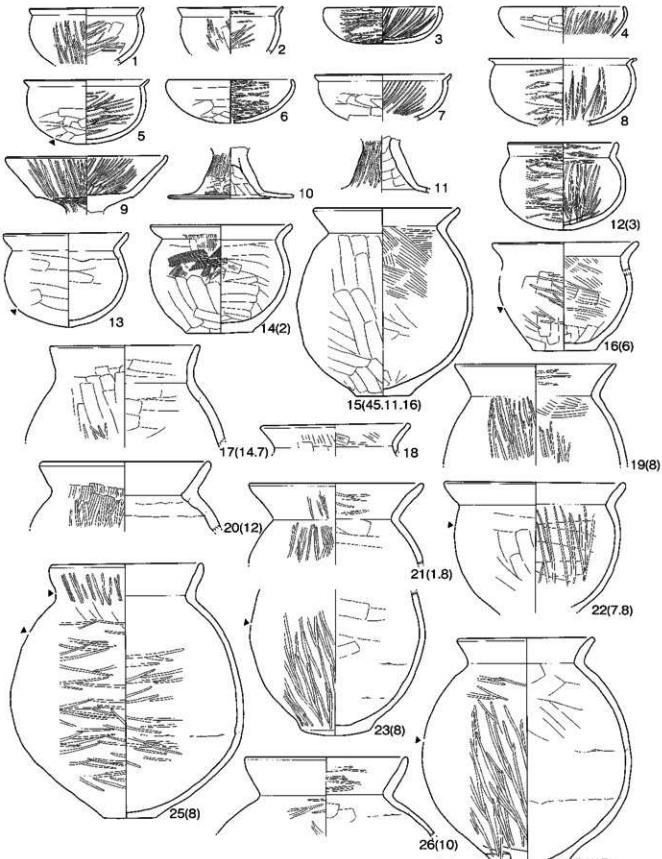

1. 黒褐色土層(10YR2/3)　土器、パミス少含。
2. 暗褐色土層(10YR3/3)　ローム粒子(黄色)・10YR2/3含。
3. 灰黄褐色土層(10YR4/2)　ローム粒子(黄色)多含。
4. 暗赤褐色土層(5YR3/3)　焼土・5YR4/2ブロック含。
5. 暗赤灰色土層(2.5YR3/1)。　炭
6. にぶい黄橙色土層(10YR7/4)　ローム土体。10YR4/2少含。
7. 黒褐色土層(10YR2/2)　10YR7/4ローム含。
8. 灰黄褐色土層(10YR4/2)。　所謂「粘土」
9. にぶい黄橙色土層(10YR7/4)　土体。10YR4/2含。
H 焼土。
S 灰黄褐色土層(10YR5/2)。　粘土
■杭痕。

第62図　H26号住居址(2)

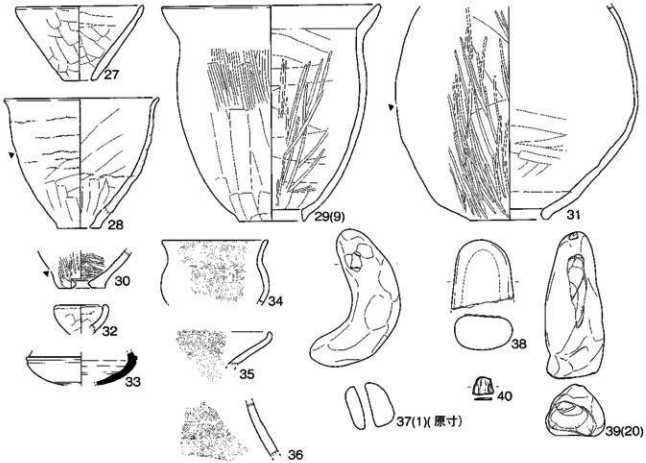



1. 10YR2/2-5/3の混在土層　10YR7/6ローム含む。=人為埋土
2. 炭化物の堆積層。　本法は焼失家屋
3. 褐色土層(10YR2/3)　黄色ローム粒子少含。
4. 灰黄褐色土層(10YR4/2)　主体。
5. 褐色土層(10YR4/4)　パミス・黄色ローム粒子・ローム/ブロック含。
6. 暗褐色土層(10YR3/4)　黄色ローム多含。
7. 暗赤褐色土層(5YR3/2)　焼土粒子・炭化物少含。
8. 暗赤褐色土層(5YR3/3)　焼土粒子・炭化物少含。
9. 暗赤褐色土層(5YR3/6)　主体。(焼い)
10. にぶい黄褐色土層(10YR4/3)　黄色ローム多含・10YR2/3含。
11. にぶい褐色土層(7.5YR5/4)　粘土ブロック・黄色ローム含。
12. 極暗赤褐色土層(5YR2/4)　焼土微粒含。
13. 黒褐色土層(10YR3/2)　黄色ローム少含。
14. にぶい黄橙色土層(10YR6/3)　黄色ローム多含・10YR3/2含。
H 赤褐色土層(5YR4/6)。　火床
S 暗褐色土層(7.5YR3/3)　粘土主体。
■焼痕(10YR4/2)　主体。

第63図　H27号住居址(1)




第64図　H27号住居址(2)



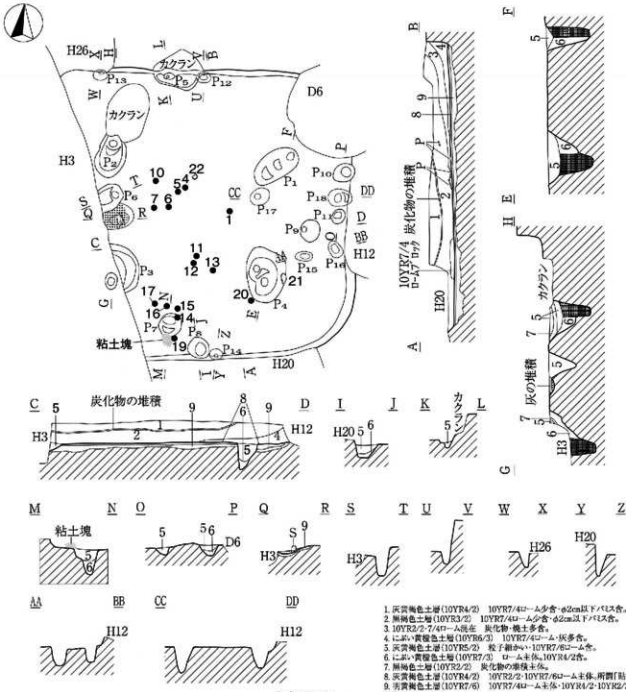

第65図　H27号住居址(3)

○H28号住居址

Ⅳう4グリットで検出された。H3・H12・H20・H26・D6に切られる。他遺構による破壊により全容は不明である。短軸長－6.1m、壁残高－0.45mの規模を有する、隅丸長方形の平面形態を呈するものと思われる。主柱穴はP1～P4の4基であり、均等に配置されている。主柱はφ20 cm前後の規模である。P1・P4の形態から本址は建替が行われたものと思われる。東壁ドの狛方で検出されたP9・P10は出入口施設と思われる。周溝は有さない。炉はP2とP3の中間に構築された地焼炉で、楕円形の平面形態を呈する。

遺物は弥生土器、縄文土器、土製品、石器・石製品、鉄器が出土している。弥生土器には鉢（1～7）、台付鉢（8）、高坏（9～14）、甕（15～52）、無頸壺（53・54）、壺（55～81）の器種が認められる。鉢は赤彩が施されるものと、されないものが存在するが、されないものは総じて法量が大きい。高坏は赤彩が施され、外面口縁部に櫛描波状文を巡らすものも存在する。坏部に稜を有するものは皆無である。甕は頸部櫛描簾状文は共通するが、口縁部と体部には櫛描波状文を施すものと、櫛描斜走文を横位羽状に施すもの、また口縁部は櫛描波状文、体部は櫛描斜走文の横位羽状のもの等が存在する。49の様な円形貼付文や上田市「和手遺跡」に特徴的な頸部に櫛描簾状文の代わりに櫛描「T」字文を施すもの（50・51）も認められた。無頸壺は2点共に内外面に赤彩が施されている。甕は赤彩を基本とするが、施されないものも存在する。口縁部文様帯を有するもの（57・59・71～73）、円形貼付文が付加されるもの（71・72・74・75）も存在する。頸部文様帯にはヘラ描、あるいは櫛描の斜走文を横位羽状に展開するものや、ヘラ描の櫛歯文が多く、櫛描横線文や「T」字文を施すものは（76・81）少数である。体部下半の明瞭な稜も未発達である。縄文土器は82の楕円押型文が施される深鉢片が1点出土している。土製品は83の勾玉が1点出土した。石器・石製品は紡石（84～86）、打製石斧（87）、磨製石斧（88・89）、磨製石鎌（91）、打製石鎌（92）、スクレイパー（90）、擂み物石（93～95）、磨石（96～100）、磨・敲石（101）、敲石（102～108）、素材・剥片（109～113）の器種が認められる。鉄器は(113)の刀子が1点出土している。

以上の出土遺物から、本址の時期は小山岳夫の編年（1999年長野県考古学会シンポジウム「長野県の弥生土器編年」）の弥生時代後期Ⅱ期と思われる。




1. 灰黄褐色土層(10YR4/2)　10YR7/4ローム少含・φ2cm以下パミス含。
2. 黒褐色土層(10YR3/2)　10YR7/4ローム少含・φ2cm以下パミス含。
3. 10YR2/3-7/4ローム混在　炭化物・焼土多含。
4. に赤い黄褐色土層(10YR6/3)　10YR7/4ローム・灰多含。
5. 灰黄褐色土層(10YR5/2)　粒子細かい・10YR7/8ローム含。
6. に赤い黄褐色土層(10YR7/3)　ローム主体。10YR4/2含。
7. 黒褐色土層(10YR2/2)　炭化物の堆積土体。
8. 灰黄褐色土層(10YR4/2)　10YR2/2・10YR7/6ローム主体。所謂「粘床」
9. 淡黄褐色土層(10YR7/6)　10YR7/4ローム主体・10YR4/2・10YR2/2少含。
⁞⁞ 焼土。
▥ 柱痕(10YR6/4)　10YR7/4ローム主体。

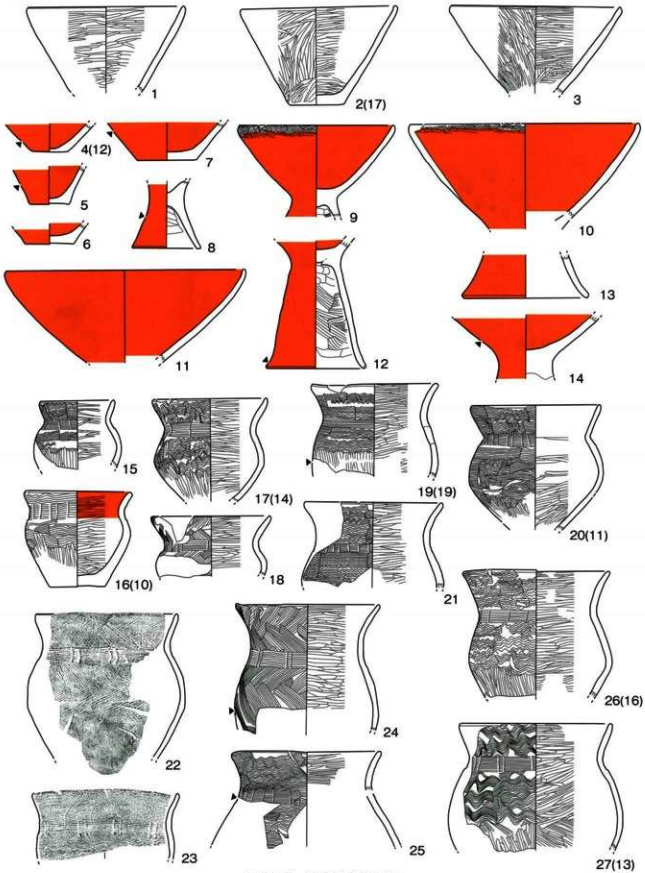
第66図　H28号住居址(1)

○H29 号住居址

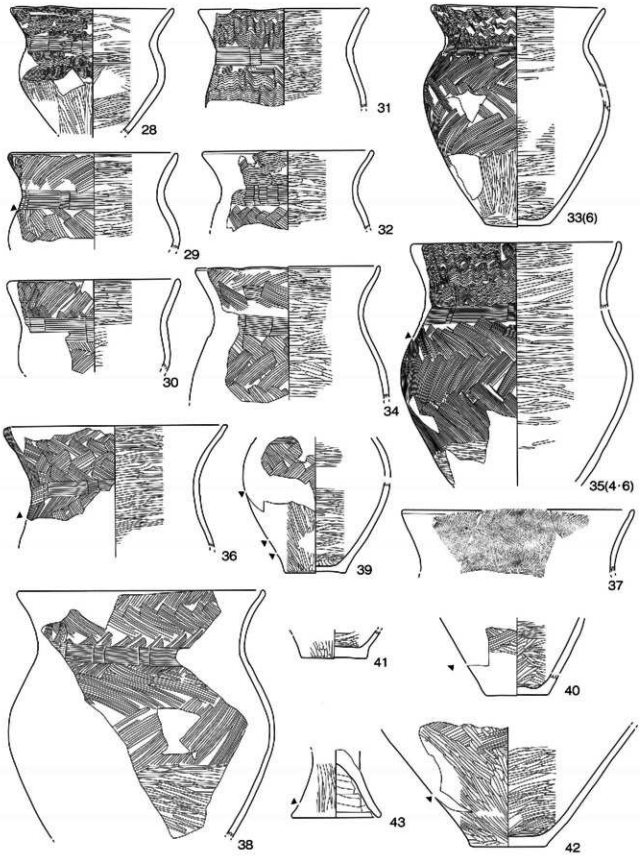
Vあ7グリットで検出された。カマドと思われる石と焼土が確認された。そのため、規模・形態等は不明である。

遺物は土師器と石器が出土している。土師器は坏(1～4)、甕(5～7)の器種が認められる。坏は全て内面に黒色処理が施される。ロクロからの切離方法は1・2が回転糸切、4はヘラである。甕は全て武蔵甕であり、口縁部は「コ」字である。石器は敲石が1点出土している。

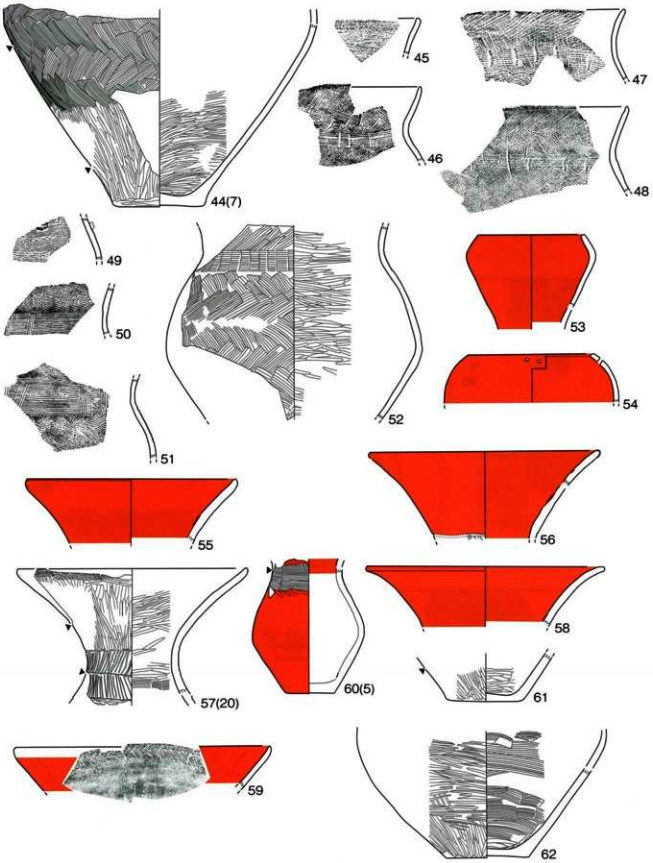
以上の出土遺物から本址の年代は、皇原遺跡の時期区分の平安時代V期−9世紀前半の時期が比定される。



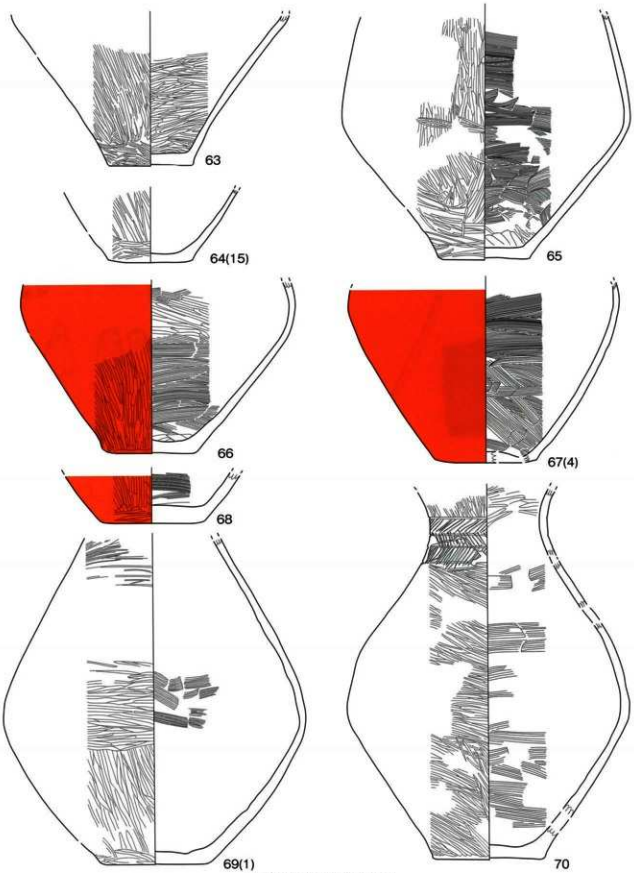

第 67 図　H28 号住居址 (2)



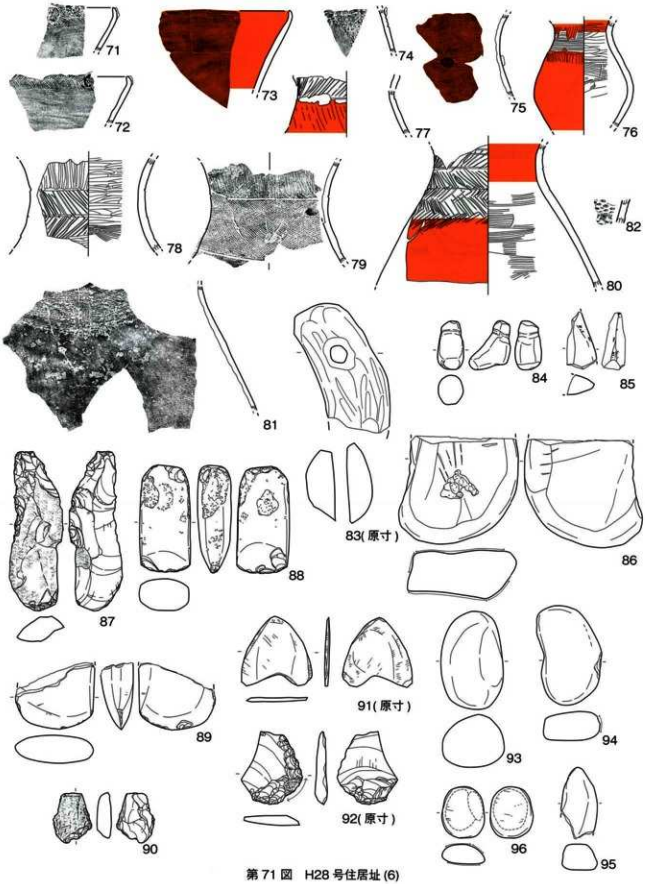

第68図　H28号住居址(3)



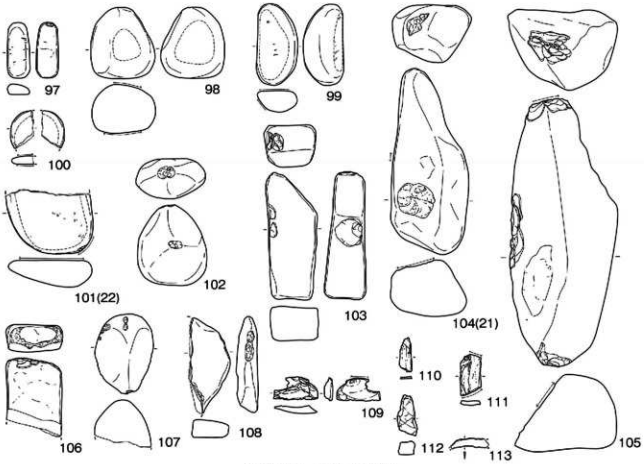

第 69 図　H28 号住居址 (4)



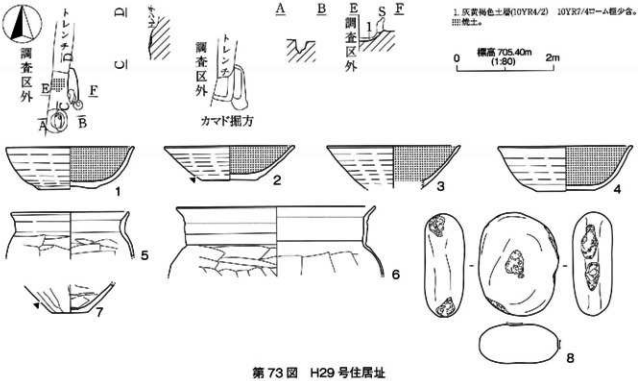

第 70 図　H28 号住居址 (5)



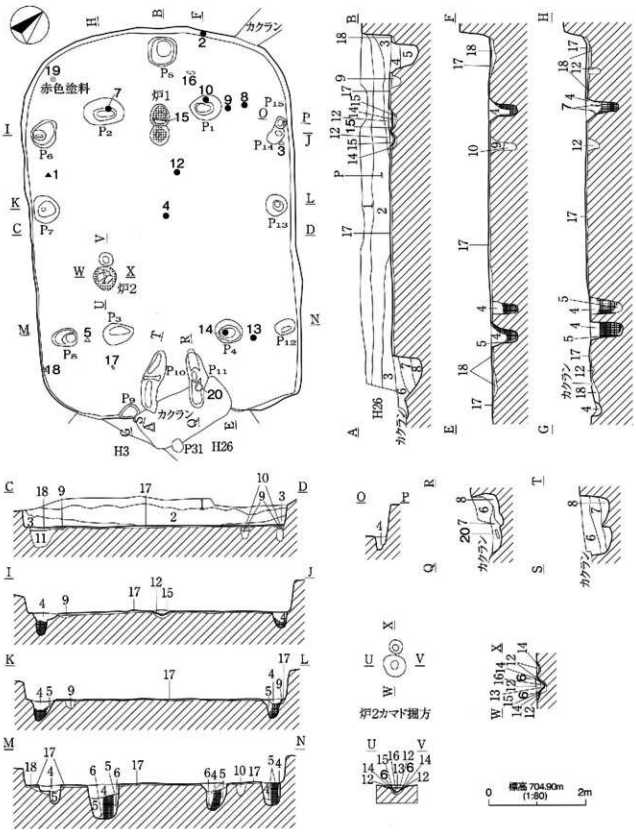

第 71 図　H28 号住居址 (6)



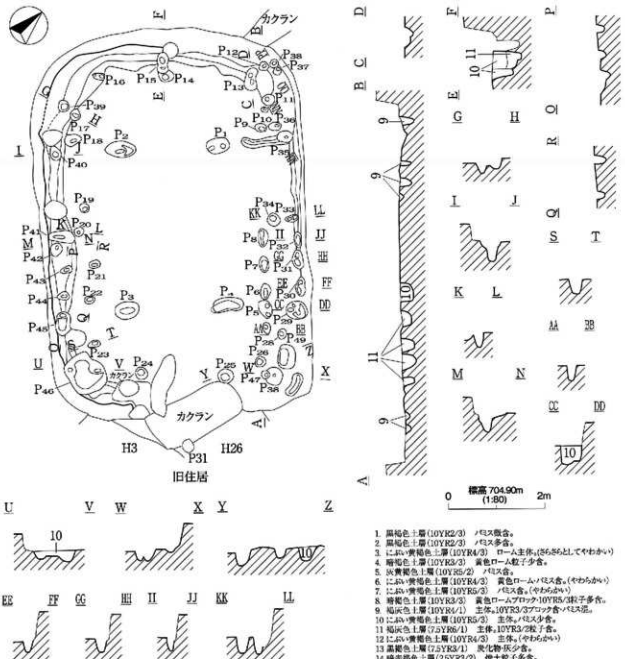

第 72 図　H28 号住居址 (7)




第 73 図　H29 号住居址



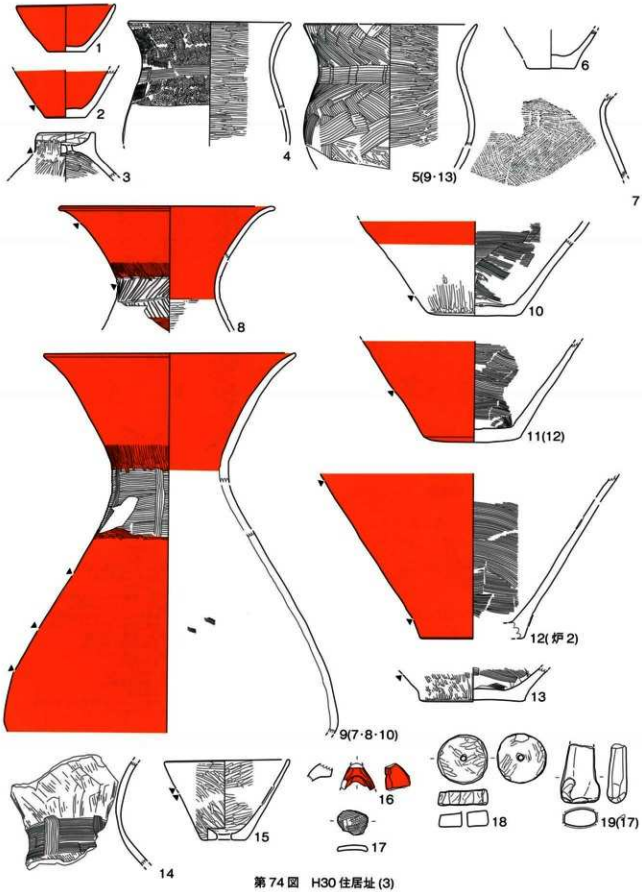

第73図　H30号住居址(1)



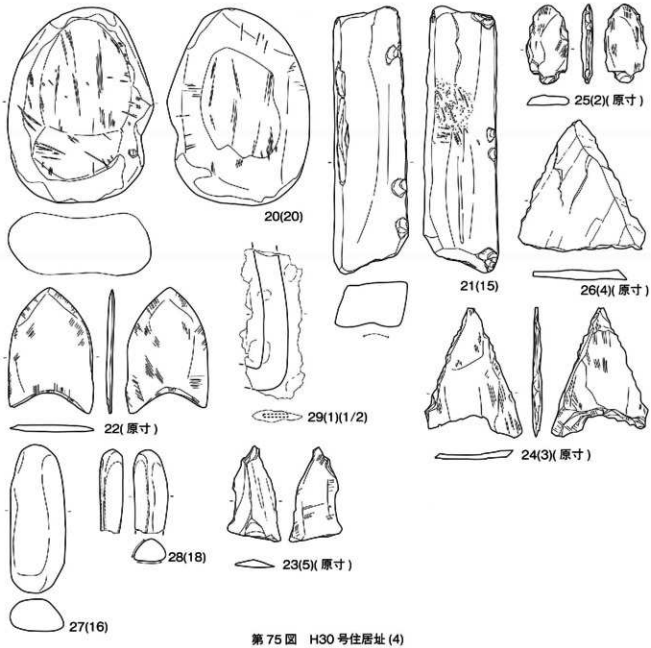

第74図　H30号住居址(2)

**○H30 号住居址**

Ⅳ層2グリットで検出された。H3・H26 に切られる。隅丸長方形というよりは、小判型の平面形態を呈する。N−46°−W に長軸方位をとり、長軸長−8.18m、短軸長−5.6m、壁残高−0.6m、面積−31.6 ㎡の規模を有する。均等に配置された P1 ～ P4 の4基が主柱穴であり、長辺である東西壁下に均等配置された P6 ～ P8、P12 ～ P14 の6基は所謂「雁柱穴」である。このことは、本址の上屋が「ふきおろし」の状態ではなく、壁が立ち上がる外観であった可能性を示唆する。




第74図　H30住居址(3)

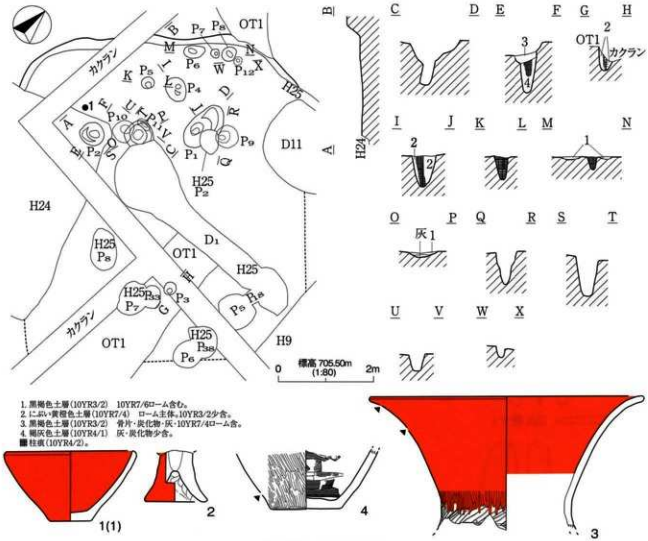



第 75 図　H30 号住居址 (4)

南壁下に対で構築された不整形な楕円形ピット－P10・P11 は、出入口施設である。炉は P1・P2 間と、P3 の北側の２カ所に構築されていた。前者を炉１、後者を炉２とすると炉１は２基のピットが「８」字状に連結した形態であり、炉石を伴う。炉２は円形のピット内に土器を埋設したものであった。本址は堀方調査により、拡張されて建替が行われたことが明らかとなった。規模的には長軸長で 50 ㎝前後小さく、壁下には周溝を有している。

遺物は弥生土器、土製品、石器・石製品、鉄器が出土している。弥生土器には鉢（1･2）、甕（3）、甕（4 ～ 7）、壺（8 ～ 14）、甑（15）の器種が認められる。甕は頸部櫛描簾状文は共通するが、口縁部と体部上半は櫛描波状文か櫛描斜走文の横位羽状の２種類が認められる。壺は赤彩を基本とし、頸部には櫛描「T」字文か、ヘラ描斜走文を横位羽状に展開する。土製品は 16 の匙、17 の土器片円盤、18 の土製円盤が認められる。石器・石製品は砥石（19）、台石（20・21）、磨製石鏃あるいはその未製品（22 ～ 26）、礫物石（27）、磨石（28）が認められる。鉄器は器種不明の 29 が１点出土した。

以上の出土遺物から、本址の時期は小山岳夫の編年（1999 年長野県考古学会シンポジウム「長野県の弥生土器編年」）の弥生時代後期Ⅲ期と思われる。




第76図　H31号住居址

**○H31 号住居址**

Ⅲき9グリットで検出された。H24・H25 に切られるため、全容は不明である。壁残高−0.28mの規模である。P1・P2 は主柱穴と思われる。周溝は認められず、炉も調査範囲には存在しなかった。

遺物は弥生土器が出土している。器種的には内外面に赤彩が施される鉢（1）、外面に赤彩が施された高坏の脚（2）、頸部にヘラ描斜走文を横位羽状に展開すると思われる内外面赤彩の壺口縁部（3）、残存部無彩の壺底部（4）が認められる。

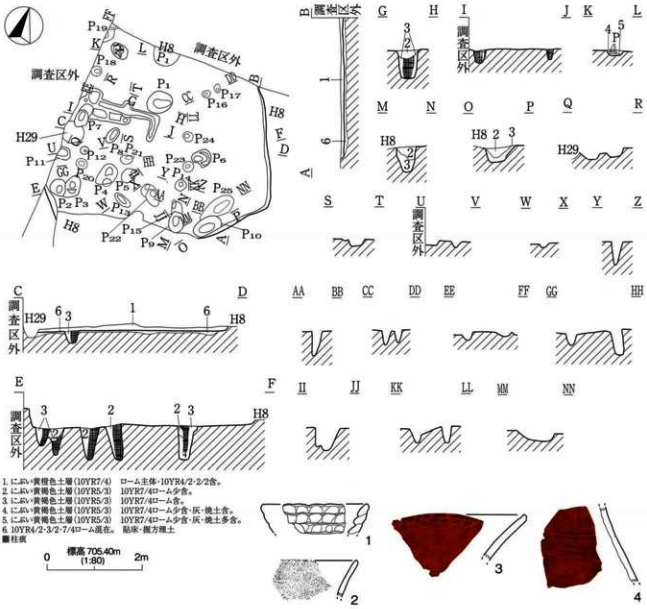
以上の出土遺物から本址は弥生時代後期の住居址と捉えられ、小山岳夫の編年（1999 年長野県考古学会シンポジウム「長野県の弥生土器編年」）の後期Ⅲ期に該当するものと思われる。

**○H32 号住居址**

Ⅲこ8グリットで検出された。H8 号住居址に切られる。北・西方向に調査区外に延びるため全容は不明である。壁残高−0.1m の規模である。P4・P6 は主柱穴の可能性が高いが、判然としない。床面、堀方から検出された計 25 基のピットの性格は不明である。周溝は有さず、調査範囲にはカマド、炉等は存在しなかった。

遺物は弥生土器が出土している。1 は輪積痕を残す鉢である。同様な土器は佐久市内の複数の遺跡で検出されており、製作途中の未製品ではなく、使用目的による制約を受けこの様な形態を呈しているものと思われる。2 は甕の口縁部片であり、櫛描斜走文を横位羽状に展開している。3・4 は赤彩が施される壺である。5 は口縁部片であり、口縁部に櫛描斜走文が施される。4 は頸部片である。ヘラ状工具による平行沈線間に斜走文が施される。

以上の出土遺物から本址は弥生時代後期の住居址と捉えられ、小山岳夫の編年（1999 年長野県考古学会シンポジウム「長野県の弥生土器編年」）の後期Ⅰ期に該当するものと思われる。



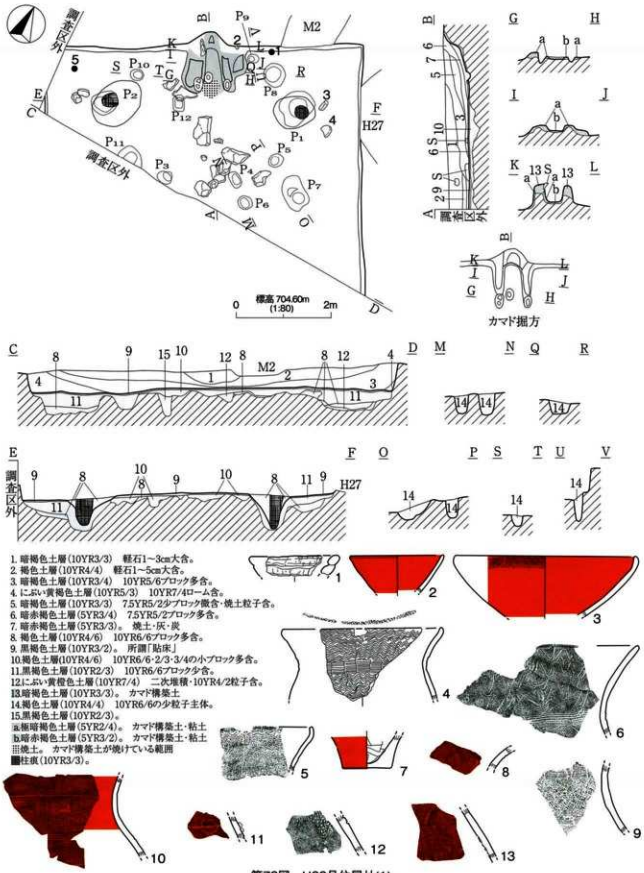

第77図　H32号住居址

**○H33 号住居址**

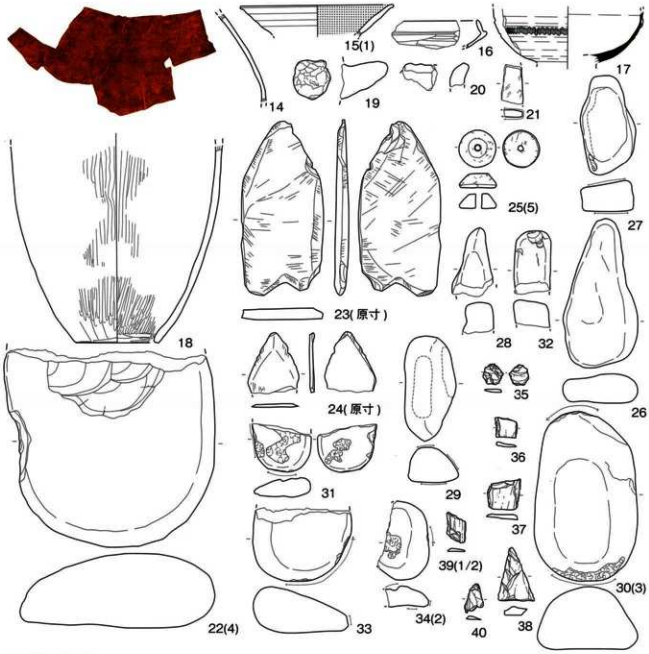
Ⅳこ3グリットで検出された。H27 に切られ、H34 を切る。南方向に調査区外に延びるため全容は不明であるが、隅は丸くなく、直角である。短軸長−6.65m、壁残高−0.6mの規模を有する。主柱穴は4基が均等配置されるものと思われ、P1・P2 が該当する。主柱の規模はφ30 cm前後である。カマドは、北壁中央に所謂「地山削出」による袖の先端に石を立て、これに天井石を架け粘土で被覆していたものと推測される。カマド前方の床面上に散乱していた石はカマドの構築材であろう。周溝は有さない。

遺物は弥生土器（1 ～ 14）、土師器（15･16･18･19）、須恵器（17）、土製品（20）、石器・石製品（21 ～ 40）が出土している。弥生土器は本来、H34 号住居址に伴うものと思われる。器種的には鉢（1 ～ 3）、甕（4 ～ 6）、壺（7 ～ 14）が認められる。土師器には坏（15・16）、甑（18・19）の器種が認められる。坏の形態は D2・F3 である。甑は取手と底部全体が開口する大型のものである。須恵器は体部に櫛描波状文が施される高坏が1点出土している。土製品は羽口片が1点出土した。石器・石製品は砥石（21）、台石（22）、磨製石鏃（23･24）、紡錘車（25）、編み物石（26）、磨石（27 ～ 29）、敲石（30 ～ 34）、素材・剥片（35 ～ 40）の器種が認められる。

以上の出土遺物から本址の年代は、聖原遺跡の時期区分の古墳時代Ⅲ期−6世紀中葉から7世紀初頭の時期が比定される。




第78図　H33号住居址(1)



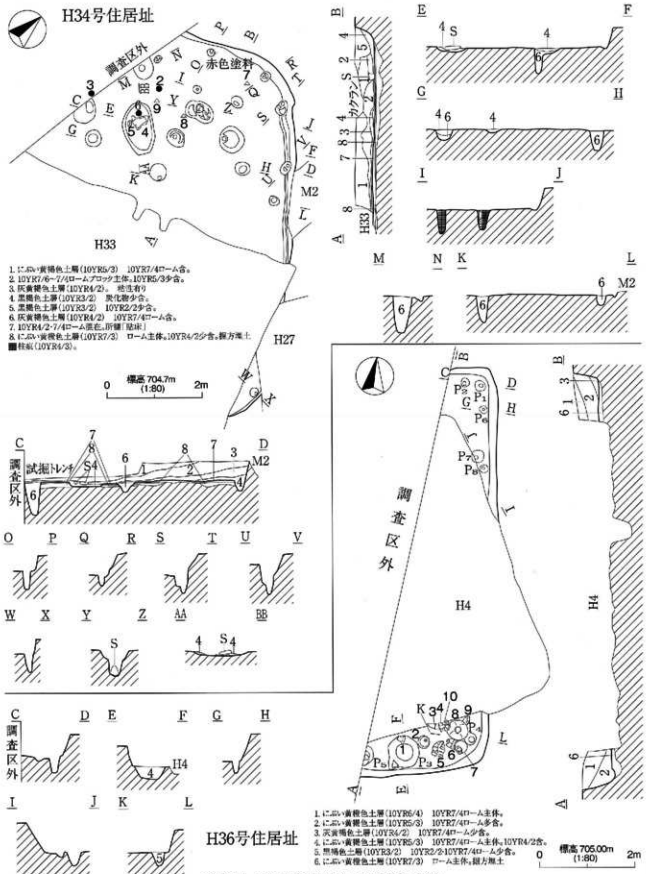

○H34号住居址

Ⅶあ3グリットで検出された。H33・M2に切られる。西方向の調査区外に延びる。前記理由により、全容は不明である。壁残高 0.4mの規模である。P1・P2 は主柱穴の可能性が高いが、判然としない。東壁下の一部には周溝が巡る。調査範囲内には炉は存在しなかった。

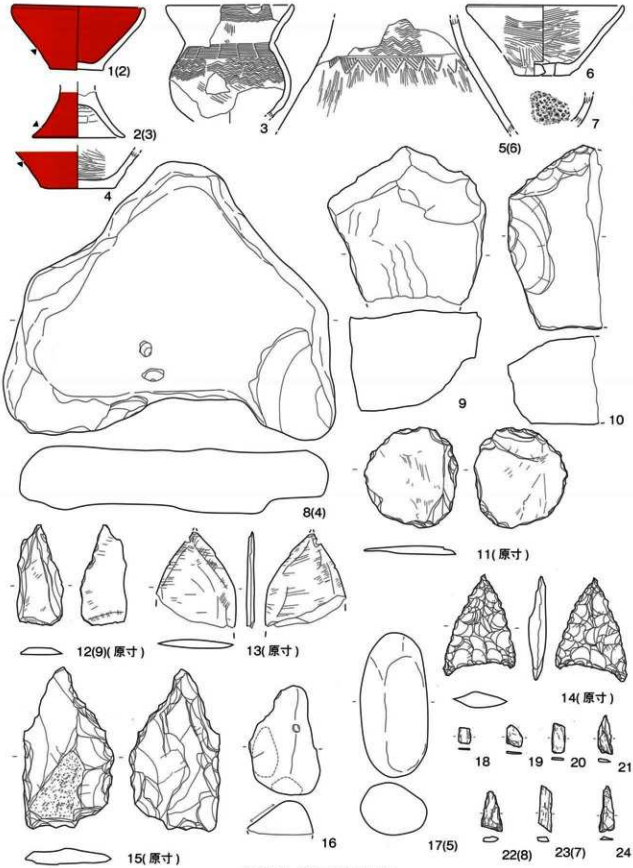
遺物は弥生土器（1～6）、縄文土器（7）、石器・石製品（8～24）が出土している。弥生土器には内外面赤彩の鉢（1）、脚内部を除き赤彩される高坏（2）、頸部に櫛描簾状文、体部に櫛描波状文、口縁部に1条の櫛描波状文を巡らす甕（3）、外面赤彩が施される壺底部片（4）、頸部のヘラ描平行沈線間に櫛描波状文を充填し、その下に内部にヘラ描斜走文が充填される、ヘラ描鋸歯文がが施される壺（5）、鉢形で底部に単孔を有する甑（6）の器種が認められる。縄文土器は楕円押型文が施される深鉢片が1点出土した。石器・石製品は石製円盤（11）、磨製石鏃及びその未製品（12・13・15）、打製石鏃（14）、磨石（16・17）、素材・剥片（18～24）の器種が認められる。

以上の出土遺物から本址は弥生時代後期の住居址と捉えられ、小山岳夫の編年（1999年長野県考古学会シンポジウム「長野県の弥生土器編年」）の後期Ⅰ期に該当するものと思われる。

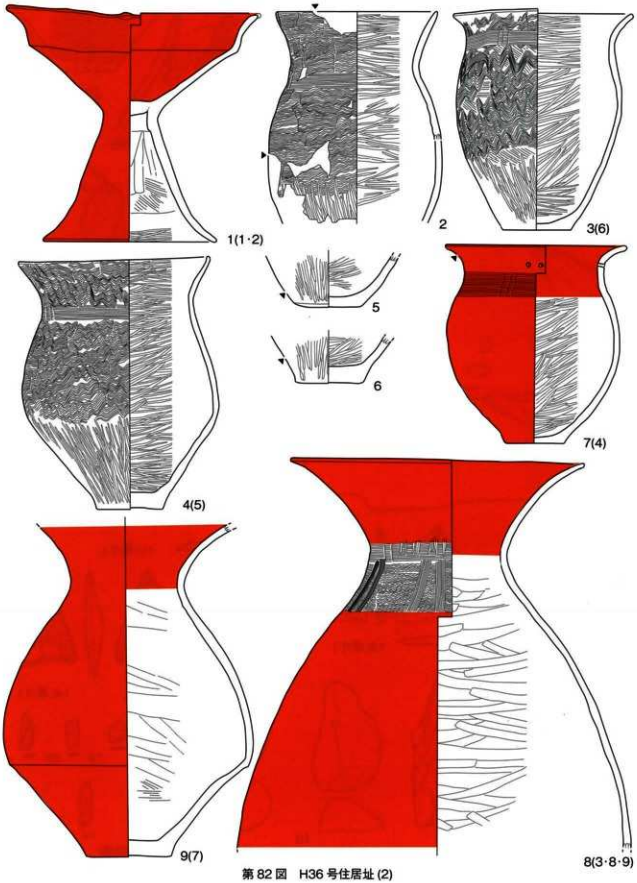
**第79図　H33号住居址(2)**



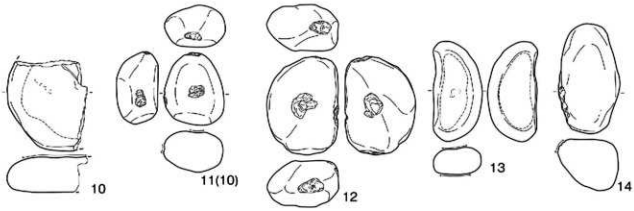

第80図　H34号住居址(1)・H36号住居址(1)




第81図　H34号住居址(2)




第 82 図　H36 号住居址 (2)




第 83 図　H36 号住居址 (3)

○H36 号住居址

Ⅶあ 2 グリットで検出された。H4 に切られ、H40 を切る。西方向に調査区外に延びるため、全容は不明である。壁残高－0.6m の規模を有する。中央部分が H4 により破壊されているため、主柱、炉等は不明である。また、周溝も認められない。東南隅からは土器がまとまって出土している。

遺物は弥生土器、石器・石製品が出土している。弥生土器には高坏（1）、甕（2 ～ 6）、壺（7 ～ 9）の器種が認められる。高坏は坏部に後を有して、口縁部が弓なりに外反する。甕は頸部に櫛描簾状文、口縁部と体部上半には櫛描波状文が施される。壺 7 は頸部に 2 ヶ一対の小孔が対角線上に一組穿たれており、蓋を固定したものと思われる。頸部に櫛描簾状文が巡る他は、外面と内面口縁部には赤彩が施される。器形は甕のものである。8 は底部を欠損する。頸部に櫛描簾状文と波状文を多段に施し、更にこれらを櫛描「T」字文で縦位に区画している。外面と内面口縁部には赤彩が施される。9 は口縁部を欠損する。残存部には文様は認められない。外面と内面口縁部には赤彩が施される。石器・石製品は台石（10）、敲石（11・12・14）、磨石（13）の器種がみとめられる。

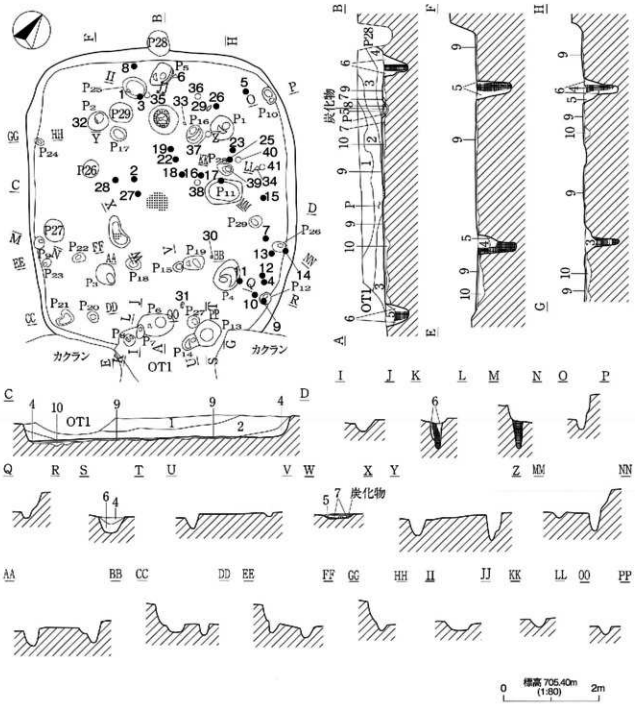
以上の出土遺物から本址は弥生時代後期の住居址と捉えられ、小山岳夫の編年（1999 年長野県考古学会シンポジウム「長野県の弥生土器編年」）の後期Ⅲ期古に該当するものと思われる。

○H37 号住居址

Ⅲく 10 グリットで検出された。OT－1 に切られ、H39 を切る。隅丸長方形の平面形態を呈し、N－34°－W に長軸方位をとる。長軸長－6.5m、短軸長－5.64m、壁残高－0.5m、面積－21.4 ㎡の規模を有する。均等配置される P1 ～ P4 の 4 基が主柱穴であり、φ20 ㎝前後の柱痕が確認された。周溝は有さないが、長辺である東西壁下には小規模なピットが複数構築されている。長軸線上の南北端には棟持柱と思われる、P5・P6 が確認された。炉は P1・P2 間に構築された、土器埋設炉である。この他に、住居中央の床面及び、P3 の北側の 2 カ所に焼土が認められた。堀方から検出された、P16 ～ P19 の存在から本址は建替が行われているものと推測される。

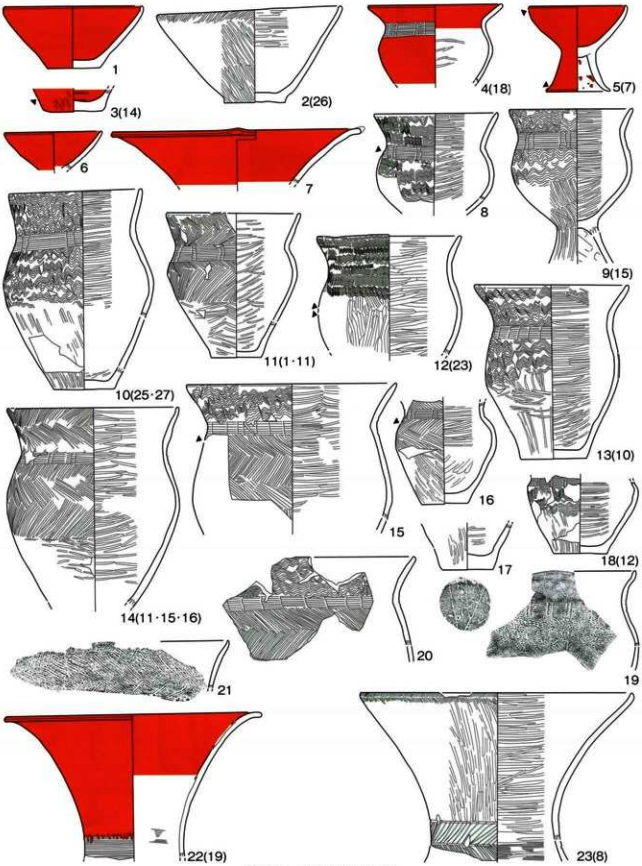
遺物は弥生土器（1 ～ 33）、土製品（34）、石器・石製品（35 ～ 48）、鉄器（49 ～ 51）が出土した。弥生土器には鉢（1 ～ 3）、台付鉢（4）、高坏（5 ～ 7）、甕（8 ～ 21）、壺（22 ～ 31）、甑（32・33）の器種が認められる。鉢は口縁部に櫛描斜走文を巡らすもの（2）も存在する。高坏は赤彩され、坏部には後を有さない。甕は台付きのもの（9）も存在する。文様は頸部の櫛描簾状文は共通するが、口縁部と体部には櫛描波状文が施されるもの、櫛描斜走文を横位羽状に展開するもの、口縁部に櫛描波状文、体部には櫛描斜走文を横位羽状に展開するもの等が存在する。壺は赤彩されるものと、されないものが存在し、口縁部に櫛描斜走文を横位羽状に巡らすもの（23）も存在する。頸部文様帯にはヘラ描平行沈線間にヘラ描斜走文を横位羽状に施文するものや、櫛描斜走文を横位羽状に充填するもの、櫛描「T」字文を施すもの等が存在する。甑は 2 点ともに、中央の単孔を 6 ヶの小孔が取り囲む特徴的な穿孔のものである。土製品は勾玉が 1 点出土した。石器・石製品は翡翠製の勾玉（36）、磨製石鏃（35）、編物石（37）、磨石（38・39・46・47）、敲石（40 ～ 45）、素材・剥片（48）の器種が認められる。鉄器は鉄鏃（49・50）、鉄剣（51）が認められた。

以上の出土遺物から本址は弥生時代後期の住居址と捉えられ、小山岳夫の編年（1999 年長野県考古学会シンポジウム「長野県の弥生土器編年」）の後期Ⅱ期に該当するものと思われる。

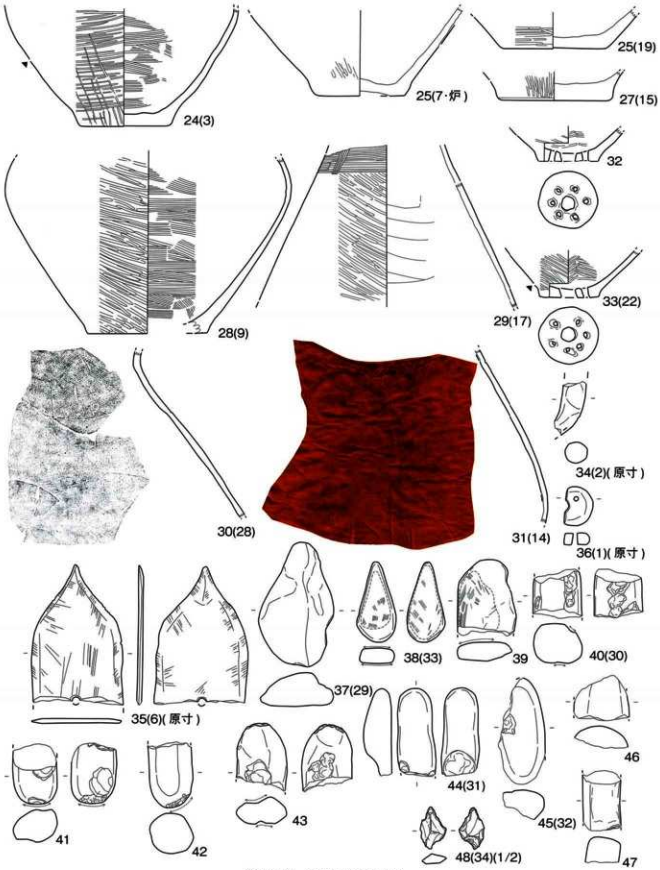



1. にぶい黄褐色土層(10YR4/3)　10YR3/2ブロック・粒子含。
2. 淡黄褐色土層(10YR4/2)　黄色ローム多含・10YR3/2粒子含。
3. 黒褐色土層(10YR3/2)　ローム主体。黄色ローム粒子含。
4. 黒褐色土層(10YR3/1)　ローム主体。
5. にぶい黄褐色土層(10YR4/3)　10YR2/2少含・7.5YR4/6少含。
6. にぶい黄橙色土層(10YR7/4)　ローム二次堆積。
7. にぶい橙色土層(5YR6/4)　ローム主体・10YR4/2・焼土粒子少含。
8. にぶい赤褐色土層(5YR4/3)　10YR3/3少含。
9. 黒褐色土層(10YR3/2)　ローム主体・10YR7/4ローム含。所謂「貼床」
10.にぶい黄橙色土層(10YR7/4)　ローム主体・10YR4/2含。
II.焼土。
■柱痕。

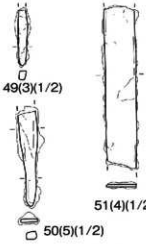
第84図　H37号住居址(1)




第85図　H37号住居址(2)




第 86 図　H37 号住居址 (3)




第87図　H37号住居址(4)

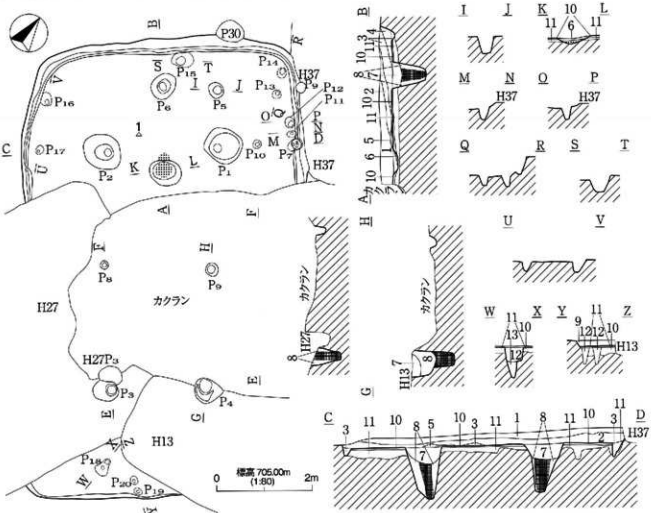
○H38号住居址

Ⅳけ2グリットで検出された。H13・H27・H37に切られ、カクランよる破壊を受けたため、全容は不明である。N－35°－Wに長軸方位をとり、長軸長－9.70m、短軸長－5.75m、壁残高－0.28mの規模を有する。均等に配置されるP1～P4・P16・P20の6基が主柱穴である。

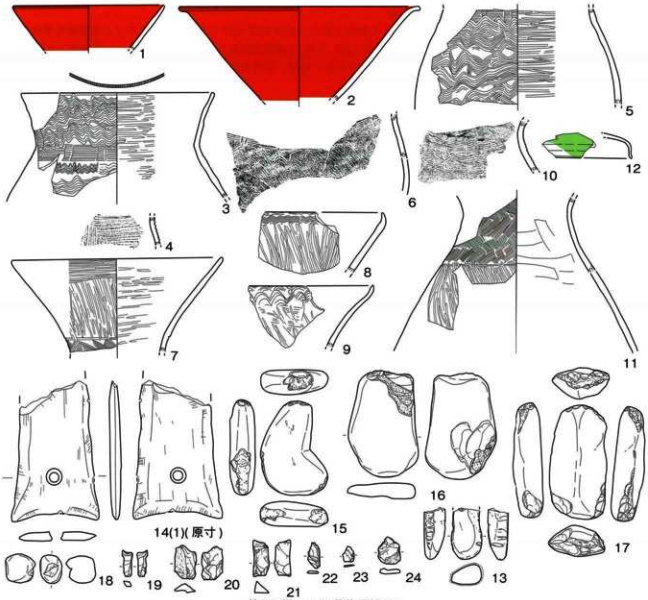
φ20cm～30cmの柱痕が確認されている。南壁下を除く壁下には周溝が巡る。炉はP1・P2間に構築された地焼炉である。P6は棟持柱の可能性が高い。

遺物は、弥生土器（1～11）、灰釉陶器（12）、石器・石製品（13～24）が出土している。弥生土器には内外面赤彩の鉢（1）、内外面赤彩で口縁部が水平に開く高坏（2）、頸部櫛描簾状文で口縁部と体部には櫛描波状文が施される壺（3・5・6）、「コ」字重文の台付甕（4）、壺は、受口気味の口縁部に櫛描波状文を巡らすもの（8・9）、頸部に櫛描波状文を多段に施すもの（10）、頸部に櫛描斜走文を横位羽状に展開するもの等が認められる。灰釉陶器は短頸壺の蓋が1点出土した。石器・石製品は砥石（13）、磨製石鏃（14）、敲石（15～17）、石錘（18）、素材・剥片（19～24）の器種が認められる。

以上の出土遺物から本址は弥生時代後期の住居址と捉えられ、小山岳夫の編年（1999年長野県考古学会シンポジウム「長野県の弥生土器編年」）の後期Ⅱ期に該当するものと思われる。




第88図　H38号住居址(1)



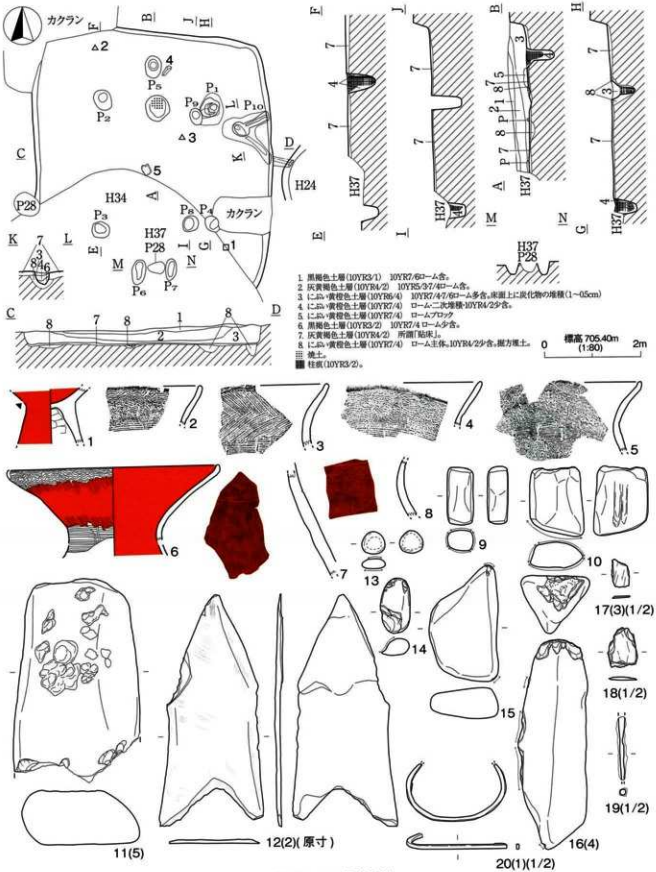

第89図　H38号住居址(2)

○H39号住居址

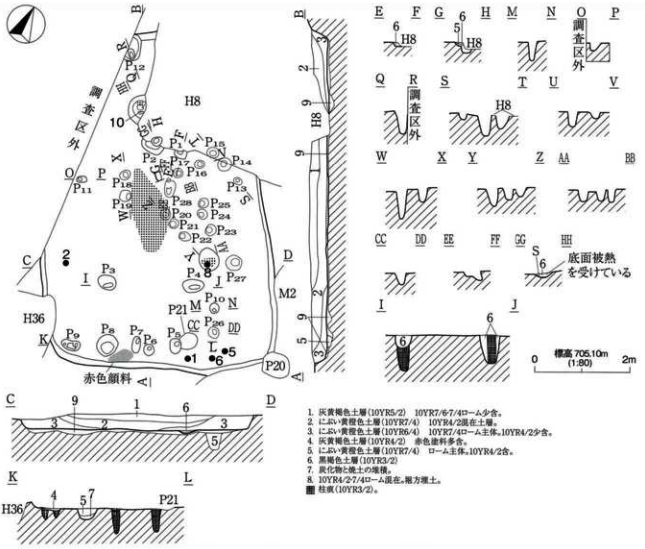
Ⅲく9グリットで検出された。H37・D9に切られるため、全容は不明である。短軸長－5.0m、壁残高－0.35mの規模を有する。均等に配置されるP1～P4の4基が主柱穴であり、φ20cm前後の柱痕が確認された。周溝は有さない。南壁下中央付近には出入施設と思われるP6・P7の2基のピットが検出された。P5は棟持柱の可能性が高いが、対となるピットが南壁下に認められなかった。炉は、P1・P2間に構築された地焼炉である。P8・P9の2基のピットの存在から、本址は建替えが行われた可能性が強いものと推測される。本址は東壁側面からの横穴でH24とD7に連結しているが、その性格は不明である。

遺物は弥生土器（1～8）、石器・石製品（9～18）、鉄器（19）、銅製品（20）が出土している。弥生土器には赤彩される高坏（1）、頸部に櫛描波状文、口縁部と体部には櫛描斜走文の横位羽状展開か櫛描波状文が施される甕（2～5）、壺は全てが赤彩され、受口気味の口縁部に櫛描波状文、頸部に櫛描「丁」字文が施されるもの（6）、頸部のヘラ描平行沈線間に櫛描斜走文を横位羽状に充填するもの（7・8）等の器種が認められる。石器・石製品は砥石（9・10）、台石（11）、磨製石鏃（12）、磨石（13）、敲石（14～16）、素材・剥片（17・18）の器種が認められる。鉄器は19の針？が1点認められる。銅製品は幅が狭い銅が認められる。

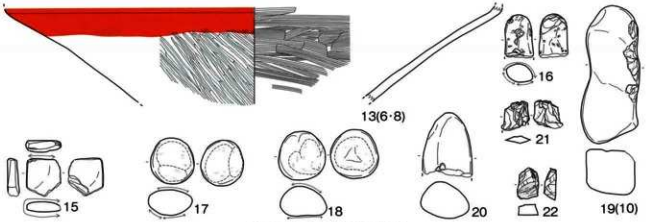
以上の出土遺物から本址は弥生時代後期の住居址と捉えられ、小山岳夫の編年（1999年長野県考古学会シンポジウム「長野県の弥生土器編年」）の後期Ⅰ期に該当するものと思われる。




第90図　H39号住居址




第91図　H40号住居址(1)



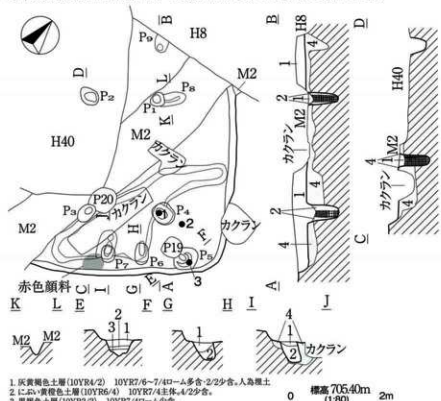

第92図　H40号住居址(2)

○H40号住居址

Ⅲこ9グリットで検出された。H8・M2 に切られ、H41 を切る。隅丸長方形の平面形態を呈するものと思われる。N－24°－W に長軸方位をとり、長軸長－7.1m、短軸長－4.9m、壁残高－0.35mの規模を有する。P3・P4 は主柱穴と思われるが対応する2基のピットは調査範囲内には存在しない。南壁下中央の P6・P7 の2基は出入施設であろう。炉は P2 と P13 の中間と、P4 の北側の2カ所に検出された。いずれも地焼炉である。周溝は有さない。

遺物は弥生土器（1～13）、土師器（14）、石器・石製品（15～22）が出土した。弥生土器には内外面赤彩の鉢（1～3）、内外面赤彩の高坏（4・5）、壺（6）、甕は口縁部に櫛描波状文が施されるもの（7～9）、体部上半に櫛描波状文、下半に櫛描斜走文を横位羽状に施すもの（10）、壺は内外面赤彩される口縁部片（11）、受口気味の口縁部に櫛描斜走文を横位羽状に施すもの（12）、体部下半に稜を有し、稜より上部に赤彩が施されるもの（13）が存在する。土師器は 14 の鉢が1点認められる。石器・石製品は砥石（15・16）、磨石（17・18・20）、敲石（19）、素材・剥片（21・22）の器種が認められる。

以上の出土遺物から本址は弥生時代後期の住居址と捉えられ、小山岳夫の編年（1999 年長野県考古学会シンポジウム「長野県の弥生土器編年」）の後期Ⅲ期に該当するものと思われる。

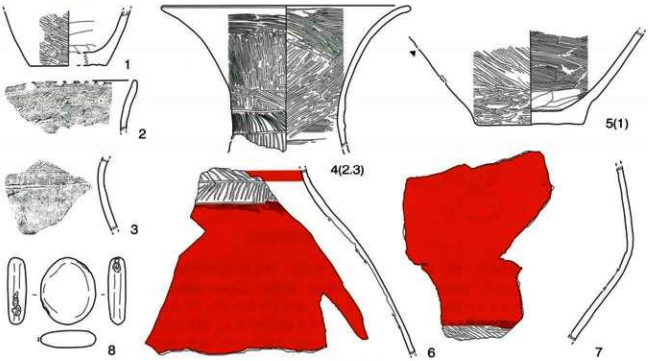



第93図　H41 号住居址(1)

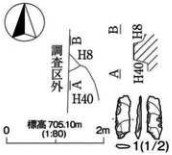
○H41 号住居址

Ⅲけ9グリットで検出された。H8・H40・M2 に切られるため、全容は不明である。壁残高－0.25mの規模を有する。均等に配置される P1～P4 の4基が主柱穴であり、φ16～20 ㎝大の柱痕が確認された。南壁下中央には出入口施設と思われる P6・P7 の2基のピットが検出されている。周溝は有さず、炉は確認されなかった。尚、本址南壁下 P7 の西脇には、40×30 ㎝大の楕円形に赤色顔料が認められた。

遺物は弥生土器、石器が出土している。弥生土器は甕(1～3)、壺(4～7) の器種が認められる。甕は 2 の口唇部の押捺は多分に中期的な要素であり、混入の可能性も否定できない。壺は赤彩されるものと、されないものが存在するが、口縁部に文様帯は有さない。頸部にはヘラ描平行沈線間に斜走文を横羽




第 94 図　H41 号住居址 (2)




第 95 図　H42 号住居址

状に展開している。石器は 8 の敲石が 1 点出土している。

以上の出土遺物から本址は弥生時代後期の住居址と捉えられ、小山岳夫の編年（1999 年長野県考古学会シンポジウム「長野県の弥生土器編年」）の後期Ⅲ期に該当するものと思われる。

**○H42 号住居址**

Vあ 8 グリットで検出された。H8・H40 に切られ、西方向に調査区外が延びるため、わずかなプランと床面が確認されたにすぎない。詳細は不明である。

遺物は石器の素材・剥片が 1 点出土している。本址の時期は弥生時代後期Ⅰ期以前である。

## 第 2 節　掘立柱建物址

**○F 1 号掘立柱建物址**

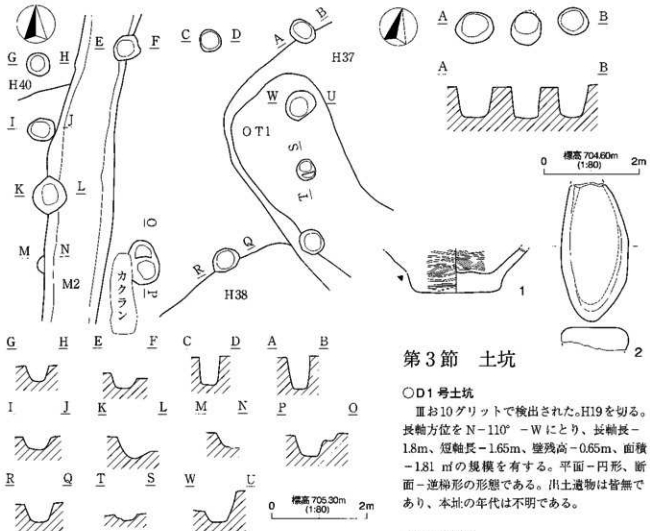
Ⅲけ 1 グリットで検出された。M2 に切られ、H37・H38・H41・OT-1 を切る。長軸方位を N－84°－E にとる。桁行 3 間 × 梁行 3 間の長方形の平面形態を呈する側柱式の掘立柱建物址である。桁行長－5.7m、梁行長－4.3m、面積－24.51 ㎡の規模を有する。柱穴は長径 50 ㎝大の円ないし楕円形の平面形態で、断面は逆梯形を呈する。柱間は桁行が 1.8m 前後、梁行が 1.5m 前後である。

遺物は弥生土器の壺底部(1)と、磨石(2)が出土したが、本址の年代を特定する遺物出はない。本址の年代は不明である。

**○F 2 号掘立柱建物址**

Ⅳか 4 グリットで検出された。3 基の同規模のピットが、規則性を持って 1 列に検出されたため掘立柱建物址とした。そのため詳細は不明である。おそらくは、南方向の調査区外に展開するものと思われる。

出土遺物は皆無であり、本址の年代は不明である




第96図　F1・F2号掘立柱建物址

## 第3節　土坑

### ○D1号土坑

Ⅲお10グリットで検出された。H19を切る。長軸方位をN－110°－Wにとり、長軸長－1.8m、短軸長－1.65m、壁残高－0.65m、面積－1.81㎡の規模を有する。平面－円形、断面－逆梯形の形態である。出土遺物は皆無であり、本址の年代は不明である。

### ○D2号土坑

Ⅲこ8グリットで検出された。H8を切る。長軸方位をN－73°－Wにとり、長軸長－0.81m、短軸長－0.8m、壁残高－0.12m、面積－0.17㎡の規模を有する。平面－円形、断面－逆梯形の形態である。出土遺物は皆無であり、本址の年代は不明である。

### ○D3号土坑

Ⅲこ8グリットで検出された。H8を切り、M2に切られる。全容は不明であるが、長軸長－0.88m、壁残高－0.14mの規模である。断面－逆梯形の形態である。出土遺物は皆無であり、本址の年代は不明である。

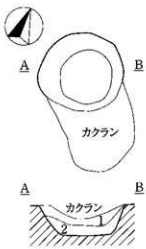
### ○D4号土坑

Ⅲこ8グリットで検出された。H8を切る。N－90°－Wに長軸方位をとり、長軸長－0.8m、短軸長－0.74m、壁残高－0.1m、面積－0.19㎡の規模を有する。平面－円形、断面－逆梯形の形態である。出土遺物は皆無であり、本址の年代は不明である。

### ○D5号土坑

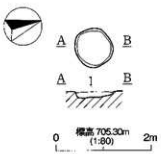
Ⅲえ10グリットで検出された。H21を切り、H19に切られる。壁残高－0.85mの規模である。平面－長方形、断面－逆梯形の形態である。底面の中央に径30㎝大のピットが1基穿たれている。西壁面に穿たれた小径ピットについては確実に本址伴うか否か判断できない。

遺物は須恵器、弥生土器、石器が出土している。須恵器は1の坏、2・3の甕の器種が認められる。弥生土器は4の



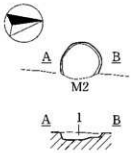

1. にぶい黄褐色土層(10YR5/4)　10YR7/4ローム含。
2. 10YR5/4-2/2混在土層。

D1号土坑



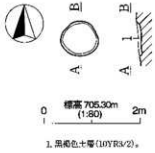

1. 黒褐色土層(10YR3/2)。

D2号土坑



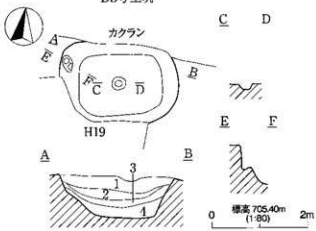

1. 黒褐色土層(10YR3/2)。

D3号土坑



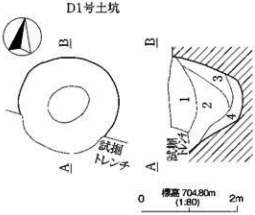

1. 黒褐色土層(10YR3/2)。

D4号土坑



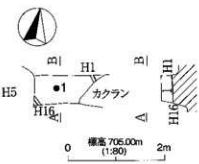

1. にぶい黄褐色土層(10YR4/3)　10YR7/4ローム・ノロミス少含。
2. にぶい黄褐色土層(10YR7/4)　ローム二次堆積。
3. にぶい黄褐色土層(10YR6/4)　10YR7/6ローム二次堆積主体。4/3含。
4. 灰黄褐色土層(10YR4/2)　10YR7/6ローム多含。

D5号土坑



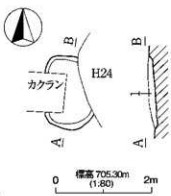

1. 灰黄褐色土層(10YR4/2)　φ2cm大礫含。
2. 黒褐色土層(10YR3/2)　骨片・φ2cm以下ノロミス・5cm大礫含。
3. 灰黄褐色土層(10YR4/2)　10YR7/4ローム粒子含。
4. 黒褐色土層(10YR3/2)　10YR7/6ローム少含。

D6号土坑



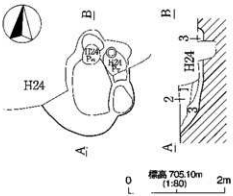

1. 灰黄褐色土層(10YR5/2)　10YR7/6ローム粒子少含。

D8号土坑




1. 灰黄褐色土層(10YR4/2)　10YR2/2-7/4ローム粒少含。

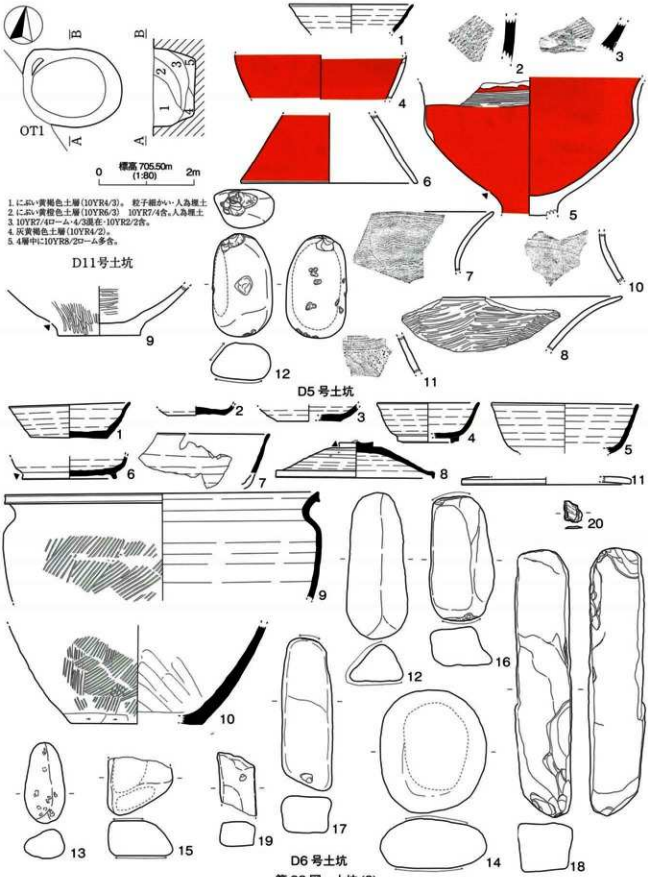
D9号土坑



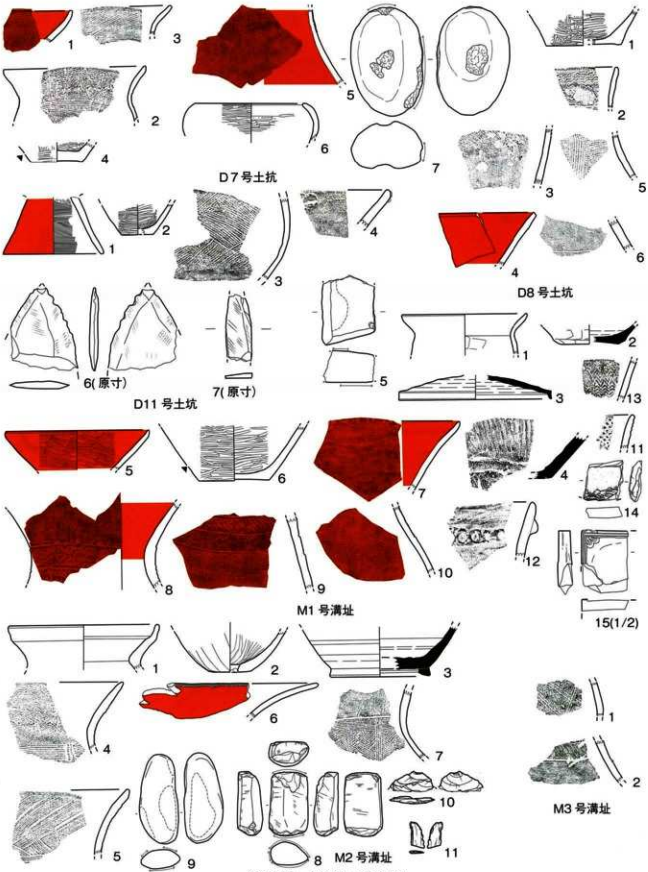

1. 黒褐色土層(10YR2/2)　10YR7/6ローム少含。
2. 明黄褐色土層(10YR7/6)　ローム主体。10YR2/2少含。
3. にぶい黄褐色土層(10YR7/4)　ローム二次堆積・10YR4/2少含。

D10号土坑

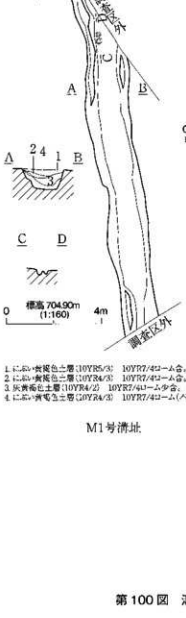
第97図　土坑(1)


OT1
A
B
1
2
3
4
5
0
標高705.50m
(1:80)
2m
1. にぶい黄褐色土層(10YR4/3)。 粒子細かい・人為埋土
2. にぶい黄橙色土層(10YR6/3) 10YR2/4含。人為埋土
3. 10YR7/4ローム・4/3混在・10YR2/2含。
4. 灰黄褐色土層(10YR4/2)。
5. 4層中に10YR8/2ローム多含。
D11号土坑
D5号土坑
D6号土坑

第98図　土坑(2)

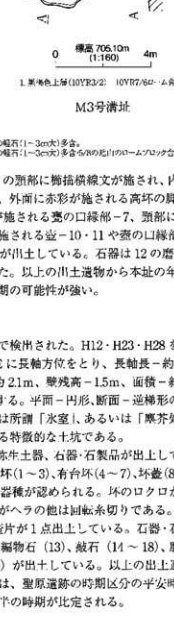



第 99 図　土坑 (3)・溝址 (1)




M1号溝址

M2号溝址




M3号溝址

**第100図　溝址(2)**

内外面赤彩の鉢、5の頸部に櫛描横線文が施され、内外面赤彩の台付鉢、外面に赤彩が施される高坏の脚－6、櫛描波状文が施される甕の口縁部－7、頸部に櫛描「T」字文が施される壺－10・11や甕の口縁部片－8、底部片－9が出土している。石器は12の磨・敲石が1点出土した。以上の出土遺物から本址の年代は、弥生時代後期の可能性が強い。

### ○D6号土坑

Ⅳう3グリットで検出された。H12・H23・H28を切る。N－52°－Eに長軸方位をとり、長軸長－約2.12m、短軸長－約2.1m、壁残高－1.5m、面積－約2.26㎡の規模を有する。平面－円形、断面－逆梯形の形態である。本址は所謂「氷室」、あるいは「廃棄処理土坑」と称される特徴的な土坑である。

遺物は須恵器、弥生土器、石器・石製品が出土している。須恵器には、坏(1～3)、有台坏(4～7)、坏蓋(8・9)、甕(9・10)の器種が認められる。坏のロクロからの切り離しは2がヘラの他は回転糸切りである。弥生土器は11の壺片が1点出土している。石器・石製品は砥石(12)、編物石(13)、敲石(14～18)、磨石(19)、剥片(20)が出土している。以上の出土遺物から本址の年代は、聖原遺跡の時期区分の平安時代Ⅴ期－9世紀前半の時期が比定される。

### ○D7号土坑

Ⅲき8グリットで検出された。OT-1に切られる。N－43°－Wに長軸方位をとり、長軸長－4.1m、短軸長－約1.75m、壁残高－0.5mの規模を有する。H24・H39と西南隅の壁面に穿たれたピットにより連結する。平面－長方形、断面－逆梯形の形態である。

遺物は弥生土器、土師器、石器が出土している。弥生土器には鉢(1)、甕(2・3)、壺(4・5)の器種が認められる。鉢は内外面に赤彩が施され、口縁部に櫛描波状文が施される。甕は2が頸部に櫛描簾状文、口縁部と体部上半に櫛描波状文が施文される。3は口縁部に櫛描斜走文が施されている。壺は、4は底部片である。5は頸部片で、赤彩が施され、頸部には櫛描「T」字文が施される。土師器はG4形態の坏が出土している。石器は7の敲石が出土した。以上の出土遺物から本址は弥生時代後期の所産と捉えられる。

○D8 号土坑

Ⅲあ 10 グリットで検出された。H1・H5・H16 に切られる。壁現高－0.25mの規模を有するが、平面形態は不明である。断面－逆梯形の形態を呈する。

遺物は弥生土器が出土している。1 は甕の底部、2 は口縁部片で頸部に櫛描簾状文、口縁部には櫛描波状文が施される。3 は甕の体部片であり、櫛描斜走文が横位羽状に施されている。4 は内外面に赤彩が施される壺の口縁部片、5 は櫛描「T」字文が施される壺の頸部片、6 はヘラ描平行沈線間に櫛描斜走文を横位羽状に充填する壺の頸部片である。以上の遺物から、本址の年代は弥生時代後期と捉えられる。

○D9 号土坑

Ⅲき 10 グリットで検出された。H39 を切り、H124 に切られる。N－7°－E に長軸方位をとり、長軸長－1.54m、壁残高－0.14mの規模を有する。平面－長方形、断面－逆梯形の形態である。出土遺物は皆無であり、本址の年代は不明である。

○D10 号土坑

Ⅲか 10 グリットで検出された。H24・H25 に切られる。壁残高－0.5mの規模である。極めて不整形な形態である。出土遺物は皆無であり、本址の年代は不明である。

○D11 号土坑

Ⅲか 8 グリットで検出された。H25 を切る。N－83°－E に長軸方位をとり、長軸長－約 2.05m、短軸長－1.7m、壁残高－0.88m、面積－約 2.18 ㎡の規模を有する。5 層から成る覆土は人為堆土である。

遺物は弥生土器と石器・石製品が出土している。弥生土器は、1 の外面赤彩の高坏脚部片、2・3 の甕片のうち 3 は体部に櫛描斜走文を横羽状に施文している。4 は口縁部に櫛描斜走文を施し、更に円形貼付文が付加された壺の口縁部片である。石器・石製品は 5 が台石、6・7 は磨製石鏃である。以上の出土遺物から本址は弥生時代後期の所産と考えられる。

## 第 4 節　溝址

○M1 号溝址

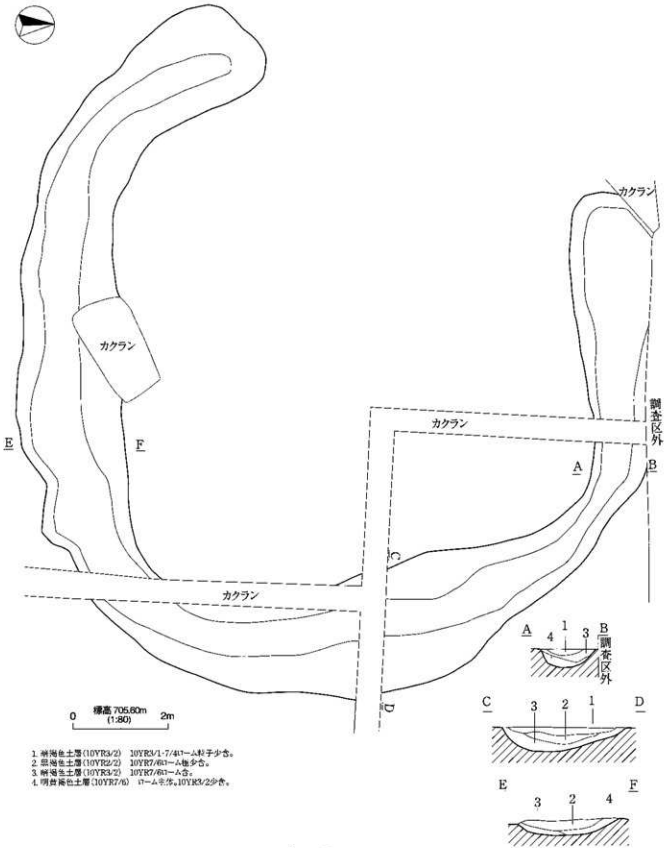
Ⅳか 1 グリット～Ⅳい 4 グリットにかけて検出された。両端共に調査区外に延びている。底面は北から南に向かい勾配（0.46m）を成す。深度は北端－1.14m、南端－0.47m、幅は 2m前後で、断面は逆梯形の形態であるが、部分的にテラスを有している。遺構構のような堅い面はなく、水路の痕跡も認められない。遺物は土師器、須恵器、弥生土器、縄文土器、石器・石製品が出土している。土師器は甕（1）、須恵器は坏（2）・坏蓋（3）・甕（4）の器種が認められる。須恵器坏の底部には回転糸切痕が残されている。弥生土器は鉢（5）・壺（6～10）の器種が認められる。縄文土器は早期押型文土器（11・13）と後期の凸帯文土器が認められる。11 は楕円、13 は山形押型文である。石器は打製石斧の破片が出土している。石製品は硯の破片が出土している。以上の出土遺物から、本址は平安時代以降の年代が推測される。

○M2 号溝址

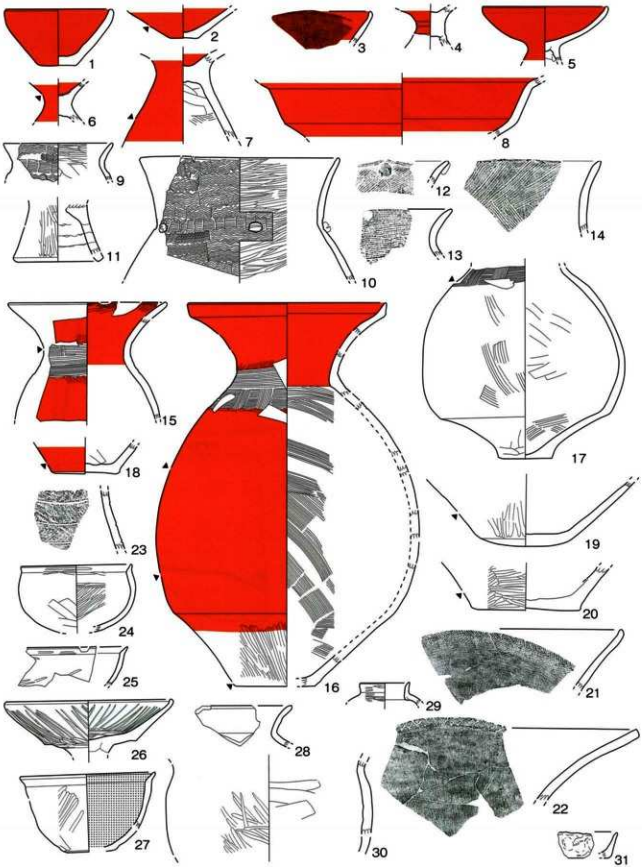
Ⅲけ 7 グリット～Ⅳけ 3 グリットにかけて検出された。両端共に調査区外に延びている。底面は北から南に向かい勾配（0.85m）を成す。深度は北端－0.2m、南端－0.14m、幅は 1.4m前後である。断面は逆梯形を呈する。その性格は道の可能性が高い。遺物は土師器、須恵器、弥生土器、石器・石製品が出土している。土師器は、1 の有段口縁の甕、2 の単孔の甑が出土した。須恵器は 3 の壺底部が 1 点出土した。弥生土器は頸部櫛描簾状文、口縁部櫛描波状文が施文される甕（4）、口縁部に櫛描斜走文を横位羽状に展開する甕（5）、口唇部に縄文を施し、内外面に赤彩が施される壺口縁部片（6）、頸部のヘラ描沈線間に、櫛描横線文と櫛描斜走文を横位羽状に施し、これをヘラ描「T」字文で縦位に区画する壺頸部片（7）が認められる。石器・石製品は 8 の砥石、9 の磨石、10・11 の石器素材、ないし剥片が出土している。以上の出土遺物は弥生時代後期から平安時代に及ぶものであるが、遺構間の重複では本址は住居址群を切っていることから、本址の年代は平安時代以降と捉えておく。

○M3 号溝址

Ⅳい 2 グリットで検出された。H5 に切られる。平面形態は弧状である。幅－0.7m前後、深度－0.2mの規模である。


カクラン
カクラン
カクラン
カクラン
調査区外
A
B
C
D
E
F
0
2m
標高 705.60m
(1:80)
A
B
1
2
3
4
調査区外
C
D
1
2
3
E
F
2
3
4
1. 暗褐色土層(10YR3/2)　10YR3/1-7/4ローム粒子少き。
2. 黒褐色土層(10YR2/2)　10YR7/6ローム粒少き。
3. 暗褐色土層(10YR3/2)　10YR7/6ローム含。
4. 明黄褐色土層(10YR7/6)　ローム主体。10YR3/2少き。

第101図　OT1(1)


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31

第102図　OT1(2)

第103図　OT1(3)

周溝墓の可能性もあるが、判断できない。遺物は弥生土器が出土している。図化可能なものは以下の2点である。1 は櫛描斜走文を横羽状に施す甕、2は頸部にヘラ描平行沈線間に斜走文を横羽状に充填する壺である。以上の出土遺物から、本址は弥生時代後期の年代が推測される。

## 第5節　その他の遺構・遺物

### ○OT－1

Ⅲき9グリットを中心に検出された円形周溝墓である。溝の外側で径 14mの円形をなし、北北西方向が幅7mで溝が切れる。主体部は残存していなかった。溝幅は不安定で、最大－2.5m、最小－0.8mである。深度は 0.3m前後である。JR 小海線を挟み、当調査区の北に位置する円正坊Ⅲ・Ⅳ次調査区では周溝墓群が確認されていることから、弥生時代後期の墓域は微高地上となる円正坊Ⅲ・Ⅳ次調査区に向け展開していることが推測される。

遺物は弥生土器(1～23)、土師器(24～31)、土製品(32･33)、石器・石製品(34～40)が出土している。弥生土器には鉢(1～3)、台付鉢(4)、高坏(5～8)、甕(9～14)、壺(15～23)の器種が認められる。台付鉢の脚上部の3本の平行沈線、壺(22)の口唇部の格子文は異質である。土師器は坏 (24・25)、高坏 (26)、鉢 (27)、甕 (28)、壺 (29・30)、手捏 (31) の器種が認められる。土製品は紡錘車 (32)、土器片円盤 (33) の器種が認められる。石器・石製品は砥石 (34)、磨石 (36･39)、敲石 (37・38)、磨製石鏃 (35)、素材・剥片 (40) の器種が認められる。これらの遺物の内、確実に本址に伴うものは 16・17 の弥生土器の壺と思われ、この2点から類推される本址の年代は、小山岳夫の編年 (1999 年長野県考古学会シンポジウム「長野県の弥生土器編年」) の弥生時代後期Ⅴ期ないし古墳時代Ⅰ期に該当するものと思われる。

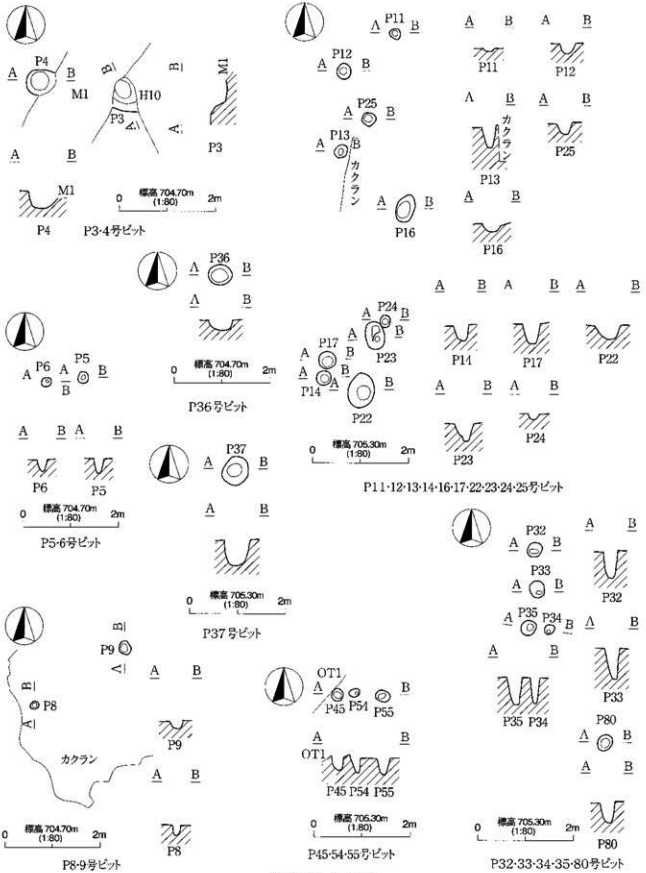
### ○ピット

66 基が検出された。Ⅳう1、Ⅳお1、Ⅳか1、Ⅳき1、Ⅳこ1・2、Ⅲこ 10、Ⅳく3、Ⅳい4グリットに集中する傾向が認められる。大半が柱・杭等を設置した柱穴と思われる。個々の概要については、図・表・写真を参照されたい。

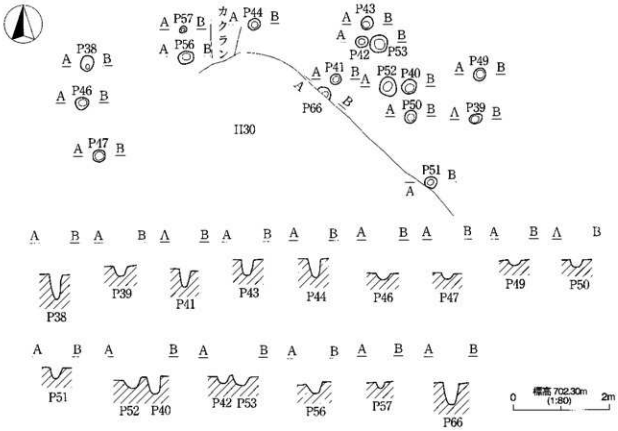
遺物は P3:弥生土器－8点。P4:弥生土器－18点、縄文 (押型文)－1点。P12:弥生土器－1点。P13:弥生土器－1点、土師器－1点。P14：弥生土器－2点。P17：弥生土器－2点。P18：弥生土器－10点。P26：弥生土器－2点。P27：弥生土器－32点、土師器－1点。P36:弥生土器－2点。P38:弥生土器－2点。P59:弥生土器－1点。P60:弥生土器－1点、土師器－1点。P68：弥生土器－4点、不明－1点。P75：弥生土器－2点。P76：弥生土器－3点。P77：弥生土器－1点。P79：土師器－2点。P80：弥生土器－2点。P81：土師器－2点。が出土している。

### ○遺構外出土遺物

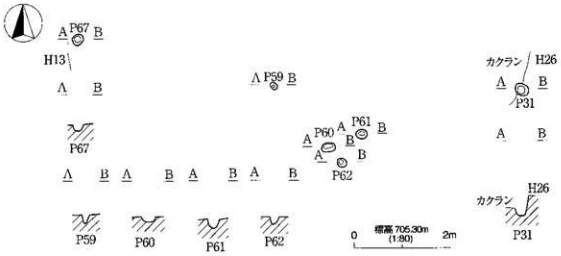
本来個々の遺構に帰属していたものであるが、重機による表土除去、遺構検出作業等により遺構から切り離された遺物群を一括して掲載した。縄文時代後期の土器片が新たに加わる唯一の要素であり、それ以外は個々の遺構から出土している時代のものである。


P4
M1
H10
P3
M1
P3
M1
P4
標高 704.70m
(1:80)
0
2m
P3·4号ピット
P11
P12
P11
P12
P25
P13
カクラン
P25
P13
P16
P16
P36
P36号ピット
P6
P5
P6
P5
P5·6号ピット
P24
P17
P14
P23
P22
P14
P17
P22
P24
P23
P11·12·13·14·16·17·22·23·24·25号ピット
P37
P37号ピット
P9
P8
カクラン
P9
P8
P8·9号ピット
OT1
P45 P54 P55
OT1
P45 P54 P55
P45·54·55号ピット
P32
P33
P32
P35 P34
P33
P80
P80
P32·33·34·35·80号ピット

第104図　ピット(1)

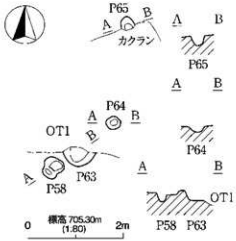



P38～44·46·47·49～53·56·57·66号ピット

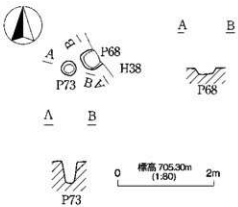



P31·59～62·67号ピット

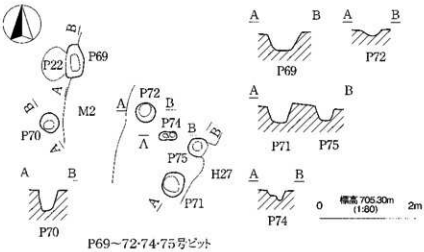
第105図　ピット(2)



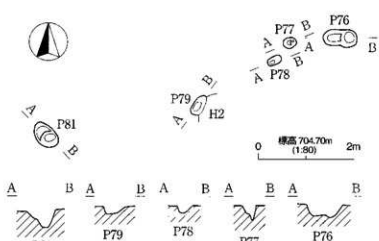

P58·63·64·65号ピット




P68·73号ピット

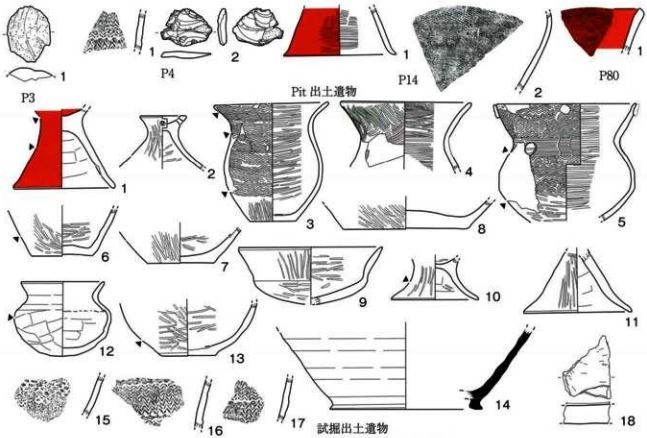



P69～72·74·75号ピット




P76·77·78·79·81号ピット

第106図　ピット(3)




第 107 図　Pit 出土遺物 (4)・試掘調査出土遺物

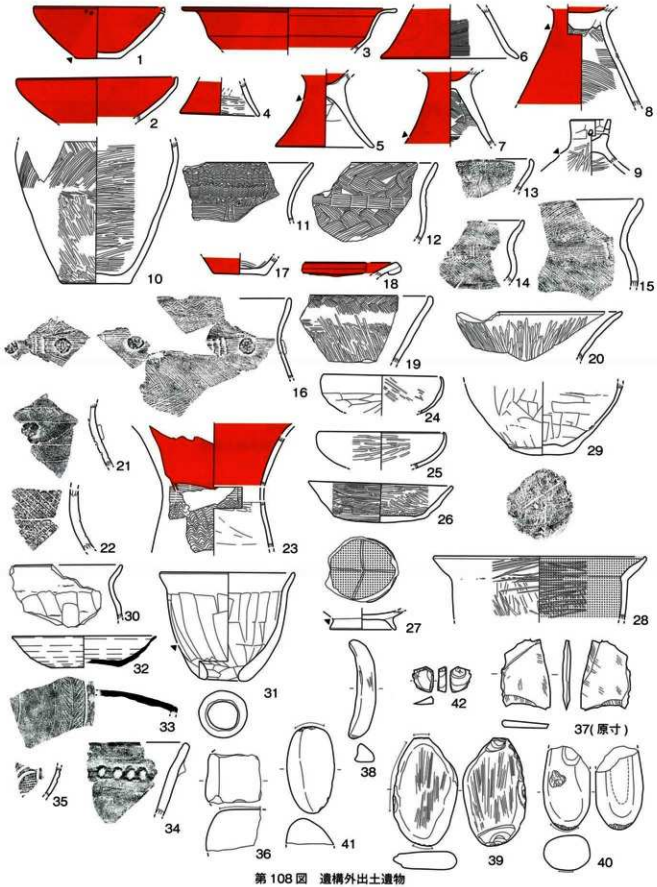
**○試掘出土遺物**

遺構外出土遺物と同様の理由により、個々の遺構から切り離されてしまった遺物群である。遺構外出土遺物も本項の遺物も当然の事ながら遺構との接合関係は検証を行っている。

**○獣骨等**

今回の調査においては多量の獣骨が出土した。弥生時代後期の住居址及びその周辺から出土しており、大量の出土をした住居址は覆土中から無秩序に出土している。また、少量出土の住居址は床面から出土している。問題となるのは大量出土を見た H16・H23・H24・H25・H28 である。時期的には小山編年（長野県考古学会 1999 年シンポジュウム）の弥生時代後期Ⅱ期～Ⅲ期古の範疇に収まっており、これ以前、以後の時期の住居址からは少量の出土しか認められない。

その大半は鹿であり、H23・H28 からは猪の牙や歯が認められた。また、獣骨ではないが多量の田螺と思われる巻貝と少量の鮑と思われる貝殻が H23・H25 から出土している。田螺と思われる貝殻は白色の粉状に成るまで焼かれており、白色の灰層となって堆積していた。取り上げることが可能であったものはごく僅かであった。このような焼成は食すためのものとは思われず、白色の粉－石灰状の粉を得るために行った行為の結果のようにも思われる。漆喰状の塗料や白色顔料の原材料と考えることは無理があろうか？獣骨も焼成を受けており、炭化したものも認められる。通常ならば残存しにくい骨が良好な状態で出土したのは焼成を受けたことによるものと考えられる。さて、出土獣骨の中には明らかな加工痕を止めるものが存在する。それらは H25・H28 から限定的に出土している。前記したように、住居覆土中から出土しており、竪穴住居址内で食用されたものでない。屋外で集団会食された痕跡と言うよりは何らかの祭祀行為の痕跡のようにも思われる。加工痕の中には明らかな解体痕もあるが、骨角器や、その未製品も存在する。その対象となる部位は角が最も多く、表層の凹凸を滑らかに研磨したり、切断し、端部を削ったもの等が認められる。また使用部位は不明であるが、針や刺突具のようなものが認められる。最後に今回の調査における最大の成果である、「卜骨」の出土を報告する。H28 号住居址から、鹿の肩胛骨を用いた卜骨片が４点出土した。千曲市「生仁遺跡」出土例に次ぎ、弥生時代の卜骨としては県内で２例目となる貴重な発見である。当時、朝鮮半島から西日本を中心に行われた祭祀が、佐久の地でも行われていたことが明らかとなった。




第108図　遺構外出土遺物

Y-2676
Y-2672
138-28-15
こ け く き か お え う い あ
Ⅲ
Ⅳ
7
8
9
10
1
2
3
4
5
X30160
X30156
36-16-28
H29
H32
H42
D2
D3
H8
OT1
D7
D11
H31
H9
H14
H6
H11
H15
H40
H41
H39
H24
D5
H21
H25
H19
H17
H1
H36
F1
H37
D10
D1
H5
H16
H4
H38
H22
H34
H27
H13
H30
H26
H23
H12
M1
H7
H33
H18
H2
H3
H28
H20
H10
F2
M2
M3
D6

| 遺構名 | 検出位置 | 重複関係 | 長軸方位 | 規模 | | | | ピット | 付属施設 | 備考 | 時期 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 長軸長 | 短軸長 | 壁残高（深度） | 面積 | | | | |
| H 1 | Ⅲあ 10 | H5・H15・D8 を切る | N－11°－W | 8.76 | 5.52 | 0.30 | － | 主４＋５ | 周溝 | カマド地山削出し | 6C 中葉 |
| H 2 | Ⅳく 4 | H18 を切る | N－11°－W | － | 4.94 | 0.45 | － | 主４？ | 周溝 | 粘土カマド | ？ |
| H 3 | Ⅳお 4 | H20・H26・H28 を切る | N－22°－W | － | 8.30 | 0.75 | － | 主４？ | 周溝＋間仕切 | 石組粘土カマド、旧カマド東壁 | ？ |
| H 4 | Ⅶあ 1 | H36 を切る | － | － | － | 0.70 | － | ？ | 周溝＋間仕切 | 消失家屋 | ？ |
| H 5 | Ⅲい 1 | H1 に切られ、H16・H17・D8・M3 を切る | N－104°－W | 5.10 | 4.70 | 0.45 | 16.7 | 主４＋５ | － | 石組粘土カマド・旧住居 | ？ |
| H 6 | Ⅲい 9 | H14 を切り、攪乱に切られる | － | － | － | 0.05 | － | ７ | － | － | ？ |
| H 7 | Ⅲあ 3 | M1 に切られ、H10 を切る | N－5°－W | 6.88 | － | 0.50 | － | 主４？ | 周溝＋間仕切 | 石組粘土カマド | ？ |
| H 8 | Ⅲこ 8 | M2 に切られ、H40・H41 を切る | － | － | 7.40 | 0.55 | － | 主４＋？ | 周溝＋間仕切 | 南壁下中央周提を持つ貯蔵穴 | ？ |
| H 9 | Ⅲえ 9 | H14・H21・H25 を切る | － | － | 6.15 | 0.20 | － | ８？ | 周溝 | － | 弥後 |
| H10 | Ⅳあ 4 | M1・H7 に切られる | － | － | － | 0.60 | － | ８？ | － | 石囲炉 | 弥後 |
| H11 | Ⅲあ 9 | H15 を切る | － | － | － | 0.60 | － | ６？ | 張出 | － | ？ |
| H12 | Ⅳい 3 | M1・D6 に切られ、H23 を切る | N－2°－W | 5.44 | 5.40 | 0.45 | － | 主４＋１ | － | 北壁中央にカマドの痕跡 | ？ |
| H13 | Ⅳく 3 | H18・H27・H38 を切る | N－8°－W | － | 4.85 | 0.38 | － | 主４？＋？ | － | － | ？ |
| H14 | Ⅲう 9 | H6・H9・H29 に切られる？ | － | － | － | 0.00 | － | 17？ | － | － | ？ |
| H15 | Ⅲあ 9 | H1・H11 に切られる | － | － | － | 0.05 | － | 主４？＋４ | － | 土器埋設炉 | 弥後 |
| H16 | Ⅳあ 1 | M1・H5 に切られる | N－0°－W | － | － | 0.60 | － | 主４＋４？ | 周溝、棟持柱 | 石囲炉・旧住居 | 弥後 |
| H17 | Ⅲい 10 | H5 に切られ、H21・H22 を切る | － | － | 4.88 | 0.20 | － | 主４＋12？ | 周溝＋間仕切 | 石組粘土カマド | ？ |
| H18 | Ⅳき 4 | H2・H13 に切られる | N－5°－W | 5.15 | 5.55 | 0.55 | － | 主４＋２ | 周溝＋間仕切 | 東南隅に貯蔵穴 | ？ |
| H19 | Ⅲお 10 | D1 に切られ、D5・H25 を切る | N－0°－W | 3.45 | 3.40 | 0.32 | － | １？ | 周溝 | 石組粘土カマド？ | ？ |
| H20 | Ⅳう 4 | H3 に切られ、H28 を切る | － | － | － | 0.38 | － | － | － | － | 弥後 |
| H21 | Ⅲえ 10 | H9・H17・H19・D5 に切られ、H14 を切る | － | － | － | 0.14 | － | 主４＋15 | － | 地焼炉 | 弥後 |
| H22 | Ⅳえ 1 | H17・H21 に切られる | N－5°－W | 7.10 | 5.42 | 0.22 | － | 主４＋11？ | 棟持柱 | 地焼炉、建替の痕跡 | 弥後 |
| H23 | Ⅳあ 2 | H12・D6 に切られる | N－22°－W | － | 4.50 | 0.48 | － | 主４＋３ | 棟持柱 | 土器埋設炉 | 弥後 |
| H24 | Ⅲき 10 | H31・D9・D10 を切る | N－23°－W | 4.80 | 3.90 | 0.60 | 12.7 | 主４＋４ | － | D7・H39 と建物面のピットで連結 | 弥後 |
| H25 | Ⅲか 9 | H9・H19・H24・D11 に切られ、H31 を切る | N－10°－W | 8.70 | － | 0.22 | － | 主４＋34 | － | － | 弥後 |
| H26 | Ⅳお 3 | H3 に切られ、H28・H30 に切られる | － | － | 5.50 | 0.60 | － | ３？ | 周溝 | カマド地山削出し | ？ |
| H27 | Ⅳけ 3 | H13 に切られ、H33・H34・H38 を切る | N－60°－W | 5.39 | 5.75 | 0.38 | － | 主４＋２ | 周溝＋間仕切 | 石組粘土カマド、カマド左に貯蔵穴 | ？ |
| H28 | Ⅳう 4 | H3・H12・H20・H26・D6 に切られる | － | － | 6.10 | 0.45 | － | 主４＋１３？ | － | 地焼炉 | 弥後 |
| H29 | Ⅴあ 7 | ？ | － | － | － | － | － | － | － | － | ？ |
| H30 | Ⅳお 2 | H3・H26 に切られる | N－46°－W | 8.18 | 5.6 | 0.60 | 31.6 | 主４＋11？ | 棟持柱 | 炉を２基持つ・旧住居 | 弥後 |
| H31 | Ⅲき 9 | H24・H25 に切られる | － | － | － | 0.28 | － | 12？ | － | 地焼炉 | 弥後 |
| H32 | Ⅲこ 8 | H8 に切られる | － | － | － | 0.10 | － | 25？ | － | － | ？ |
| H33 | Ⅳこ 3 | H27 に切られ、H34 を切る | － | － | 6.65 | 0.60 | － | 10？ | － | カマド地山削出し | ？ |
| H34 | Ⅶあ 3 | H33・M2 に切られる | － | － | － | 0.40 | － | 16？ | － | － | 弥後 |
| H36 | Ⅶあ 2 | H4 に切られ、H40 を切る | － | － | － | 0.60 | － | ６？ | － | － | 弥後 |
| H37 | Ⅲく 10 | OT1 に切られ、H39 を切る | N－34°－W | 6.50 | 5.64 | 0.50 | 21.4 | 主４＋25 | 棟持柱 | 炉を２基持つ | 弥後 |

第１表　竪穴住居址一覧表 (1)

| 遺構名 | 検出位置 | 重複関係 | 長軸方位 | 規模 | | | | ピット | 付属施設 | 備考 | 時期 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 長軸長 | 短軸長 | 壁残高（深度） | 面積 | | | | |
| H38 | Ⅳけ2 | H13・H27・H37に切られる | N－35°－W | 9.70 | 5.75 | 0.28 | － | 主4＋16 | 周溝、埋葬柱 | 地焼炉 | 弥後 |
| H39 | Ⅲく9 | H37・D9に切られる | － | － | 5.00 | 0.35 | － | 主4＋5？ | － | D7・H24と壁側面のピットで連結 | 弥後 |
| H40 | Ⅲこ9 | H8・M2に切られ、H41を切る | N－24°－W | 7.10 | 4.90 | 0.35 | － | 28？ | － | 地焼炉 | 弥後 |
| H41 | Ⅲけ9 | H8・H40・M2に切られる | － | － | － | 0.25 | － | 主4＋5？ | － | － | 弥後 |
| H42 | Ⅴあ8 | H8・H40に切られる | － | － | － | － | － | － | － | － | 弥後 |

| 遺構名 | 検出位置 | 重複関係 | 平面形態 | 規模 | | | | 柱痕径 | 付属施設 | 備考 | 時期 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 桁行長 | 梁行長 | 長軸方位 | 面積 | | | | |
| F1 | Ⅲけ1 | M2に切られ、H37・H38・H41・OT-1を切る | 長方形 | 5.70 | 4.30 | N－84°－E | 24.51 | － | － | 側柱 | － |
| F2 | Ⅳか4 | H3に切られる？調査区外に延びる | － | － | － | － | － | － | － | － | － |

| 遺構名 | 検出位置 | 重複関係 | 平面形態 | 長軸方位 | 長軸長 | 短軸長 | 壁残高 | 面積 | 備考 | 時期 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| D1 | Ⅲお10 | H19を切る | 円形 | N－110°－W | 1.80 | 1.65 | 0.65 | 1.81 | － | ? |
| D2 | Ⅲこ8 | H8を切る | 円形 | N－73°－W | 0.81 | 0.80 | 0.12 | 0.17 | － | ? |
| D3 | Ⅲこ8 | H8を切り、M2に切られる | － | － | 0.88 | － | 0.14 | － | － | ? |
| D4 | Ⅲこ8 | H8を切る | 円形 | N－90°－W | 0.80 | 0.74 | 0.10 | 0.19 | － | ? |
| D5 | Ⅲえ10 | H21を切り、H19に切られる | 長方形 | － | － | － | 0.85 | － | 底面中央に円形ピット | ? |
| D6 | Ⅳう3 | H12・H23・H28を切る | 円形 | N－52°－E | (2.12) | (2.10) | 1.50 | (2.26) | 所謂「氷室」、墓荼処理土坑 | ? |
| D7 | Ⅲき8 | OT-1に切られる | 長方形 | N－43°－W | 4.10 | (1.75) | 0.50 | － | H24と壁面のピットで連結 | 弥後 |
| D8 | Ⅲあ10 | H1・H5・H16に切られる | － | － | － | － | 0.25 | － | － | － |
| D9 | Ⅲき10 | H39を切り、H24に切られる | 長方形 | N－7°－E | 1.54 | － | 0.14 | － | － | 弥後 |
| D10 | Ⅲか10 | H24・H25に切られる | 不整形 | － | － | － | 0.50 | － | － | ? |
| D11 | Ⅲか8 | H25を切る | 楕円形 | N－83°－E | (2.05) | 1.70 | 0.88 | (2.18) | － | ? |



第2表　竪穴住居址一覧表（2）・掘立柱建物址一覧表・土坑一覧表

| NO | 検出位置 | 長径 | 深度 | 覆土 | NO | 検出位置 | 長径 | 深度 | 覆土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| P 3 | Ⅳあ 4 | − | 0.32 | 10YR5/3 | P 4 | Ⅳい 4 | − | 0.55 | 10YR5/3 |
| P 5 | Ⅳい 4 | 0.25 | 0.31 | 10YR3/2 | P 6 | Ⅳい 4 | 0.24 | 0.25 | 10YR3/2 |
| P 8 | Ⅳけ 2 | 0.20 | 0.22 | 10YR3/2 | P 9 | Ⅳく 2 | 0.29 | 0.18 | 10YR3/2 |
| P 11 | Ⅲこ 10 | 0.22 | 0.08 | 10YR4/2, 10YR7/4 ローム少含 | P 12 | Ⅲこ 10 | 0.32 | 0.22 | 10YR3/2, 10YR7/4 ローム少含 |
| P 13 | Ⅲこ 10 | 0.31 | 0.48 | 10YR3/2, 10YR7/4 ローム少含 | P 14 | Ⅵあ 2 | 0.30 | 0.35 | 10YR3/2, 10YR7/4 ローム少含 |
| P 16 | Ⅳこ 1 | 0.60 | 0.14 | 10YR3/2, 2/2・7/4 ローム少含 | P 17 | Ⅳこ 1 | 0.38 | 0.42 | 10YR3/2, 2/2・7/4 ローム少含 |
| P 22 | Ⅳこ 2 | 0.72 | 0.30 | 10YR4/2, 10YR7/4 ローム少含 | P 23 | Ⅳこ 1 | 0.60 | 0.40 | 10YR4/2, 10YR7/4 ローム少含 |
| P 24 | Ⅳこ 1 | 0.25 | 0.12 | 10YR4/2, 10YR7/4 ローム少含 | P 25 | Ⅲこ 10 | 0.30 | 0.25 | − |
| P 31 | Ⅳお 3 | 0.30 | 0.41 | 10YR3/4 | P 32 | Ⅳう 1 | 0.31 | 0.60 | 10YR6/4 |
| P 33 | Ⅳう 1 | 0.36 | 0.62 | 1 − 10YR4/2, 2 − 10YR6/4 | P 34 | Ⅳう 1 | 0.23 | 0.55 | 1 − 10YR4/2, 2 − 10YR6/4 |
| P 35 | Ⅳう 1 | 0.32 | 0.58 | 1 − 10YR4/2, 2 − 10YR6/4 | P 36 | Ⅳあ 2 | 0.52 | 0.22 | 10YR2/3 |
| P 37 | Ⅳう 1 | 0.60 | 0.58 | 10YR4/2 | P 38 | Ⅳき 1 | 0.35 | 0.52 | 10YR3/2 |
| P 39 | Ⅳお 1 | 0.28 | 0.22 | 10YR3/2 | P 40 | Ⅳお 1 | 0.32 | 0.40 | 10YR3/2 |
| P 41 | Ⅳお 1 | 0.24 | 0.36 | − | P 42 | Ⅳお 1 | 0.28 | 0.20 | − |
| P 43 | Ⅳお 1 | 0.30 | 0.32 | − | P 44 | Ⅳか 1 | 0.25 | 0.40 | − |
| P 45 | Ⅲか 10 | 0.25 | 0.30 | − | P 46 | Ⅳき 1 | 0.28 | 0.12 | − |
| P 47 | Ⅳき 1 | 0.28 | 0.14 | − | P 49 | Ⅳお 1 | 0.28 | 0.12 | − |
| P 50 | Ⅳお 1 | 0.30 | 0.14 | − | P 51 | Ⅳお 1 | 0.28 | 0.22 | − |
| P 52 | Ⅳお 1 | 0.42 | 0.24 | − | P 53 | Ⅳお 1 | 0.40 | 0.18 | − |
| P 54 | Ⅲお 10 | 0.25 | 0.40 | − | P 55 | Ⅲお 10 | 0.30 | 0.35 | − |
| P 56 | Ⅳか 1 | 0.35 | 0.25 | − | P 57 | Ⅳか 1 | 0.16 | 0.15 | − |
| P 58 | Ⅳく 1 | 0.45 | 0.20 | − | P 59 | Ⅳか 3 | 0.18 | 0.16 | − |
| P 60 | Ⅳか 3 | 0.30 | 0.12 | − | P 61 | Ⅳか 3 | 0.24 | 0.20 | − |
| P 62 | Ⅳか 3 | 0.20 | 0.16 | − | P 63 | Ⅳき 1 | − | 0.16 | − |
| P 64 | Ⅳき 1 | 0.30 | 0.12 | − | P 65 | Ⅲき 10 | − | 0.20 | − |
| P 66 | Ⅳお 1 | − | 0.45 | 10YR3/2 | P 67 | Ⅳき 2 | 0.34 | 0.14 | − |
| P 68 | Ⅳこ 2 | 0.42 | 0.12 | 10YR3/2 | P 69 | Ⅳこ 2 | 0.70 | 0.40 | 10YR3/2 |
| P 70 | Ⅳこ 2 | 0.42 | 0.44 | 10YR2/2 | P 71 | Ⅳこ 2 | 0.42 | 0.40 | 1 − 10YR3/2, 2 − 10YR6/4 |
| P 72 | Ⅳこ 2 | 0.40 | 0.14 | 10YR5/3 | P 73 | Ⅳこ 2 | 0.30 | 0.45 | 10YR3/2 |
| P 74 | Ⅳこ 2 | 0.38 | 0.20 | 10YR4/2 | P 75 | Ⅳこ 2 | 0.40 | 0.30 | 10YR4/3 |
| P 76 | Ⅳく 3 | 0.70 | 0.25 | 10YR3/2 | P 77 | Ⅳく 3 | 0.28 | 0.34 | 10YR3/2 |
| P 78 | Ⅳく 3 | 0.32 | 0.14 | 10YR3/2 | P 79 | Ⅳく 3 | 0.45 | 0.18 | 10YR3/2 |
| P 80 | Ⅳい 2 | 0.35 | 0.42 | 10YR3/2 | P 81 | Ⅳけ 3 | 0.60 | 0.38 | 10YR3/2 |

**第３表　ピット一覧表**

# 第Ⅲ章　まとめ

最大の成果としては、獣骨の項でも述べたように「ト骨」の発見が挙げられる。当遺跡が存在する枇杷坂遺跡群ではかって、上直路遺跡において、屋内墓に埋葬された 14 ～ 15 点もの銅鈴をまとった人物が発見されている。今回の調査でも H3 から小破片１点、H25 から同一個体の可能性を有する２点、H39 から１点の計４点の銅鈴が出土している。大きさは総じて小型である。当遺跡群内の弥生後期集落は多くの銅鈴を入手出来うる状態であった事が推測される。また、H25・H37 からは小型ではあるものの翡翠製の勾玉が出土している。以上の副葬品は、装着していた人物が率者であり、性別的には女性、年齢的には子供を想起させる。「ト骨」の存在も含め、少女の巫女の存在を想像させる。

次ぎに集落の変遷についてふれておきたい。今回の調査では弥生時代後期吉田式期～平安時代にかけての集落が検出された。遺構の密集度、遺物の出土量共に佐久地方では屈指の遺跡であろう。特に、資料的に希薄な吉田式期の資料を追加出来たことはひとつの成果であろう。

最後に弥生時代の獣骨を多量に出土した住居址例として、西一本柳遺跡Ⅲ・Ⅳの H41 号住居址を再評価する必要がある。時期的にも吉田式期であるし、骨鏃も伴っている。出土状況もよく似ており、獣骨の種類も日本鹿・猪・巻貝であるなど、共通点が多い。

図版 1

H1 号住居址

←H1 号住居址カマド

↓H2 号住居址

H2 号住居址カマド

図版 2

H3 号住居址

H3 号住居址カマド

H4 号住居址

H5 号住居址

H6 号住居址

H7 号住居址

H5 号住居址カマド

H8 号住居址

図版 4

H9 号住居址

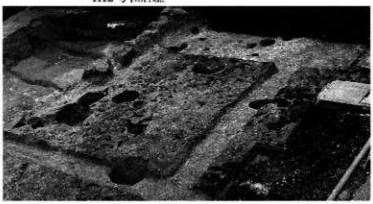
H10 号住居址

H11 号住居址

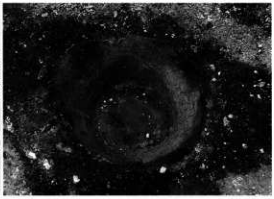
H10 号住居址炉

H12 号住居址

H13 号住居址



H15 号住居址



H15 号住居址炉

H16 号住居址

図版 6

H16 号住居址炉

H17 号住居址カマド

H17 号住居址

H18 号住居址カマド

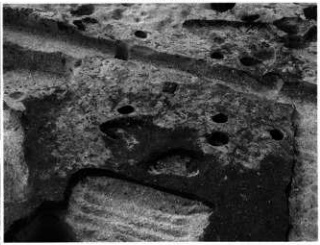
←H18 号住居址

H19 号住居址

H19 号住居址カマド

H20 号住居址

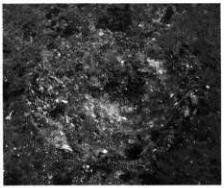
↓H21 号住居址



H22 号住居址

H23 号住居址遺物出土状況→

↓H23 号住居址

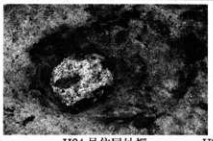


H23 号住居址炉

図版 8

↑H24 号住居址

H24 号住居址鹿角出土状況

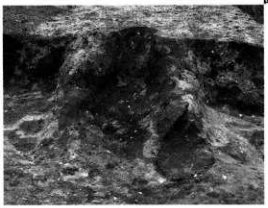


H24 号住居址炉

H25 号住居址銅鏃出土状況→

H25·H31 号住居址

↑H26 号住居址



H26 号住居址カマド

↓H27 号住居址

H27 号住居址カマド

H27 号住居址遺物出土状況

図版 10

H28 号住居址

H28 号住居址炉

H29 号住居址

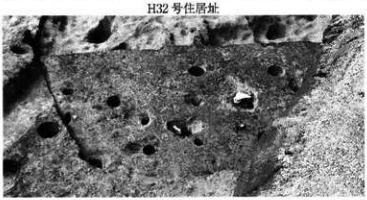
H30 号住居址

H30 号住居址炉 1

H30 号住居址炉 2

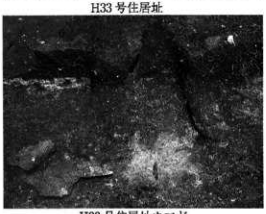
H32 号住居址

H33 号住居址



H34 号住居址

H34 号住居址炉



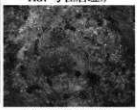
H33 号住居址カマド

図版 12

H36 号住居址

H37 号住居址

H37 号住居址炉



H38 号住居址炉

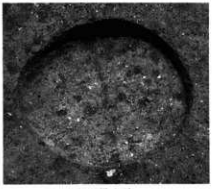
H38 号住居址

H39 号住居址

H40 号住居址

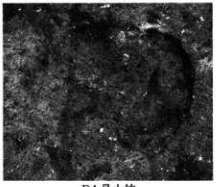
H41 号住居址

D1 号土坑

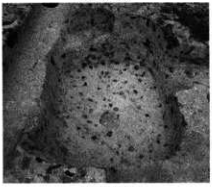


D2 号土坑

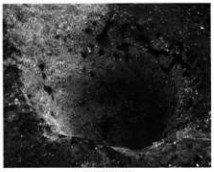
D3 号土坑



D4 号土坑



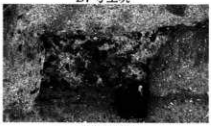
D5 号土坑



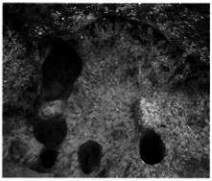
D6 号土坑

図版 14

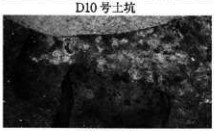
D7 号土坑



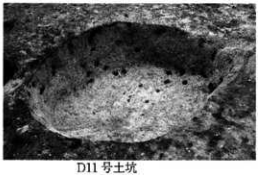
D8 号土坑



D10 号土坑



D9 号土坑



D11 号土坑

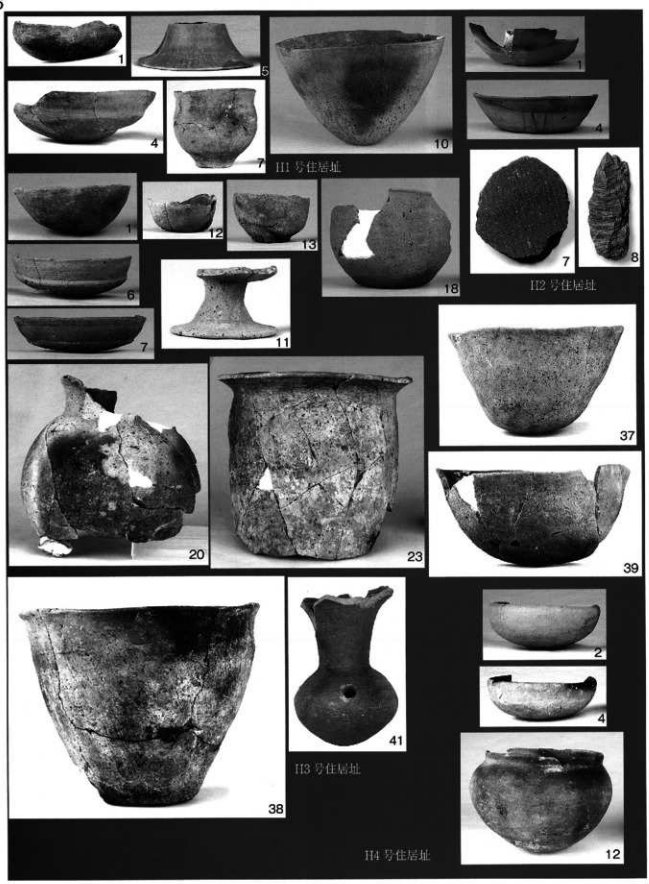
M1 号溝址

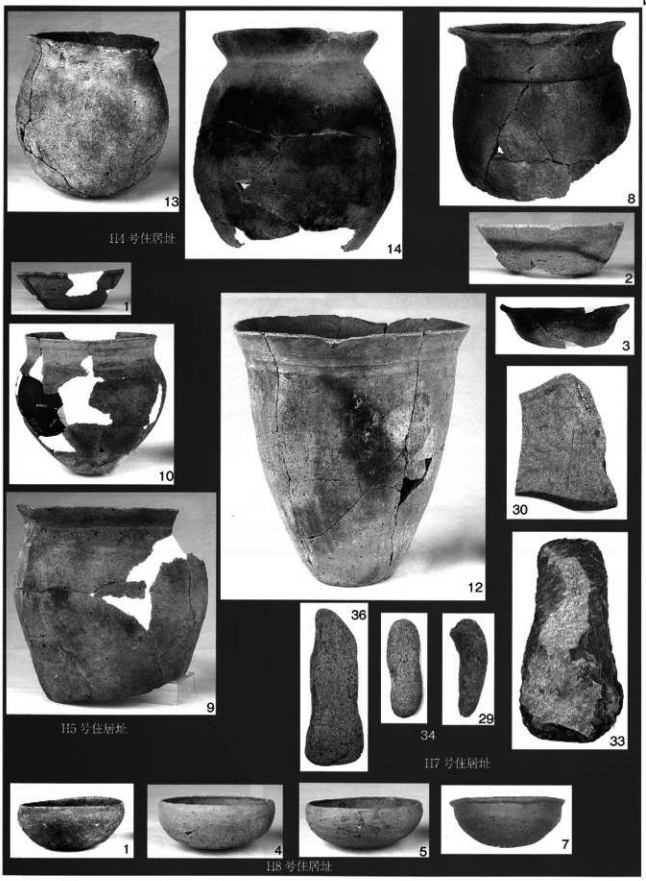
M2 号溝址

M3 号溝址

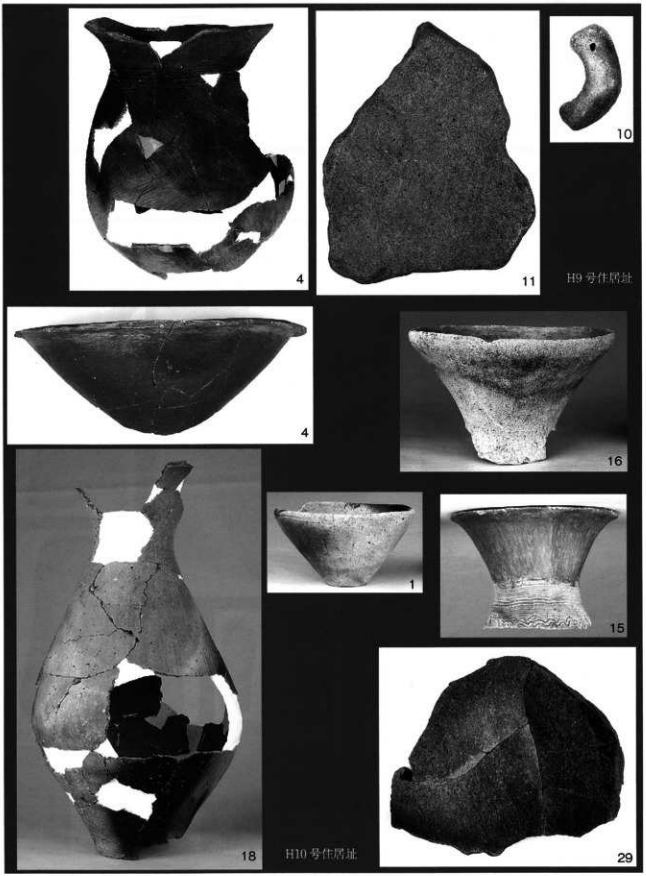
OT1

図版 16


1
5
4
7
10
H1 号住居址
1
4
1
12
13
18
6
11
7
7
8
H2 号住居址
37
20
23
39
38
41
H3 号住居址
2
4
12
H4 号住居址


13
14
8
H4 号住居址
2
1
3
10
12
30
9
36
34
29
33
H5 号住居址
H7 号住居址
1
4
5
7
H8 号住居址

図版 18



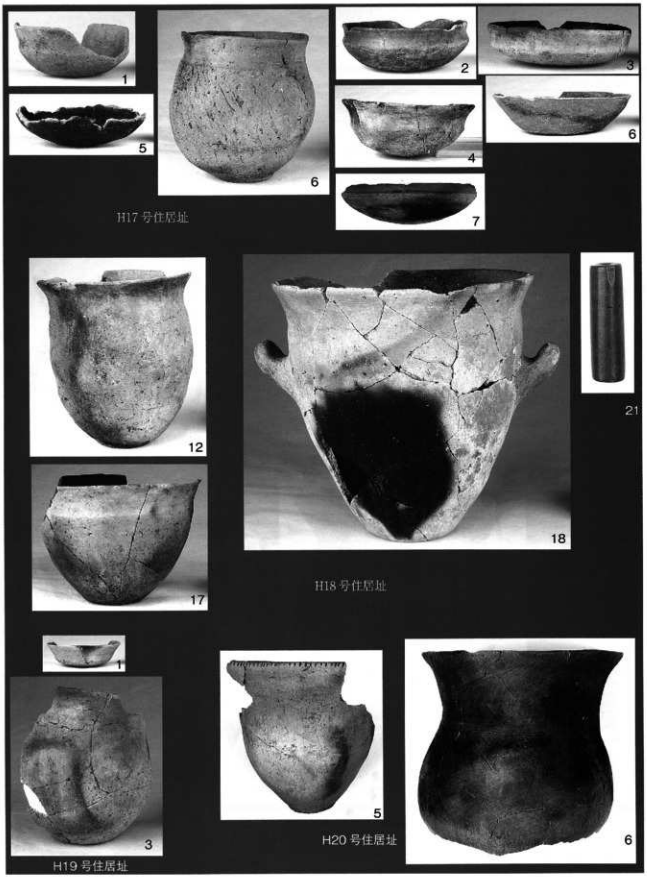
H11 号住居址

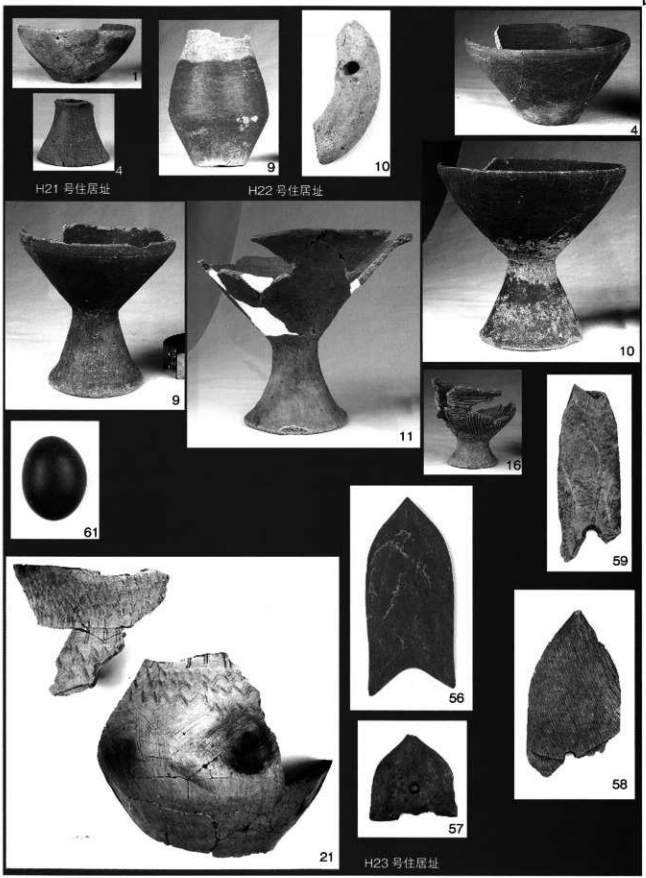
H12 号住居址

H15 号住居址

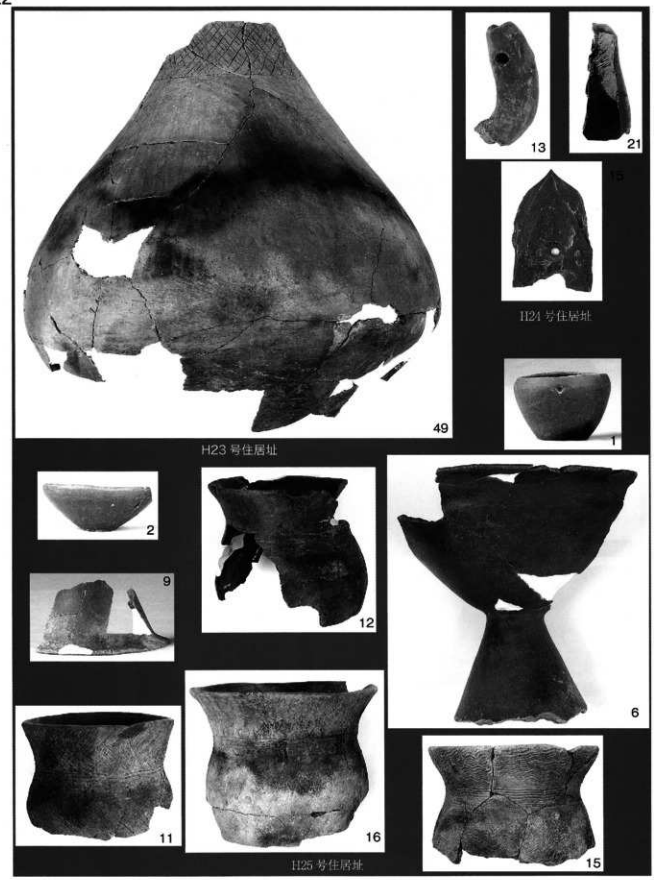
H16 号住居址

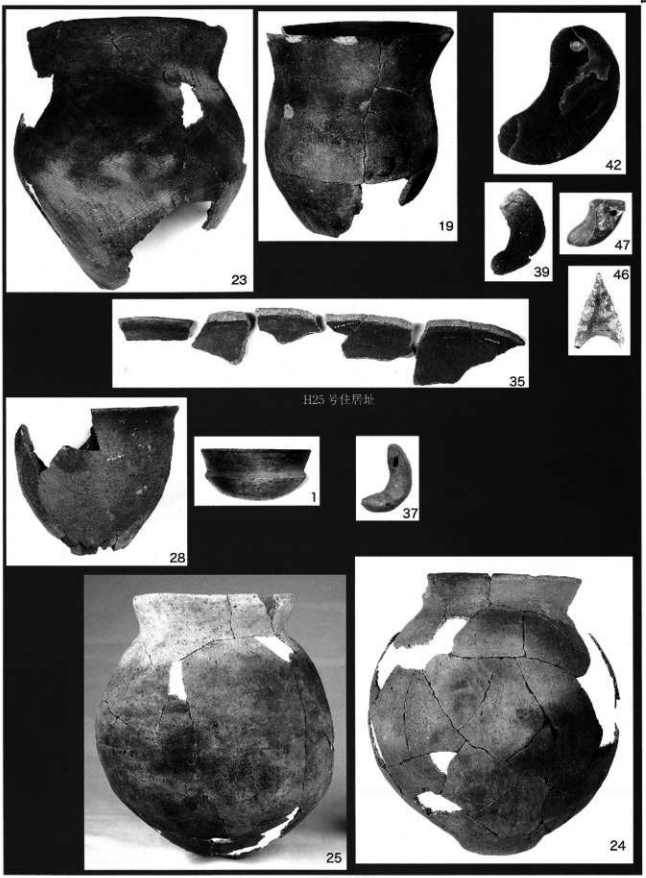
図版 20




1
4
H21 号住居址
9
10
H22 号住居址
4
10
9
11
16
61
59
56
58
57
21
H23 号住居址

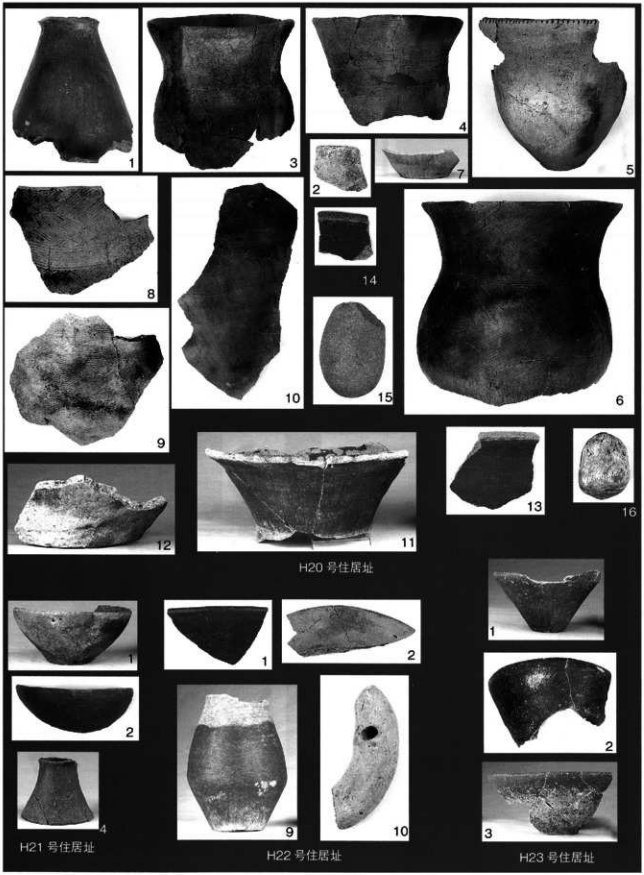
図版 22

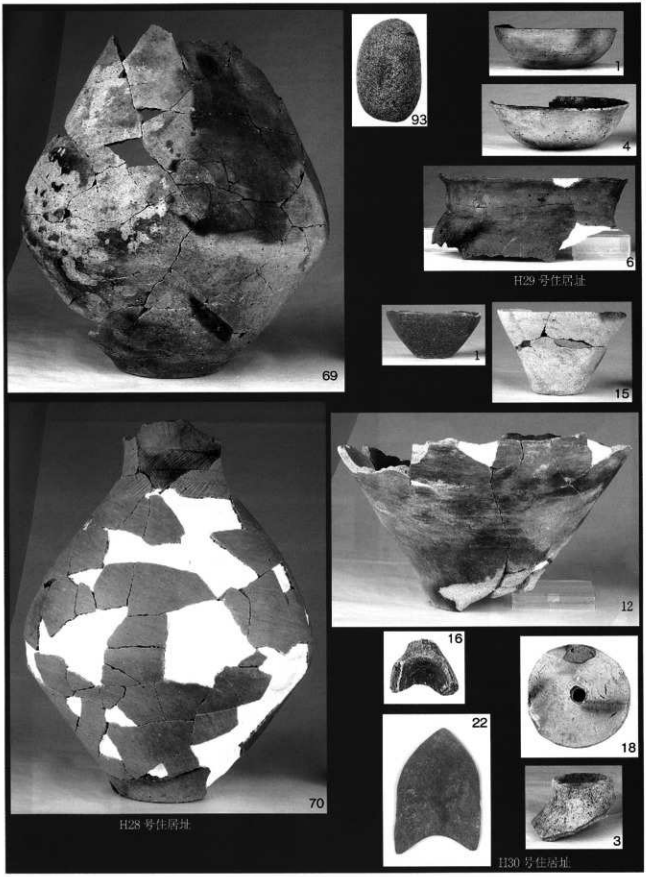





H26 号住居址

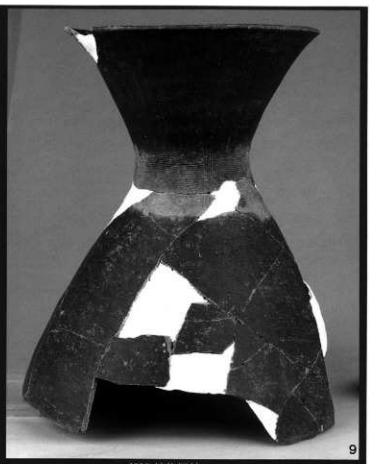
図版 24




69
93
1
4
6
H29 号住居址
1
15
12
70
H28 号住居址
16
22
18
3
H30 号住居址

図版 26

H31 号住居址



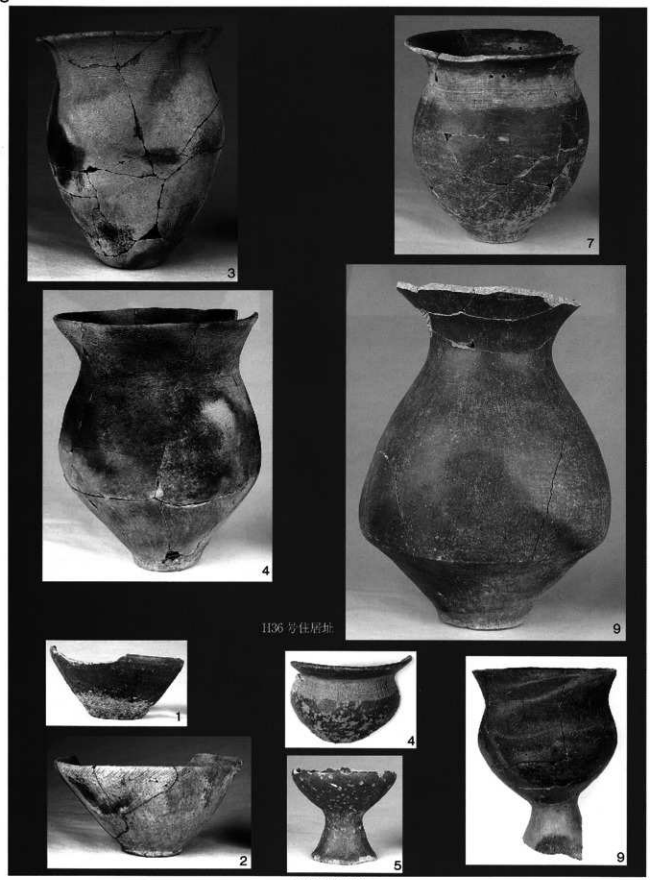

H30 号住居址

H33 号住居址

H34 号住居址

H36 号住居址

図版 28




H37 号住居址

10

11

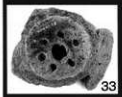
23

12

13

14

H37 号住居址


33

35

36

6

H39 号住居址

12

1

2

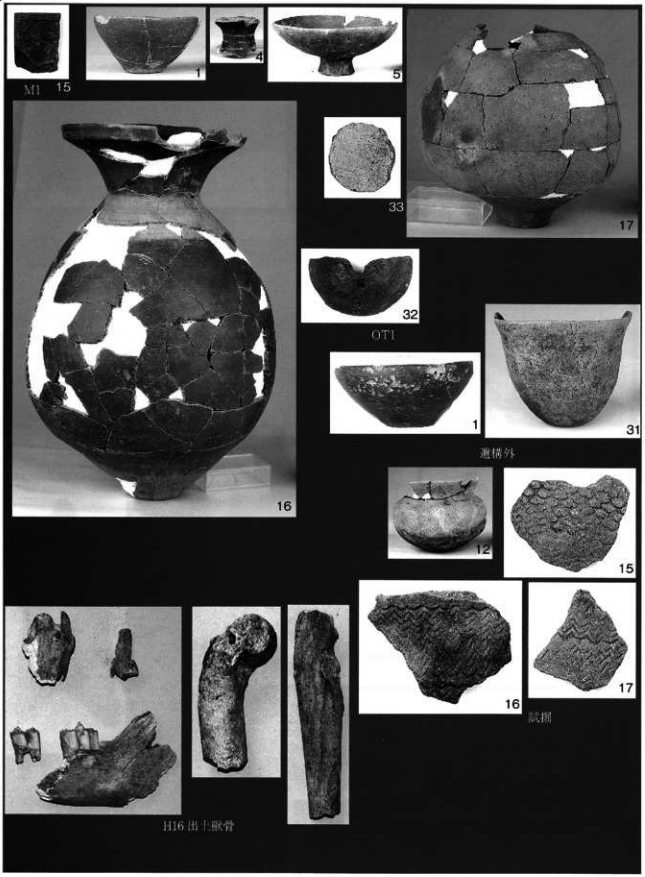
4

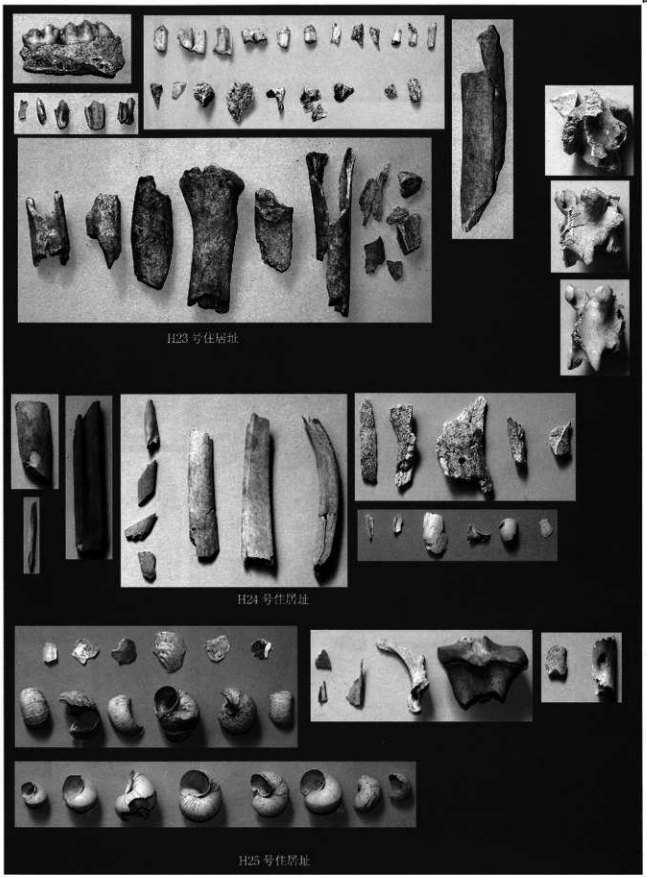
5

6

H40 号住居址

図版 30



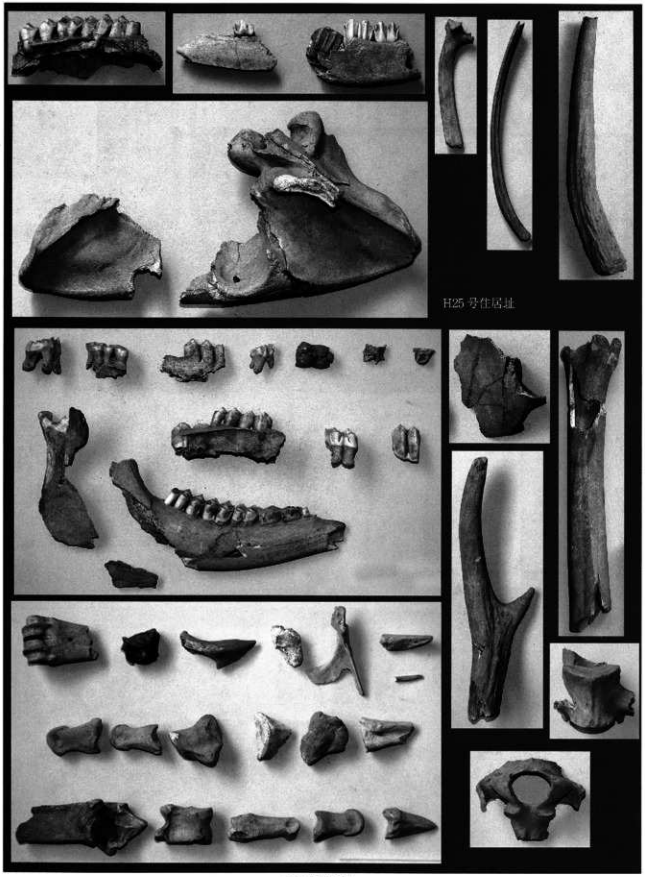


H23 号住居址

H24 号住居址

H25 号住居址

図版 32




H28 号住居址

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | えんしょうぼういせき |
| 書　　名 | 円正坊遺跡Ⅶ |
| シリーズ名 | 佐久市埋蔵文化財調査報告書　第１８５集 |
| 編集者名 | 小林眞寿 |
| 編集機関 | 佐久市教育委員会 |
| 発行機関 | 佐久市教育委員会 |
| 発行年月日 | ２０１１０３３１ |
| 郵便番号 | ３８５－０００６ |
| 電話番号 | ０２６７－６８－７３２１ |
| 住　　所 | 長野県佐久市志賀５９５３ |
| ふりがな | えんしょうぼういせき |
| 遺跡名 | 円正坊遺跡（ＩＥＯ）Ⅶ |
| ふりがな | ながのけんさくしいわむらだ |
| 遺跡所在地 | 長野県佐久市岩村田 |
| 遺跡番号 | ４１ |
| 北　　緯 | ３６，１５，３３．１７１４ |
| 東　　経 | １３８，２９，０８．７１９５ |
| 調査期間 | 2009/05/26-2009/07/31 |
| 調査面積 | 1,133㎡ |
| 調査原因 | 学生寮建設 |
| 種　　別 | 集落跡 |
| 主な時代 | 縄文時代早期／弥生時代後期／古墳時代後期／平安時代 |
| 主な遺構 | 竪穴住居址41（弥後・古後・平）、土坑11基（弥・古・平）<br>掘立柱建物址２（平）、Ｐｉｔ66（弥・古・平）、溝址３（弥・平）<br>円形周溝墓１（弥） |
| 主な遺物 | 縄文土器（早・後）、弥生土器（中・後）、土師器（古・平）、須恵器（古・平）<br>石器、石製品、銅製品、鉄製品、古銭、獣骨、骨角器、貝殻 |
| 特記事項 | 卜骨、銅鈴が出土。 |
| 要　　約 | 調査区の西南方向のマンション建設に伴う円正坊遺跡Ⅵで検出された弥生後期、古墳、平安時代の集落が今回の調査区まで、濃密に展開している事が明らかとなった。<br>出土遺物では弥生時代後期の卜骨、多量の鹿骨・猪骨・貝殻、銅鈴４点、鉄器５点、翡翠製勾玉などの希少遺物が検出された。 |

## 引用・参考文献


| | | |
|---|---|---|
| 1999 | 佐久市埋蔵文化財調査報告書　第73集「西一本柳Ⅲ・Ⅳ」 | 佐久市教育委員会 |
| 1999 | 長野県の弥生土器 | 長野県考古学会弥生部会 |
| 1999 | 考古学と自然科学②　考古学と動物学 | 同成社　西本豊弘・松井章 |
| 2001 | 大阪府立弥生文化博物館図録22　弥生都市は語る | 大阪府立弥生博物館 |
| 2005 | 佐久市埋蔵文化財調査報告書　第126集「聖原」第5分冊 | 佐久市教育委員会 |
| 2006 | 動物考古学の手引き | 独立行政法人　文化財研究所<br>奈良文化財研究所　埋蔵文化財センター |
| 2007 | 佐久市文化財年報15　円正坊遺跡Ⅵ調査報告書－その1－ | 佐久市教育委員会 |
| 2008 | 動物考古学 | 京都大学学術出版会　　松井章 |
| 2008 | 佐久市文化財年報16　円正坊遺跡Ⅵ調査報告書－その2－ | 佐久市教育委員会 |
| 2009 | 佐久市文化財年報17　円正坊遺跡Ⅶ調査報告書－その1－ | 佐久市教育委員会 |
| 2010 | 佐久市文化財年報18　円正坊遺跡Ⅶ調査報告書－その2－ | 佐久市教育委員会 |
| 2010 | 発掘調査のてびき－整理・報告書編－ | 文化庁文化財部記念物課 |



佐久市埋蔵文化財調査報告書　第185集

枇杷坂遺跡群　円正坊遺跡Ⅷ

2011年3月

編集・発行　佐久市教育委員会

〒385-8501　長野県佐久市中込3056

社会教育部　文化財課

〒385-0006　長野県佐久市志賀5953

TEL　０２６７－６８－７３２１

印刷所　キクハラインク有限会社